

常磐自動車道遺跡調査報告 6

大猿田遺跡
(1 次調査)

1996 年 3 月

福島県教育委員会
福島県文化センター
日本道路公団



口絵 大猿田遺跡

常磐自動車道遺跡調査報告 6

大猿田遺跡
(1次調査)

序 文

福島県では、「新世紀ふくしま」の新しい交通体系の確立をめざし、高速交通網の整備をすすめておりますが、それに伴う開発による発掘調査も増加してまいりました。福島空港関係や、磐越自動車道関係でも多くの埋蔵文化財包蔵地の発掘調査が実施され貴重な埋蔵文化財が記録として保存されております。

常磐自動車道は、昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間まで開通し、現在は、いわき中央～いわき四倉間の建設工事が進められております。

この常磐自動車道いわき中央～いわき四倉間にも、先人が残した数多くの文化遺産が埋蔵されており、周知の埋蔵文化財包蔵地を含め29箇所が存在が確認されました。

平成5年度、福島県教育委員会はこれらの埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い、その結果を基に、日本道路公団いわき工事事務所と埋蔵文化財包蔵地の保存協議を重ね、平成6年度より現状保存が困難な埋蔵文化財包蔵地については発掘調査を実施して参りました。

本報告書は、平成7年度に財団法人福島県文化センターへ発掘調査を委託して実施した、いわき市四倉町に所在する大猿田遺跡の発掘調査についての調査成果をまとめたものです。

今後この報告書が地域の歴史を解明するための基礎資料として利用されるとともに、生涯学習等の研究資料として広く県民の皆様に活用していただければ幸いと存じます。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり、ご協力いただいた日本道路公団、(財)福島県文化センターをはじめとする関係機関並びに関係者各位に対し感謝の意を表するものであります。

平成8年3月

福島県教育委員会

教育長 新妻威男

あ い さ つ

平成7年度、磐越自動車道郡山～いわき間の開通により東北自動車道と常磐自動車道が結ばれ、県内の高速交通網の整備はますます充実してまいりました。また常磐自動車道も、いわき中央～いわき四倉間の工事が本格化しております。

財団法人福島県文化センターでは、福島県教育委員会からの委託により県内の大規模開発に先立ち、対象地域内にある埋蔵文化財の調査を実施しております。高速道路にかかる遺跡の調査もその一つで、磐越自動車では昭和60年度から平成5年度に至る9年間に58遺跡の発掘調査を終了し、平成6年度からは常磐自動車道いわき中央～いわき四倉間にかかる遺跡の発掘調査を開始しております。

本報告書は、平成7年度に常磐自動車道建設地内に所在する大猿田遺跡の第1次調査結果をまとめたものです。遺跡からは、古墳時代後期および平安時代の集落跡と奈良時代の須恵器窯跡群が発見されました。これらの資料は、地域の歴史を解明するため大変貴重な資料でありますので、今後発見される資料共々、歴史研究や郷土の理解のために、有効に活用されるよう心から願う次第であります。

最後に、発掘調査にご協力いただきました福島県担当部局・福島県土地開発公社・いわき市土木課・いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団・日本道路公団仙台建設局いわき工事事務所、ならびに地元の方々に深く感謝の意を表します。

なお、埋蔵文化財の保護につきまして、今後ともより一層のご理解とご協力を賜りますようお願いする次第であります。

平成8年3月

財団法人 福島県文化センター

館長 佐藤昌志

結 言

1. 本書は平成6年度常磐自動車道（いわき中央～いわき四倉）関連遺跡として、発掘調査したいわき市四倉町中島字大猿田に所在する大猿田遺跡の報告書である。
2. 当遺跡調査事業は、福島県教育委員会が日本道路公団の協力を得て実施した。
3. 福島県教育委員会では、発掘調査を財団法人福島県文化センターに委託した。
4. 財団法人福島県文化センターでは、事業第二部遺跡調査課の下記の職員を配して、調査に当たった。

文化財主査	大越 道正	文化財主事	酒井 優
文化財主査	佐久間芳雄	文化財主事	吉野 滋夫
文化財副主査	福島 稔	嘱 託	戸田 伸夫（平成7年6月30日まで）
文化財主事	佐藤 祐雄		

ほかに文化財副主査本間宏の参加・協力を得た。

5. 本書の執筆は、安田・佐久間・本間・福島・佐藤・酒井・吉野が行い、文末に文責を明記した。
6. 大猿田遺跡出土須恵器については、奈良教育大学三辻利一氏に分析を依頼した。
7. 大猿田遺跡出土須恵器・粘土・炭化材・10号土坑堆積土については、バリノ・サーヴェイ株式会社に分析を依頼した。
8. 本書に使用した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2.5万分の1地形図を複製したものである。（承認番号）平8複第20号。
9. 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
10. 発掘調査および報告書作成に当たって、下記の方・機関から指導・助言・協力を得た。（順不同・敬称略）

字佐見雅夫・福島県いわき建設事務所・福島県土木部高速道路整備室・いわき市土木部土木課・いわき市役所四倉支所・いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団・広野町教育委員会・小野町総務課・富岡町教育委員会・楢葉町教育委員会・福島土地開発公社いわき支所・いわき市四倉町中島地区および行政区長

用 例

1. 本書における遺構図の用例は、以下のとおりである。
 - (1) 方位 遺構図・地形図の方位は真北を指す。
 - (2) ケバ 原則として遺構内の傾斜面はケバで表現した。
 - (3) 焼土 焼土の範囲は網点で表示した。
 - (4) 柱痕 柱痕跡の明瞭なものは網点で表示した。
 - (5) 土層 遺構外の自然堆積土はローマ数字で表記し、遺構内堆積土は算用数字で表記した。
 - (6) 標高 断面図等の高度を示す数値は、海拔標高を示す。
 - (7) 縮尺 遺構図は原則として、竪穴住居跡が1/50、建物跡が1/40、窯跡が1/80、土坑が1/40である。
2. 本書における遺物実測図の用例は、以下のとおりである。
 - (1) 土器断面 土師器は白ヌキ、須恵器は黒で表示した。植物繊維混和痕を有する縄文土器は、断面を網点で表示した。積み上げ痕は器面では実線、断面では一点鎖線の表記をした。
 - (2) 黒色処理 土師器における黒色処理は、その処理面を網点で表示した。
 - (3) 縮尺 土師器・須恵器・土製品・石製品は1/3、縄文・弥生土器は2/5とした。
3. 本書における写真図版の用例は、挿図番号と対象できるように、遺物写真図版中に「図」を略して示した。
4. 本書で使用した番号は、以下のとおりである。

いわき市… IWK 大猿田遺跡… OSD
遺構外堆積土… L 遺構内堆積土… ℓ 竪穴住居跡… S I ビット… P
掘立柱建物跡… SB 須恵器窯跡… SR 木炭窯跡… SC 土坑… SK
遺物包含層… SH

目 次

序 章		
第1節	調査に至るまでの経過	1
第2節	遺跡の概況	2
第1章	遺跡の環境と調査経過	7
第1節	位置と地形	7
第2節	調査経過	9
第3節	調査の方法	10
第2章	遺構と遺物	11
第1節	基本土層	11
第2節	竪穴住居跡	13
	1号住居跡(13) 2号住居跡(18) 3号住居跡(20) 4・8号住居跡(24) 5号住居跡(31)	
	6号住居跡(34) 7号住居跡(36) 9号住居跡(38) 10号住居跡(41) 11号住居跡(42)	
第3節	竪立柱建物跡	44
	1号竪立柱建物跡(44)	
第4節	竈 跡	46
	1号須恵器竈跡(46) 2号須恵器竈跡(52)	
	1号木炭竈跡(54) 2号木炭竈跡(55) 3号木炭竈跡(56)	
第5節	粘土探掘坑	57
第6節	土 坑	63
	1号土坑(63) 2号土坑(64) 3号土坑(64) 4号土坑(66) 5号土坑(66) 6号土坑(66)	
	7号土坑(68) 8号土坑(68) 9号土坑(70) 10号土坑(70) 11号土坑(72) 12号土坑(72)	
第7節	遺物包含層	72
	第1遺物包含層(72)	
第8節	遺構外出土遺物	74
第3章	考 察	81
第1節	遺物について	81
第2節	遺構について	86
第3節	遺跡の性格と問題点	88
付 章		
付章1	出土須恵器の蛍光X線分析	奈良教育大学 三辻 利一 125
付章2	出土須恵器の鉍物陰土分析	バリノ・サヴヴェイ株式会社 129
付章3	出土炭化材の樹種同定	バリノ・サヴヴェイ株式会社 142
付章4	リン・カルシウム分析	バリノ・サヴヴェイ株式会社 146

挿 図 ・ 表 目 次

【挿 図】		
図1	常磐自動車道(いわき中央～いわき西)位置図	1
図2	周辺の表層地質図	3
図3	周辺の遺跡	5
図4	大旗田遺跡1次調査区位置図	7
図5	大旗田遺跡遺構配置図(Ⅰ)	8
図6	基本土層図	11
図7	大旗田遺跡遺構配置図(Ⅱ)	12
図8	1号住居跡	14
図9	1号住居跡カマド	15
図10	1号住居跡遺物出土位置	16
図11	1号住居跡出土土師器・須恵器	17
図12	2号住居跡 出土土師器・須恵器	19
図13	3号住居跡	21
図14	3号住居跡カマド	22
図15	3号住居跡出土土師器・須恵器・ 土製品・弥生土器	23
図16	3号住居跡遺物出土位置	24
図17	4・8号住居跡	26
図18	4号住居跡カマド、8号住居跡煙道	27
図19	4号住居跡遺物出土位置	28
図20	4号住居跡出土土師器	29
図21	4・8号住居跡出土土師器・須恵器・ 土製品・縄文土器	30
図22	5号住居跡	32
図23	5号住居跡カマド、出土土師器・須恵器	33
図24	6号住居跡・カマド、出土須恵器・土製品	35
図25	7号住居跡 出土土師器	37
図26	7号住居跡カマド、出土土製品	38
図27	9号住居跡・カマド	39
図28	9号住居跡出土土師器・須恵器	40
図29	10号住居跡 出土土師器	41
図30	11号住居跡	43
図31	1号竪立柱建物跡、ビット群	44
図32	1号須恵器竈跡	47

図33	1号須恵器窯跡出土須恵器 (1)	48
図34	1号須恵器窯跡出土須恵器 (2)	49
図35	1号須恵器窯跡出土須恵器 (3)	50
図36	1号須恵器窯跡出土須恵器・弥生土器	51
図37	2号須恵器窯跡	53
図38	2号須恵器窯跡出土須恵器	54
図39	1号木炭窯跡、出土須恵器	55
図40	2号木炭窯跡	56
図41	3号木炭窯跡	57
図42	粘土探掘坑群平面図	58
図43	粘土探掘坑群断面図 (1)	59
図44	粘土探掘坑群断面図 (2)	60

図45	粘土探掘坑群断面図 (3)	61
図46	1～3号土坑、2号土坑出土土器	65
図47	4～7号土坑	67
図48	8・9・11号土坑	69
図49	10・12号土坑、10号土坑出土土器・須恵器	71
図50	第1遺物包含層、出土土器・須恵器	73
図51	遺構外出土土器	75
図52	遺構外出土須恵器・土製品・石製品	76
図53	遺構外出土縄文土器・弥生土器	77
図54	大塚田遺跡出土土器群	85
図55	遺構変遷図	87
図56	カマド敷紀開連図	89

[表]

表1	周辺の遺跡一覧	6
表2	掘立柱建物跡柱穴測定表	45
表3	ピット群計測表	45
表4	大塚田遺跡粘土探掘坑一覧表	62
表5	大塚田遺跡出土土器一覧表 (1)	79
表6	大塚田遺跡出土土器一覧表 (2)	80

写真図版目次

1	調査区全景 (南東から)	93
2	調査区近景 (東から)	93
3	1号住居跡全景 (東から)	94
4	1号住居跡	94
5	2号住居跡全景 (東から)	95
6	2号住居跡	95
7	3号住居跡全景 (東から)	96
8	3号住居跡	96
9	4・8号住居跡全景 (東から)	97
10	4・8号住居跡 (1)	97
11	4号住居跡カマド全景 (東から)	98
12	4・8号住居跡 (2)	98
13	5号住居跡全景 (東から)	99
14	5号住居跡	99
15	6号住居跡全景 (南から)	100
16	6号住居跡	100
17	7号住居跡全景 (東から)	101
18	7号住居跡	101
19	9号住居跡全景 (南東から)	102
20	9号住居跡	102
21	10号住居跡全景 (東から)	103
22	11号住居跡全景 (南から)	103
23	1号掘立柱建物跡全景 (南から)	104
24	1号掘立柱建物跡	104
25	1号須恵器窯跡全景 (西から)	105
26	1号須恵器窯跡断ち割り全景 (西から)	105
27	1号須恵器窯跡遺物出土状態 (東から)	106
28	1号須恵器窯跡断ち割り断面 (西から)	106
29	2号須恵器窯跡・3号木炭窯跡全景 (南西から)	107
30	1号木炭窯跡全景 (東から)	107

31	1号木炭窯跡	108
32	2号木炭窯跡全景 (南東から)	108
33	1～16号粘土探掘坑全景 (北から)	109
34	1～16号粘土探掘坑	109
35	1～6号土坑	110
36	7～12号土坑	111
37	1号遺物包含層断面 (南東から)	112
38	1号遺物包含層断面 (南西から)	112
39	1号住居跡出土土器	113
40	1号住居跡出土須恵器	114
41	2号住居跡出土土器・須恵器	114
42	3号住居跡出土土器	114
43	3号住居跡出土土器・須恵器・土製品・弥生土器	115
44	4号住居跡出土土器	115
45	4号住居跡出土土器	116
46	4号住居跡出土土器・須恵器・土製品・縄文土器	117
47	6号住居跡出土須恵器・土製品	117
48	6号住居跡出土土製品	118
49	7号住居跡出土土器・土製品	118
50	9号住居跡出土土器	118
51	10号住居跡、1号須恵器窯跡出土土器・須恵器	119
52	1号須恵器窯跡出土須恵器 (1)	120
53	1号須恵器窯跡出土須恵器 (2)	120
54	1号須恵器窯跡出土須恵器 (3)	121
55	1号須恵器窯跡出土須恵器 (4)	121
56	1号須恵器窯跡出土須恵器 (5)	122
57	2号須恵器窯跡出土須恵器	122
58	1号遺物包含層、遺構外出土土器・須恵器・縄文土器・土製品・石製品	123
59	遺構外出土縄文土器・弥生土器	124

序 章

第1節 調査に至るまでの経過

昭和44年埼玉県三郷～茨城県千代田石岡間の基本計画に始まった常磐自動車道は、その路線を徐々に北に延ばし、昭和63年3月には基本計画茨城県千代田石岡～福島県いわき四倉間の内、いわき中央インターチェンジ（以下、ICと言う）までが開通している。未開通であったいわき中央IC～いわき四倉までの区間については、遅れて平成元年に整備基本計画路線となり、現在平成9年の供用開始にむけて建設計画が進められている。なお、いわき四倉以北の延伸分については、宮城県亘理までの基本計画がすでに決定しており、平成5年には福島県いわき四倉～福島県富岡間の施行命令が出されている。

財団法人福島県文化センターが、常磐自動車道に関わる埋蔵文化財の調査に携わったのは、平成5年2月に持たれた福島県企画調整部総合交通課・日本道路公団仙台建設局いわき工事事務所・福島県教育委員会文化課・いわき市教育委員会文化課・いわき市都市整備課・財団法人いわき市教育文化事業団・財団法人福島県文化センターの7者協議からである。協議ではいわき中央IC～いわき四倉間の自動車道路線内に所在する埋蔵文化財の取扱について話し合わせ、その結果好間町および平赤井・平窪地区に所在する13遺跡についてはいわき市教育委員会文化課並びに財団法人いわき市教育文化事業団が調査を実施し、四倉町大野地区に所在する16遺跡については福島県教育委員会並びに財団法人福島県文化センターが調査を担当することを確認した。

上記経緯の中で福島県教育委員会では平成5年度から新規事業として常磐自動車道関連埋蔵文化財調査に着手し、福島県文化センターにその調査を委託している。

平成5年度の常磐自動車道関連埋蔵文化財調査は手始めとして試掘調査計画が策定され、福島県文化センターでは地権者からの承諾書が揃うのを待って、

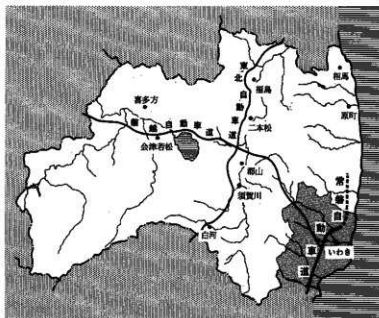


図1 常磐自動車道（いわき中央～いわき四倉）位置図

10月20日から担当分である16遺跡の総面積162,600㎡を対象に調査を開始している。その結果、12月23日までに9遺跡69,900㎡の路線内要保存面積を確定したが、調査条件が整わず試掘が実施できなかった箇所や、調査対象範囲外まで遺跡範囲の拡張が認識できた遺跡については、後日の再調査によって保存面積を確定することとした。

平成6年度は5遺跡(対象面積53,700㎡)の追加試掘を行い、前年度の成果と合わせて路線内遺跡要保存面積を確定したほか、久原A遺跡を初めとする5遺跡の発掘調査を実施している。6年度も承諾書取得などの条件整備作業との調整を余儀無くされ、その都度調査員・作業員の移動及び配置換えで対応したが、開始時期の遅れは取り戻せず、5遺跡34,100㎡の全てを調査終了したのは暮れの押し迫った12月の下旬であった。

平成7年度は発掘調査を中心に事業規模が拡大したことから、調査員30名というこれまでに例のない調査体制がしかれ、4月中旬の調査開始を目指して年度初め早々から準備作業に着手している。4月11日には日本道路公団仙台建設局いわき工事事務所・福島県教育委員会文化課・財団法人福島県文化センターの3者協議を行い、未買収地の存在・伐採木の処理・排土置き場の確保など、調査開始までの問題点を確認した。また、4月12日にはいわき市教育委員会文化課・財団法人いわき市教育文化事業団・福島県教育委員会・財団法人福島県文化センターの4者で調査地区が隣接する白岩堀ノ内遺跡について、福島県文化センター側から調査計画を説明するという形で協議を行い、調整を計っている。7年度調査は上記協議の翌日である4月13日より表土除去作業を開始し、全スタッフをそろえた本格的な作業始動は翌週の4月18日からであった。(安田)

第2節 遺跡の環境

地理的環境

福島県浜通り地方南部にある、いわき市は、阿武隈高地東縁部から太平洋岸まで帯状に延びる浜通り丘陵の南端部に位置している。地勢を概観してみると、阿武隈高地東部(標高400～600m)から、それに続く樹枝状に広がりながら海岸へ延びる丘陵地帯(50～100m)、その丘陵に挟まれた段丘と谷底平野、そして海岸に広がる海岸平野から形成されている。これらの地域の地質は、花崗岩を主体とする深成岩および変成岩を基盤としている。それらを覆うように、主に古第三紀・新第三紀の堆積岩層が丘陵を形成している。段丘および平野は第四紀になってから谷に堆積した礫・砂・泥層からなっている。またこの周辺には3つの大きな断層(ニッ箭断層・赤井断層・湯ノ岳断層)と、そのあいだに数多くの小断層が走っている。これらの断層により丘陵地帯には複雑な表面地質が形成されている。

今回調査した大猿田遺跡など2遺跡が位置する大野地区は、いわき市のほぼ中央を占める平地区の北隣に位置する。行政上はいわき市四倉町の一部で、四倉町西部の山間地帯を指し、仁井田川河流域がこれに当たる。この地域は、阿武隈高地東縁部から海岸に向かって広がる丘陵地帯を開折し

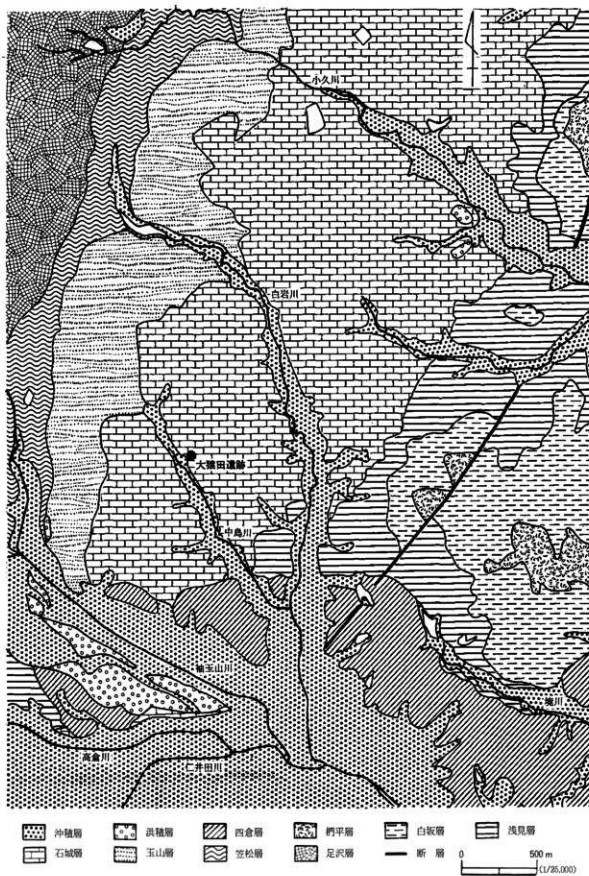


図2 周辺の表層地質図

(鈴木敬治他 1994『土地分類基本調査—平—』を基に作成)

ながら東に流れる仁井田川とその支流、その流域に広がる幅の狭い谷底平野と丘陵袖部に部分的に見られる小規模な段丘から形成されている。段丘は薬王寺地内の高倉川両岸で見ることができる。

大猿田遺跡の位置する中島地内は、大野地区を北西から南東に走る二ッ筋断層の北側に位置する。断層の北側に位置する中島地内の地質は、基盤層（花崗岩質岩石、八茎変成岩類等）の上に、固結堆積物からなる足沢層、笠松層、玉山層、石城層（細粒～中粒砂岩・礫岩・石炭層）、浅貝層、白坂層と、半固結堆積物からなる四倉層が、西から東へと堆積している。これらの地層は、古生代二疊紀から新生代第三紀にかけて形成されたものである。また、特異な地層として、玉山から八茎地域にかけての丘陵地帯に、固結度の著しく低い袖玉山層（新生代第四紀）が堆積している。仁井田川とその支流である中島川流域では、これらの層をさらに覆って未固結堆積物からなる洪積層と沖積層（新生代第四紀）が堆積している。なお、今回調査した大猿田遺跡の地質は、Ⅰ区は石城層、Ⅱ・Ⅲ区は沖積層である。

いわき市の気候は、暖流である日本海流が流れる太平洋の影響を強く受ける。平地区の年平均気温13.7度、1月の平均気温3.5度、8月の平均気温25.2度、年間温度差21.7度で、夏涼しく冬暖かい浜通り地方特有の海洋性温暖気候を読み取ることができる。同じいわき市にあって阿武隈高地内に位置する三和（海拔370m）、上達野（海拔125m）では、1月の平均気温-0.2度、2.4度、8月の平均気温23.8度、25.2度であることから、共通する夏の涼しさよりも、冬の暖かさのほうに平地区の気候の特徴がある。また、夏には南風が割合に多く吹き降雨量が多く、冬は乾いた北西風が吹き乾燥した晴天の日が続く。年平均降水量は1,389mmで、比較的降水量は少ない。（佐藤）

歴史的環境

常磐自動車道の建設に伴い、今年度発掘調査が行われた大猿田遺跡の所在するいわき市四倉町周辺の歴史的環境について概観したい。

旧石器・縄文時代に属する主な遺跡として、タタラ山遺跡・済戸貝塚・和具遺跡（図3-7・18・20）があげられる。タタラ山遺跡の発掘調査では、旧石器時代のナイフ型石器1点と縄文時代早期中葉の田戸下層式、後葉の茅山下層式期、中期末の大木10式、後期前葉の網取式、後期中葉の加曾利B式の土器が出土している。また、タタラ山遺跡では、縄文時代中期末～後期中葉に比定される住居跡も発見されている。縄文時代中期後半に比定される済戸貝塚では、大木9～網取Ⅱ式期の土器と土器片錘が発見されていることから、網漁が行われていた可能性が高いと考えられている。縄文時代の散布地としては、他に、石器類が採集された和具遺跡がある。

弥生時代になると、中期に属する稲作関連の遺跡が発見され、そのなかでも戸田糸里遺跡（図3-16）は、水路・畦畔に区画された弥生時代中期前半の水田跡が発見された。また水田耕作土壌からは、当時の米粒が炭化した状態で発見されている。袖作遺跡（図3-21）では、籾痕のある土器片や石包丁・柱状石斧が発見されている。丘陵上に立地する玉山遺跡では、弥生時代中期末の天神原式に属する土器棺が出土し、同じく丘陵上に立地するタタラ山遺跡・白岩堀ノ内遺跡（図3-2）



図3 周辺の遺跡

(国土地理院 1/25,000 地形図 承認番号平8 東複第20号)

表1 周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	遺跡の概要
1	大猿田遺跡	四倉町中島字大猿田	縄文～平安時代の集落跡 平成7年度発掘調査
2	白岩堀ノ内遺跡	四倉町中島字三反田・大久保	縄文～近代の集落跡 平成7年度発掘調査
3	白岩堀ノ内館跡	四倉町白岩字堀ノ内・北ノ作他	中世の城館跡
4	永田横穴墓群	四倉町白岩字永田	古墳～平安時代の横穴墓・散布地
5	白岩横穴墓群	四倉町白岩字上川子田・永田	古墳～奈良時代の横穴墓
6	中島館跡	四倉町中島字中島	中世の城館跡
7	タタラ山遺跡	四倉町玉山字北タタラ山・小高倉・勝倉他	縄文～近世の集落跡・須恵窯跡 平成6年度発掘調査
8	御城古墳群	四倉町玉山字御城	古墳
9	山田小湊遺跡	四倉町山田小湊字小湊	古墳～平安時代の散布地
10	玉山館跡	四倉町玉山字御城	中世の城館跡
11	玉山遺跡	四倉町玉山字牧ノ下・林崎・塚後	弥生～古墳時代の散布地
12	玉山古墳群	四倉町玉山字林崎	古墳 玉山1号墳(全長118mの前方後円墳)を含む
13	林崎遺跡	四倉町玉山字林崎	弥生～古墳時代の散布地
14	川子田横穴墓群	四倉町戸田字川子田	古墳時代の横穴墓
15	戸田館跡	四倉町戸田字仲作	中世の城館跡
16	戸田条里遺跡	四倉町戸田地内	弥生～近世の水田遺構他 昭和63年・平成元年発掘調査
17	長友館跡	四倉町長友字大町・大宮作	中世の城館跡
18	浜戸貝塚	四倉町長友字浜戸・熊ノ作	縄文時代の貝塚
19	比丘尾館跡	四倉町山田小湊字馬上	中世の城館跡
20	和具遺跡	四倉町下御生字和具	縄文時代の散布地
21	袖作遺跡	平北神谷字袖作	弥生・平安時代の散布地
22	大帯代遺跡	平網古大字帯代	弥生～中世の散布地 網谷遺跡を含む
23	大森館跡	四倉町大森字館	中世の城館跡
24	西原遺跡	四倉町狐塚字西原	奈良・平安時代の遺物包含地 昭和58年調査
25	狐塚館跡	四倉町狐塚字古川	中世の城館跡

からも天神原式に属する土器や石器が多数出土している。

古墳時代に属する遺跡として注目されるものは、玉山古墳群(図3-12)の中で全長118mを測る玉山1号墳である。形態は前方後円墳で、採集された遺物などから5世紀代の構築と推定されている。またこの古墳の大きさは県内第2位である。その他の古墳は、永田横穴墳群・御城古墳群・川子田横穴古墳群(図3-4・8・14)がある。集落遺跡では、古墳時代後期の竪穴式住居が検出された、戸田条里遺跡・タタラ山遺跡・白岩堀ノ内遺跡などがある。

奈良・平安時代に属する遺跡では、土坑・溝跡・竪穴式住居や掘立柱建物跡・須恵器窯跡が発見されたタタラ山遺跡がある。平成7年度に行われた発掘調査により、白岩堀ノ内遺跡では、奈良・平安時代の水田跡が発見されている。そのほか土師器の散布地として山田小湊遺跡(図3-9)、遺物包含地としては、西原遺跡(図3-24)などがある。

中世この地域は、岩城郡内に置かれた好嶋荘に含まれ、好嶋荘は、鎌倉将軍を領主とする関東御領に属し、承元2年(1208)に、東荘と西荘に分割された。当地域は衣谷郷、大野郷からなる好嶋東荘に属し、千葉氏一族である大須賀道通の子孫が代々預所職を努めた。中世の城館跡としては、白岩堀ノ内館跡・中島館跡・玉山館跡・戸田館跡・長友館跡・狐塚館跡(図3-2・6・10・15・17・25)が丘陵部や浜堤上に分布しているのが確認されている。

近世では当地域は当初岩城領・鳥居領・岩城藩領・幕府領・常陸笠間藩領・幕府領・岩城平藩領などの変遷を辿り、廃藩置県後、磐前県に所属し福島県に合併された。(佐藤)

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 位置と地形

大猿田遺跡は、福島県いわき市四倉町大字中島字大猿田内に位置する。本遺跡は、JR常磐線いわき駅から北東へほぼ9.1km、四倉駅から北西へ約4.3kmの地点にあり、南側には県道小野・四倉線が、東側には県道いわき・浪江線が走っている。

本遺跡は、阿武隈高地東縁から伸びる山地性丘陵の東端付近及び谷底平野に立地する。調査区Ⅰ区が立地する丘陵の西側には、仁井田川の支流である中島川が流れ、谷底平野が北西から南東の方向に傾斜しながら形成されている。谷底平野にある調査区Ⅱ・Ⅲ区は、標高30～35mの地点に立地している。この谷底平野を形成した中島川は、南側約1.5km先で仁井田川と合流する。合流地点の標高は約10mで、遺跡との比高差は20～25mを測る。つまり、中島川が形成した谷底平野の

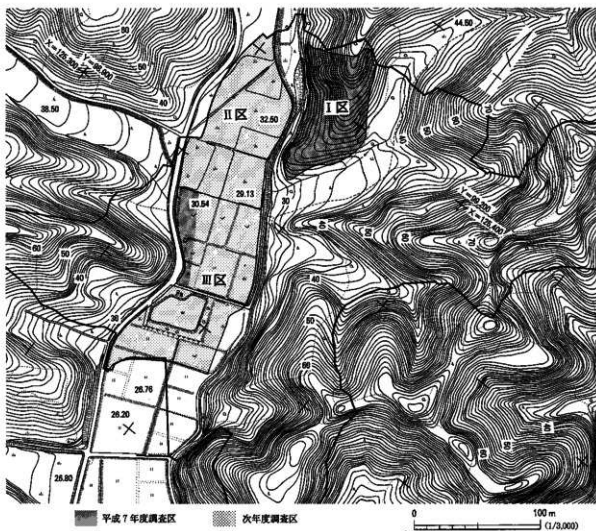


図4 大猿田遺跡1次調査区位置図

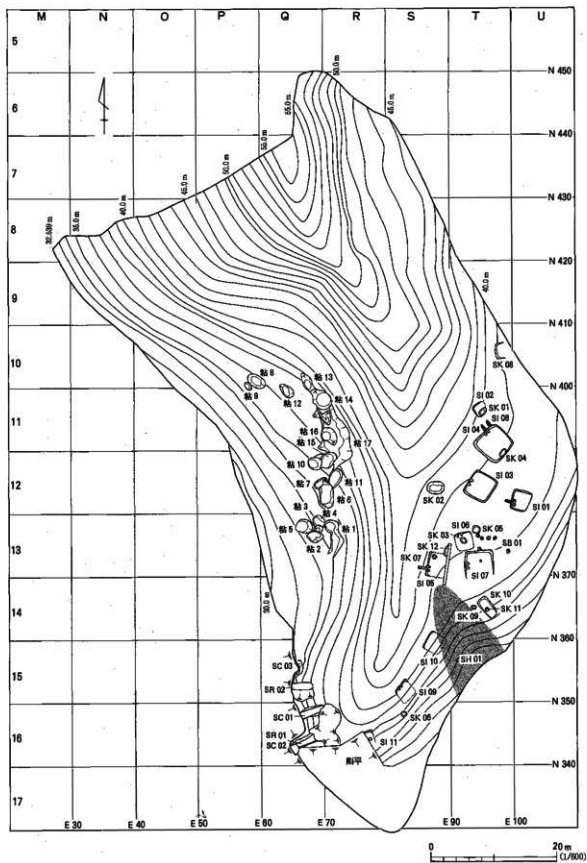


図5 大猿田遺跡遺構配置図(1)

傾斜角度は約2度で、沖積地としてはかなり傾斜した地形とすることができる。

今回調査対象となったⅠ区は、県道いわき・浪江線の西側に隣接する山地性丘陵から西端に張り出した尾根に立地する。標高は調査区北側で最高56mを測る。Ⅰ区の表層地質を見ると、古第三紀に堆積した細粒～中粒砂岩・礫岩・石炭層・粘土層等の堆積物からなる石城層の分布地になっている。粘土層の介在が少ない斜面上位から中位にかけては、土砂の流出が激しく、調査区西側中央部の斜面上位では最大斜度45度を測る。調査区西側の斜面中位は厚い粘土層が広がるため土砂の流出は少なく、斜度10度ほどの緩斜面が続く。この部分に粘土採掘坑群が存在する。尾根の南東側では、標高37mの高さにおいて基盤が露出するため侵蝕が進まず、やや広い平坦面が形成されている。この地点に古墳時代～平安時代の遺構群が構築されている。この北東側の谷部には湧水池があり、常時少量の水が湧き出ている。

主に平成8年度の調査対象となる本遺跡のⅡ区とⅢ区は、中島川によって形成された谷底平野である。中島川は、現在はⅠ区の丘陵裾部に沿って流れているが、試掘調査による所見を見ると、かなり流路が変化していることが予測される。

(西井)

第2節 調査経過

平成5年から6年にかけての3次にわたる試掘調査で、大猿田遺跡の工区内面積は、中島川西岸の水田部15,800㎡と、東岸の丘陵部4,200㎡と推定された。当初の計画では、全体を一度に調査する予定であったので、水田部の発掘調査のために、平成6年、栃福島県建設技術センターに湧水処理法の調査を依頼した。この結果を受けて、同年度中に鋼矢板による遮水措置を行った。また、平成7年2～3月には、調査区内を流れる農業用水路を掘削・整備して付け替え、伐採後の残木移動と作業小屋・駐車場の用地を造成して、きたる発掘調査に備えた。

発掘調査は、平成7年4月中旬から開始した。水田部の調査によって多量に排出される土砂は、以前からの道路公団との申し合わせにより、中島川東側の谷部に置くこととした。ただ、谷部だけでは水田部15,800㎡からの排土を置ききれないため、東側丘陵部の調査を先行させ、この調査が完了し次第、丘陵斜面にも土を置くこととした。丘陵部の調査は順調に進み、4月下旬には南東側斜面の竪穴住居跡群の調査が本格化した。西斜面からは粘土採掘坑が多数検出された。同様の遺構が工区北端まで存在する可能性があったため、丘陵部の調査範囲を拡張した。この時点で、丘陵部の調査面積は6,000㎡となった。

5月16日、降り続いていた雨が豪雨となり、調査区と排土置き場からの土砂が泥水となって中島川に流入した。増水した中島川から、田植え直後の水田に泥水が溢れそうな状況となった。調査員は、総出で夜の巡回と危険箇所の手当てを行った。この時の状況から、排土を東側斜面に捨てるには、厳重な土止め工事と配水管の設置が必要との認識にいたり、6月から暗渠管の埋設と堰堤の構築作業を行った。堰堤が完成しないうちに、6月14日、再び大雨に見舞われた。夜半になって

再び土砂の流出があり、地元行政区長と道路公団職員も現場にかけつけた。水田は無事だったが、川岸が崩壊するなどの被害が生じた。大雨の際には暗渠管では水を飲み切れないことが歴然とした。

6月16日、県高速道路整備室と県いわき建設事務所による現地視察があり、日本道路公団いわき工事事務所をまじえて安全管理上の連絡体制と対処の方法について協議を行った。7月4日には、関係機関により、今後排出される土砂の処理方法をめぐる協議が行われた。この時に提出された案について検討を重ねた結果、大猿田遺跡の水田部（Ⅱ・Ⅲ区）に排出土砂を仮置きするという方針が7月下旬に定まった。結果として、水田部の調査は次年度に先送りすることとなったが、工事計画優先されるボックスカルバート構築部分の1,000㎡のみは平成7年度内に調査することで合意に達した。この決定を受けて、谷部周辺の排土を移動するとともに、丘陵部の調査を終え、8月からボックスカルバート部分の調査に着手した。3面の遺構面が確認されたが、木簡が出土するなど、大きな成果が得られた。9月29日、平成7年度の調査を終了した。調査面積は、丘陵部6,000㎡、ボックス部が1,000㎡×3面で3,000㎡相当、計9,000㎡相当である。（吉野）

第3節 調査の方法

大猿田遺跡における座標の設定にあたっては、国土座標IX系のX；125,000・Y；99,000地点をNS000・EW000の測量原点とし、Xを北（N）、Yを東（E）と読み替えて、国土座標の下3桁を用いて調査区内の座標を表示することにした。例えば、N250・E120の地点は、原点より北に250m・東に120mの地点を表している。座標杭の設定にあたっては、日本道路公団が設置した予定路線の中心杭を利用して、計算により真北を求め、それから南北方向と東西方向にそれぞれ10mごとに杭を設定した。

グリッドの設定にあたっては、座標の設定によりできた南北10m・東西10mのマスを一単位として、南北にアラビア数字で1・2・3・・・、東西にアルファベットでA・B・C・・・、という記号を与え、この組み合わせでグリッドを表示することにした。このほか、便宜的な区割として、平成7年度調査した丘陵部をⅠ区、L23グリッドからR20グリッドを結ぶラインから、北側をⅡ区、南側をⅢ区とした。

遺跡の掘り下げに際しては、木根が密に茂る表土のみを重機で除去し、以下の土層はすべて人力で掘り下げた。遺構内堆積土はℓとアラビア数字の組み合わせ、遺構外堆積土はLとローマ数字の組み合わせで表示した。

調査記録は、原則として1/20の縮尺で作図したが、土坑や焼土遺構などの小さいもの、遺物出土状況などについては1/10の縮尺で作図した。また、調査区の全体図は、光波測距儀を用いて1/200の縮尺で測量した。写真は6×4.5cmのモノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルムのほか、35mmのモノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルムを併用した。さらにフォトバルーンによる空中写真撮影も行い、遺跡全体の状況や遺構の集中状況を記録するように努めた。（佐藤）

第2章 遺構と遺物

大猿田遺跡（第1次調査）調査区内の比高差は約26mである。検出された遺構は、竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡1棟、須恵器窯跡2基、木炭窯跡3基、粘土採掘坑16基、土坑12基、遺物包含層1カ所である。遺構の分布は、大別すると3つの同一の性格を有する遺構群に分かれる。竪穴住居跡・土坑は南東向きの緩斜面に、窯跡群は西向き斜面の河川で浸食された段丘面に、粘土採掘坑群は西向き斜面の標高32～38mにわたり掘り込まれている。なお、尾根上には遺構・遺物ともに検出はされていない。

出土遺物は、縄文土器が89点、弥生土器が88点、土師器が2,872点、須恵器が937点、土製品が8点、木炭177点である。

第1節 基本土層

大猿田遺跡1区は、石城層が構成層である丘陵地に立地する。本遺跡の基本土層は、調査区の東半部と西半部では、両者の基本土層が対応しないために、それぞれ分けて記載する。西半部については粘土採掘坑の項で記載する。

調査区東半部における土層は、L I・L II・L III a・L III b・L IV・L Vの6層に分層された。遺構検出面はL III bからL IVで、一部L Vで検出された遺構もある。L Iは表土にあたり、層厚は

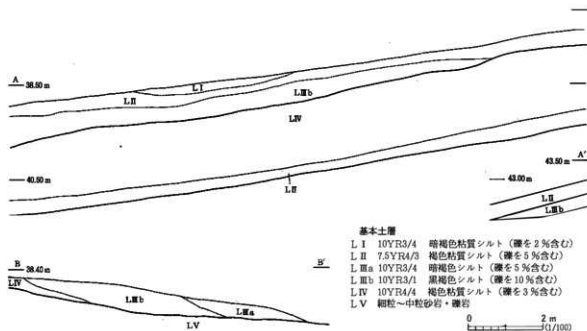


図6 基本土層図

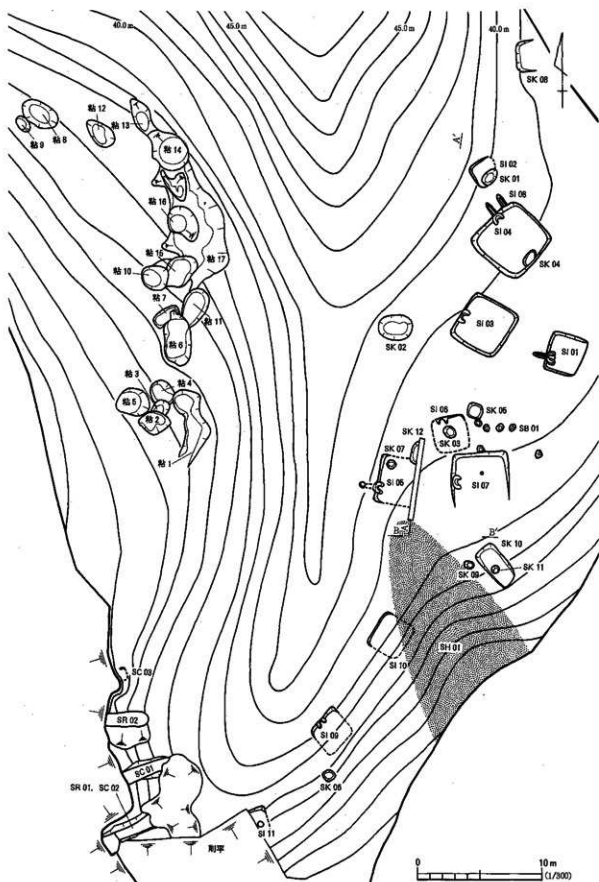


図7 大猿田遺跡遺構配置図(2)

10～50cmである。斜面中段部において比較的厚い堆積を示す。LⅡ～LⅢbは調査区中段に堆積する。層厚は20～40cmである。平安時代の遺構は、LⅡから掘り込まれているとみられるが、この層から遺構は検出し得なかった。そのなかでもLⅢaはT14グリッド周辺で確認されたもので、この付近の堆積にとどまる。層厚は10～40cmである。LⅢbは沢部の堆積層とみられ、層厚は10～60cmである。古墳時代の遺構は、この層から掘り込まれている。LⅣは調査区東半部のほぼ全面に堆積するが、LⅤが露出しているU12・V13グリッドで欠落している。この層からは縄文時代前期前葉の土器が出土している。

(吉野)

第2節 竪穴住居跡

調査区からは11軒の竪穴住居跡が検出された。その分布は東向き・南向き斜面に位置し、時代的な区分は古墳時代のものが4軒、平安時代のものが7軒である。そのなかでも平安時代の住居跡は遺存状態が悪く、特に9～11号住居跡については遺構の大半が流失していた。

1号住居跡 S I 01

遺構 (図8・9, 写真3・4)

1号住居跡は東向き斜面の中段U12・V12グリッドLⅤで検出された。他の遺構との重複はない。堆積土は4層に分層され、自然堆積の状態を示す。また、ℓ4の堆積状態から東・西壁付近に掘り上げ土を土堤状に積み上げられたことが推察される。

遺構の平面形は、長軸が3.0m、短軸が2.9mで、東側半分はほぼ整った方形であるが西半分は不整形を呈する。斜面下方に当たる南壁の一部は流失したものが欠落している。長軸方位はN70°Wを示す。周壁は緩やかな角度で立ち上がり、遺存高は7～53cmで斜面上方にあたる北東部が遺存良好である。

床面からは貼床の敷設や柱穴・壁溝などは確認されていないが、その中央部に焼土範囲が確認された。当初はこの部分を鍛冶炉の痕跡と考えて、床面に25cm間隔に組んだ方眼ごとに床面近くの堆積土を採取した。採取した堆積土は、ふるい・磁石などを用いて鍛造薄片の有無を確認したが検出はされないことから、酸化範囲は鍛冶炉ではないことが判明した。

カマドは北壁のやや西側寄りの位置に付設されていた。西側袖部ではLⅤを掘り残して構築されていたが、東側袖部では掘り込みの上部に構築されていた。その掘り込み内には、ℓ13褐色粗砂が施設され防湿の役割を果たしていたとも考えられる。両袖とも被熱を受けている。燃焼部は内側で37cm、奥行きは33cmである。煙道部は燃焼部に対して東側に傾いて付設されており、幅は内側で24cm、長さは90cmである。

遺物 (図10・11, 写真39・40)

1号住居跡からは土師器が268片、須恵器が6片出土した。そのなかから図示できたものが図

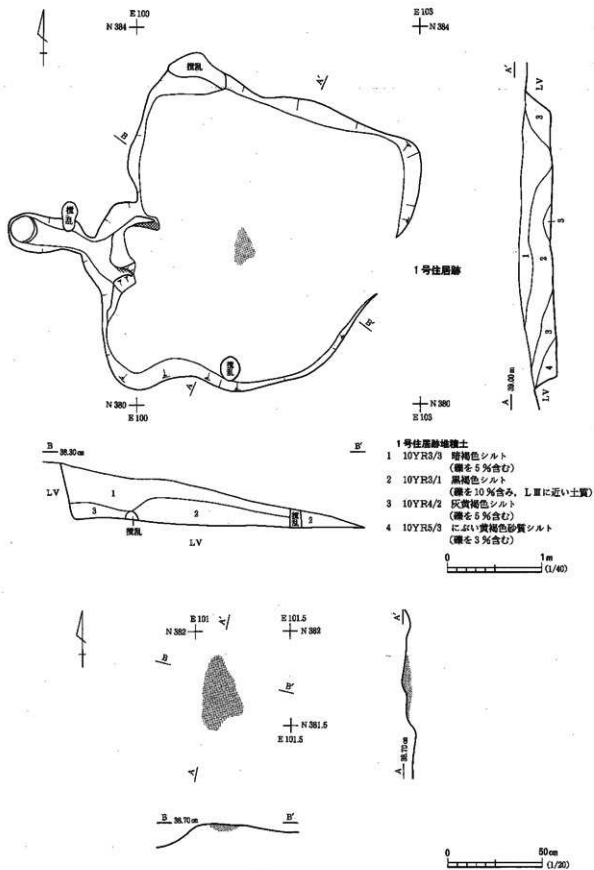


図8 1号住居跡

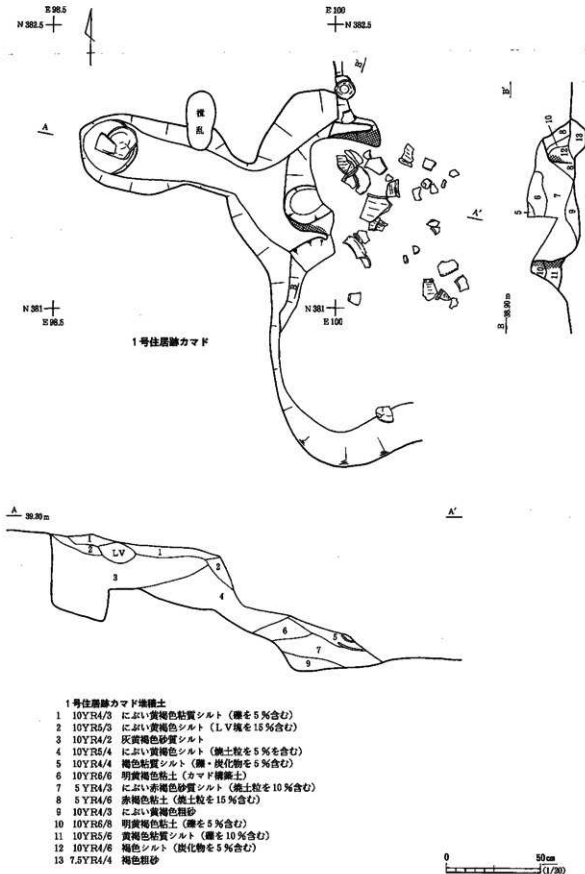


図9 1号住居跡カマド

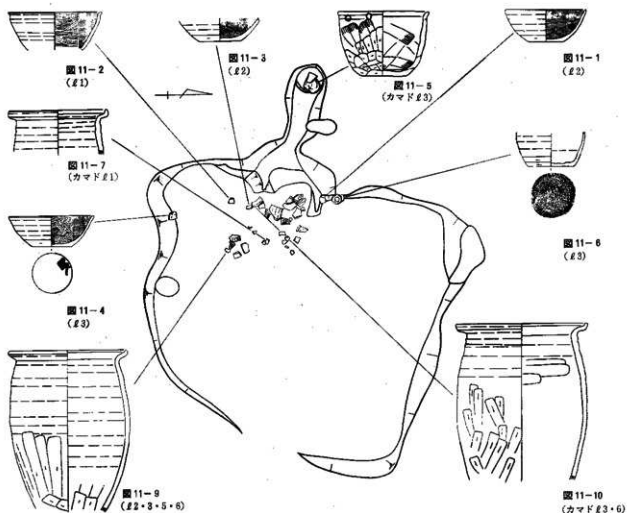


図10 1号住居跡遺物出土位置

10・11である。遺物はいずれも堆積土中から出土したものである。しかし、カマド周辺から出土した土器については、カマド廃絶後に投棄されたことも考えられるので、住居跡の時期はこれらの土器を参考とした。

土師器杯(図11-1～4) いずれもロクロ整形によるもので、内面にはミガキ・黒色処理が施されている。1・3・4の底部調整は、体部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ再調整が施されている。4の底部外面には墨書が認められている。この文字は国立歴史民俗博物館平川 南氏の教示によると「貸」の異字体である可能性が高いとのことであった。

土師器小型壺(図11-5・6) 5は非ロクロ整形で、6はロクロ整形である。5の口縁部には、成形時の指頭痕や器面からは粘土組織み上げ痕がみられる。6は体部下半から底部にかけての部位で底部の切り離しは回転糸切りによるもので、体部下端に回転ヘラケズリ再調整が施されている。

土師器甕(図11-7～10) いずれもロクロ整形によるものである。口縁部の形態も「く」字状に強く屈曲し、口縁部先端が直立している。9・10はともに体部上半がロクロナデ、下半がヘラケズリが加えられている。出土した破片にも同一個体とみられる底部がみられないことから、甕を転

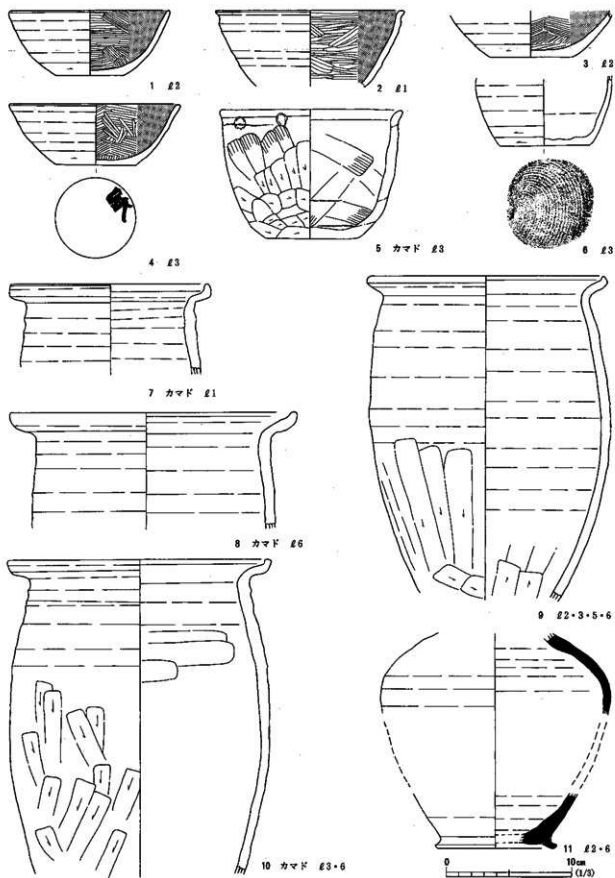


図11 1号住居跡出土土師器・須恵器

用した甎か、土器を廃棄する際に底部を欠いたものとみられる。

須恵器長頸壺(図11-11) 肩部と体部下端から底部にかけての部位で、高台は貼り付けによるものである。胎土は砂粒を多く含む。さらに肩部と底部の外表面は熱変により海綿状となっている。

まとめ

1号住居跡はLVを掘り込んでいることから、調査区から検出された平安時代の住居跡と比較しても遺存良好なものである。床面からの出土遺物がないうえに、時期設定は困難であるが堆積土中の出土遺物から、9世紀中葉の時期が考えられる。(吉野)

2号住居跡 S I 02

遺構(図12, 写真5・6)

2号住居跡は南向き斜面の上部、T11グリッドLVから検出された。1号土坑と重複する。1号土坑の堆積土の上に本住居跡が構築されていることから、新旧関係は本住居跡の方が新しい。

堆積土は3層に分層された。ℓ3は1号土坑を埋めた際に人為的に敷設された貼床と思われる。ℓ1とℓ2については、斜面上部から流れ込んだ堆積過程を示しており、自然堆積と思われる。

本住居跡は、LVである岩盤を掘り込んで構築されたもので、東側半分が流出によって失われている。遺存する平面形は、南北が約1.8m、東西が約2.1mの方形を呈する。床面は凹凸があり、斜面下部に向かって緩やかに傾斜している。周壁は、西壁と北壁の一部を検出し、東・南壁と北壁の一部は欠失していた。壁は緩やかに立ち上がり、北壁で最大壁高26cmを測る。

明確なカマドは確認されていないが、西壁中央部に壁を削ったとみられる窪みと、壁上部に熱を受けたと思われる酸化面、更にその付近の床面からもわずかではあるが被熱による酸化面が2カ所認められ、カマドの痕跡と考えた。西壁中央部の壁の窪みの西側には、長さ40cm、幅15cm、深さ3cmにわたり岩盤を溝状に掘り込んだ形跡がある。西辺に対しほぼ90°の方角で斜面上部に向かって伸びていることから、ここにカマド煙道部が存在したと考えられる。

ピットは、全部で5個検出された。P1は、北西隅に位置し、壁を掘り込んで作られている。平面形は、長軸20cm、短軸18cmの方形を呈し、床面からの深さは22cmを測る。本住居跡の支柱穴と考えられる。P2～5は、床面からの深さが5～9cmといずれも浅く、機能については不明である。

遺物(図12, 写真41)

本住居跡からは、土師器の復元個体2点、土師器片が54点、須恵器片が1点、炭化物が2点出土した。そのなかから図示できたものが図12である。

土師器杯(図12-1) 堆積土中から出土した土師器杯である。内面にヘラミガキと黒色処理が施されている。外面の調整は体部上半がヨコナデ、体部下半にはヘラケズリ調整が認められる。

土師器甕(図12-2) カマド上面と思われる場所から出土した口縁部から体部が遺存する土師器甕である。外面の調整は、タタキメをロクロナデで消した痕跡が見られ、頸部の一部にタタキメを

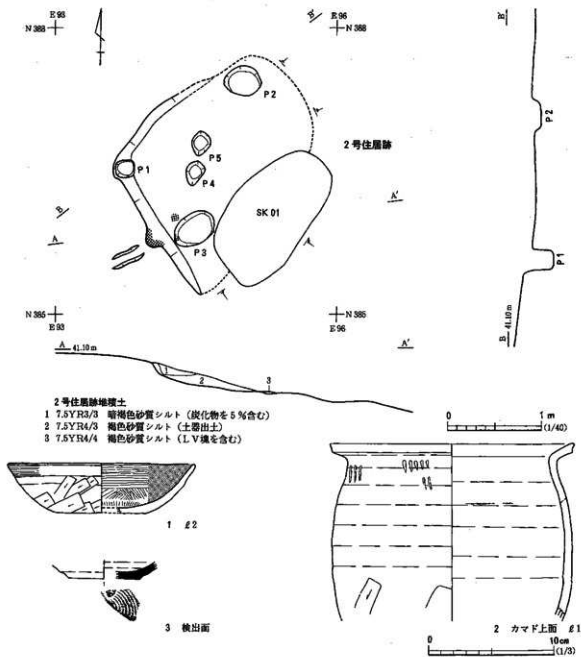


図12 2号住居跡，出土土師器・須恵器

残す。体部下半にはヘラケズリ調整が施されている。内面はロクロナデである。

須恵器杯(図12-3) 検出面より出土したロクロ整形による須恵器杯の底部破片である。内面・外面の調整はロクロナデである。底部に回転糸切り痕が観察される。

まとめ

本住居跡は、床面の遺存範囲から約2m四方の小型住居跡と推定される。カマド及び煙道部は、ほとんど遺存しておらず、壁面と床面の被熱範囲から西壁側に存在したと推定される。

所属時期については、カマド上面と思われる場所から出土した土師器甕の特徴から推定して9世紀中葉と考えられる。(佐久間)

3号住居跡 S I 03

遺 構 (図13・14, 写真7・8)

調査区の東部T12グリッドに位置し、丘陵の緩斜面上位に立地する。北半部はL V上面、南半部はL IV上面より暗褐色土の方形プランを検出したため精査を行った結果、堅穴住居跡であることが判明した。近接して北側約2 mに4号住居跡、南東側約3 mの地点に1号住居跡、西側約3 mの地点に2号土坑が存在する。遺構内堆積土は3層に分層でき、自然堆積と考えられる。ℓ 1は褐色砂質シルトでL IIの流入土、ℓ 2は暗褐色砂質シルトでL III aに近似する。ℓ 3は周壁の崩落土と考えられる。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は東西4.1 m、南北4.2 mを測る。長軸方向は、N38°Wを示す。周壁は、北壁の西半部はやや外傾しながら立ち上がるが、その他は急角度で立ち上がる。壁高は緩斜面上位の北壁が高く、南壁にいくにしたがいその値を減じていく。最大値は北壁の西隅で34 cmを測る。床は北半部はL V、南半部はL IVを床面としており、若干の凹凸はあるがほぼ平坦である。

住居施設としてカマド、ピット、壁溝を検出した。ピットは7個検出した。P 1～4はその位置、規模から支柱穴と考えられる。規模は長径が19～30 cm、短径17～25 cm、深さ30～42 cmを測る。P 5は北壁隅、P 2と隣接して存在する。堆積土にはぶい黄褐色土で木炭物を含み、土師器片が出土した。貯蔵穴の可能性も考えられるが、性格は不明である。P 6は東壁中央部、カマドと対をなす位置にある。さらにP 6の底面を掘り込みP 7が存在しているが、P 6・7ともに性格は不明である。壁溝は東側及び北側の一部を除き検出した。幅が10～15 cm、深さ5～7 cmで断面形は「U」字状を呈し、底面は北西から南東にかけて緩やかに傾斜している。

カマドは西壁中央部よりやや南寄りに作られているが、煙道部はトレンチによりすでに削平を受け喪失しており、燃焼部のみが残存していた。遺存する全体の規模は、両袖の全幅が約95 cmである。袖部は、右袖が長さ50 cm・最大幅27 cm、左袖が長さ55 cm・最大幅38 cmを測り、L IIIを4～5 cmの高まりで残し、その上に褐色砂質シルト及び明黄褐色粘土を貼り合わせて構築されている。燃焼部の規模は焚口幅40 cm、奥行約50 cmで底面はほぼ平坦である。カマド内堆積土は3層に区分され、ℓ 1がL Vの流入土、ℓ 2が木炭粒、焼土、粘土ブロックを含むことから天井崩落土、ℓ 3は天井崩落以前の堆積土と考える。酸化部は左袖で顕著に見られ、断ち割りの結果、厚さ4 cmに達することが判明した。

遺 物 (図15・16, 写真42・43)

本住居跡からは弥生土器片25点、土師器片186点、須恵器片9点出土した。このうち、本遺構に伴う遺物は図15-1～5と考えられる。カマド右袖の壁際から横に倒れた状態で重なって出土した図15-1・4及び図15-2・3は床面と出土遺物の間に2～8 cmの薄さで褐色砂質シルトが堆積している状況から、カマド付近に置かれていたものがずり落ちた可能性が高い。また、カマドの燃焼部内から出土した図15-5も、住居廃絶時に遺棄された可能性が高いと考えられる。

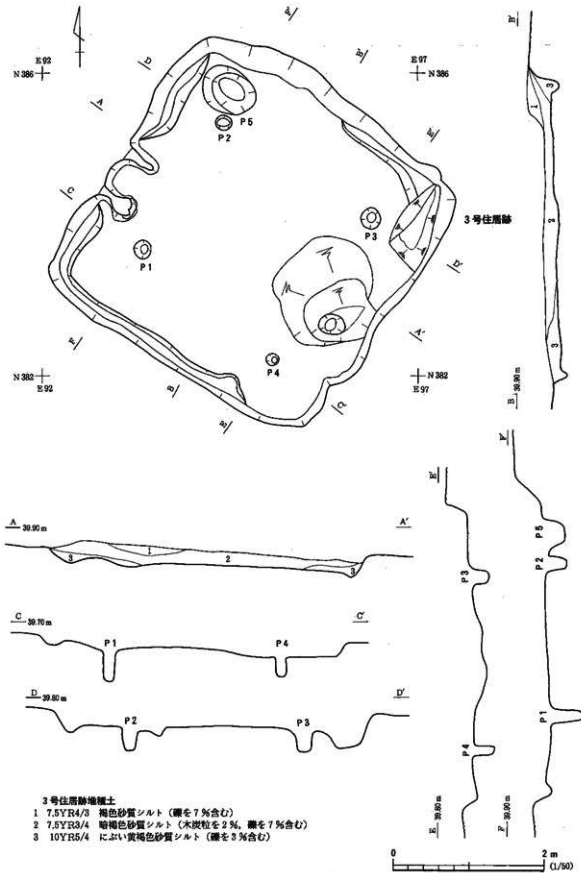


図 13 3号住居跡

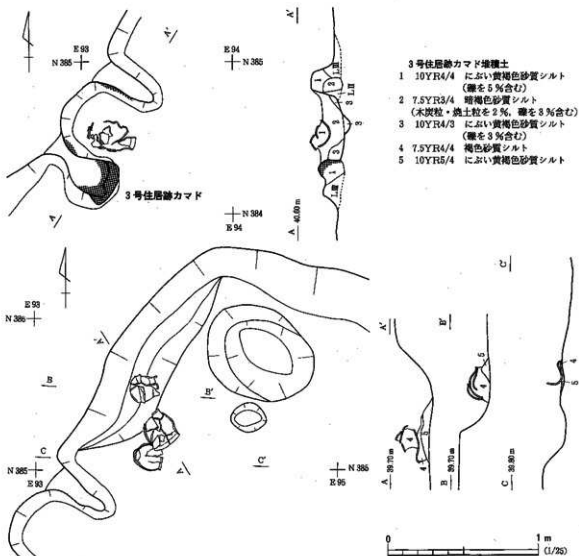


図14 3号住居跡カマド

土師器椀(図15-1) 非ロクロ調整で、底部は丸底で全体的に半球形を呈し、口縁部と体部の境に段を持つ。また、口縁部は緩やかに外反する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、体部にはヘラケズリの後ヘラミガキが施され、内面はヘラミガキの後、黒色処理が施されている。

土師器壺(図15-2・4~6) いずれも非ロクロ調整である。2は口縁部と体部の境に軽い段を持ち、口縁部が緩やかに外反する。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、体部は主に縦方向へのヘラケズリの後ヘラナデ、底部外面にも縦方向へのヘラケズリが施されている。内面は、口縁部にヨコナデ、体部にはヘラナデが施されている。4は下腹れて、口縁部から体部の境にかるい段を持つ。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリ、底部は指オサエ、内面は口縁部にヨコナデ、体部にヘラミガキが施されている。5は長胴形で、外面の調整は口縁部にヨコナデ、体部は主に縦方向へのヘラナデ、内面は口縁部にヨコナデ、体部は横方向へのヘラナデが施されている。6は口縁部から体部上位にかけて遺存する。調整は、内外面とも口縁部にヨコナデ、体部にはヘラナデが施されている。

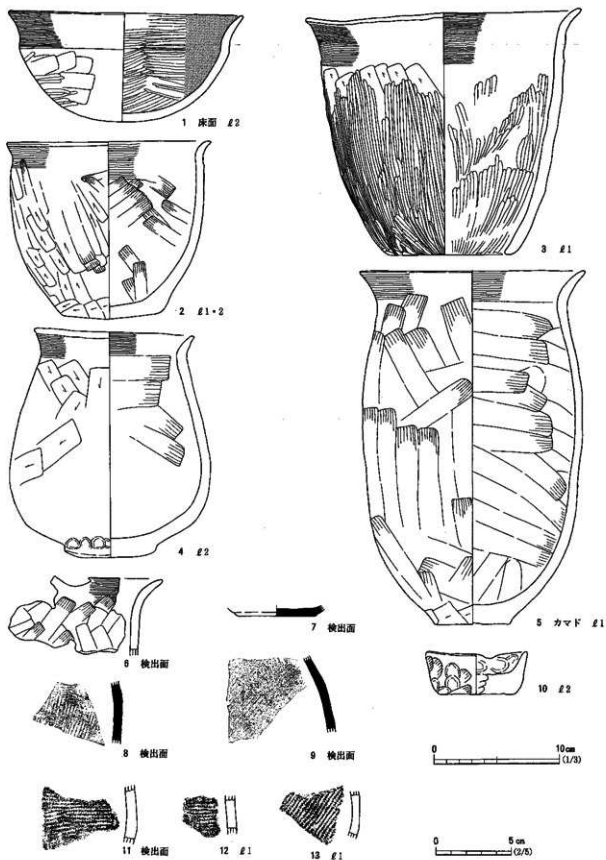


图 15 3号住居跡出土土師器・須惠器・土製品・弥生土器

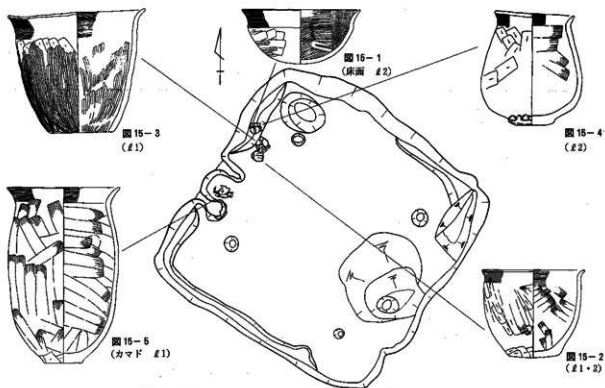


図16 3号住居跡遺物出土位置

土師器甕(図15-3) 無底式の甕で、口縁部下端には軽い段を持つ。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、体部にはヘラケズリの後に縦方向へのヘラミガキ、内面は、口縁部にヨコナデ、体部にはヘラミガキが施されている。

須恵器杯(図15-7) 底部のみ遺存し、調整は内外面ともロクロナデが施されている。

須恵器壺(図15-8・9) 検出面から出土した破片である。8は外面に平行タタキ、内面にナデ調整が認められる。9は外面に平行タタキの後ナデ調整、内面にはナデ調整が施されている。

土製品(図15-10) 底部から口縁部にかけて遺存する手柄ね土器である。調整は外面には指オサエ・ヘラナデ、内面には指オサエが施されている。

弥生土器(図15-11・12) 縄文が施された破片である。弥生時代中期の所産であろう。

まとめ

本遺構は一辺約4.2mの隅丸方形を呈し、西壁中央部やや南寄りにカマドを有する竪穴住居跡である。遺構に伴う遺物から時期は古墳時代後半と考えられる。また、出土土器の様相が4・7号住居跡とほぼ共通することから、同時期に機能していた可能性が高い。(酒井)

4・8号住居跡 SI04・08

遺構(図17・18, 写真9~12)

4・8号住居跡は、T11・12グリッドのLIV上面および一部LV上面において検出された。北方向に2号住居跡・1号土坑、南方向に1・3号住居跡が存在する。4号住居跡は南側に4号土坑

と重複し、4号住居跡の堆積土を掘り込んで4号土坑が構築されていることから、4号土坑の方が新しい。4・8号住居跡の新旧関係は、4号住居跡の方が新しく、8号住居跡の大部分を壊しながら拡張する形で掘り込まれている。以下4号住居跡から順に述べることにしたい。

4号住居跡の堆積土は4層に分層される。ℓ4が遺構全体に流れ込んだ後、周壁の崩落があり、更に斜面上位よりℓ1・2の土が流れ込んだものと考えられる。

平面形は、南北5m、東西5.5mの隅丸方形を呈するが、北東辺は丸みを持つ。遺構の長軸方位は、N41°Wを指す。床面はほぼ平坦である。周壁は緩やかに立ち上がり、残存高は9～35cmで斜面側の西壁が遺存良好である。

検出されたピットは、遺構内から7個、遺構外から2個の計9個である。P1～4は、P1の深さがやや浅いのが気になるが、位置関係から本住居跡の支柱穴と考える。P6・7は、P4を挟むように北と南に位置する。P6は、長径74cm、短径40cmの方形に近い形状で床面からの深さは西側で最大24cmを測る。P7は、南側床面の掘形の中にあり、直径24cm、深さは床面から28cmを測る。遺構外にあるP8・9は、カマドを通る軸に対し、ほぼ対称な位置にあることから本住居跡に付随するピットと考えたが、詳細は不明である。

カマドは西壁の中央からやや北側に位置し、規模は全長2.15m、最大幅1.15mである。LⅢ・Ⅳを掘り下げて住居を作るときに、LⅢを故意に掘り残し、それを袖部の基礎として、その上に褐色粘質土を積み固めて築いたものである。

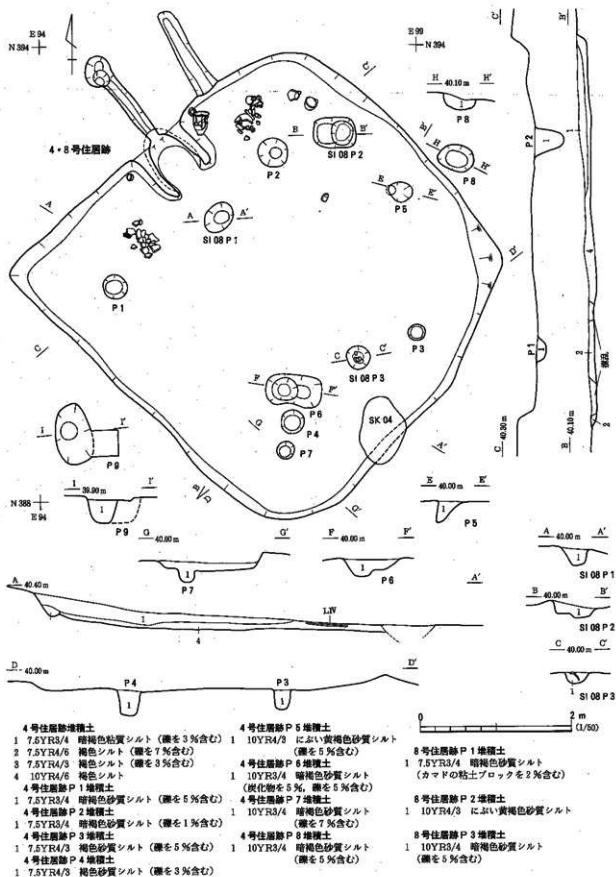
カマド内の堆積土は3層に分けられる。ℓ1は粘土塊が混入した層で、天井崩落土の一部と考えられる。ℓ2上面からは土師器甕2個体が出土した。また、この内の南側の土師器甕の底部には、土製支脚の上部が突き刺さっている。カマドは天井部を除き概ね良好な状態で遺存しており、両袖部の規模は、長さ約75cm、最大幅約35cmを測る。カマド燃焼部内部の規模は、焚口幅40cm、奥行き85cmを測る。カマド煙道部の長さは1.3m、幅が18cmである。煙道部の底面はカマド燃焼部に向かって緩やかに傾斜しており、先端には直径20cm、カマド煙道部底面より25cm程深い煙出しピットが掘られている。

8号住居跡は前述のように4号住居跡に切られており、遺存している部分は少なく、カマド煙道部の一部とピット3個を残すのみとなっている。遺構の長軸方位は、N33°Wを指す。

3個のピットは、いずれも4号住居跡の床面を精査している際に検出されたもので、4号住居跡のピットとも考えられるが、カマド煙道部との位置関係や規模から、図17に示したS I 08-P 1～3を8号住居跡の支柱穴と考えた。直径27～55cm、深さは15～25cmを測る。

カマド煙道部は、遺存部分で長さが1.2m、最大幅は33cmを測る。底面はほぼ平坦で住居内に向かって緩やかに傾斜するが、中間部がやや急になっている。

8号住居跡の規模は、カマド煙道部と支柱穴の位置から、4×3m程度の方形をなしていたものと考えられる。



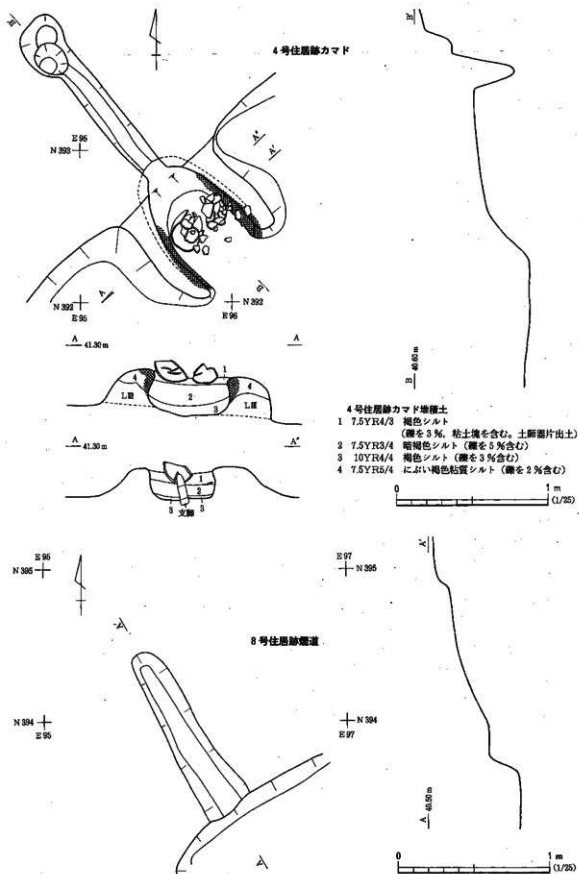


図18 4号住居跡カマド, 8号住居跡煙道

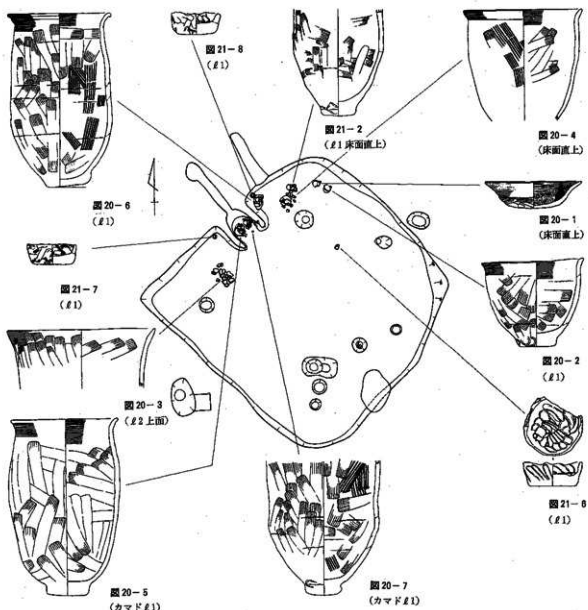


図19 4号住居跡遺物出土位置
遺物(図19~21, 写真44~46)

4号住居跡からは縄文土器片3点, 弥生土器片1点, 土師器片464点, 須恵器片2点, 土製品6点, 木炭5点が出土した。また, 8号住居跡については, P3の堆積土から土師器の復元個体1点が出土している。そのなかから図示できたものが図21である。

土師器杯(図20-1) 北西部コーナーの床面直上から出土した。内面に黒色処理が施され, ヘラミガキ調整が顕著である。外面は上半にヨコナデ, 底部にはヘラケズリ調整が施してある。体部上半から口唇部にかけて外反する。

土師器甕(図20-2~7, 図21-1~3) 図20-2は, 北西部コーナーの堆積土上層から出土した小型甕である。ロクロ整形によるもので, 外面の調整は口縁部がヨコナデ, 体部がヘラナデ, 体部下端には指オサエによる指頭痕が残る。図20-3・4は, カマドを軸に対を成すように出土

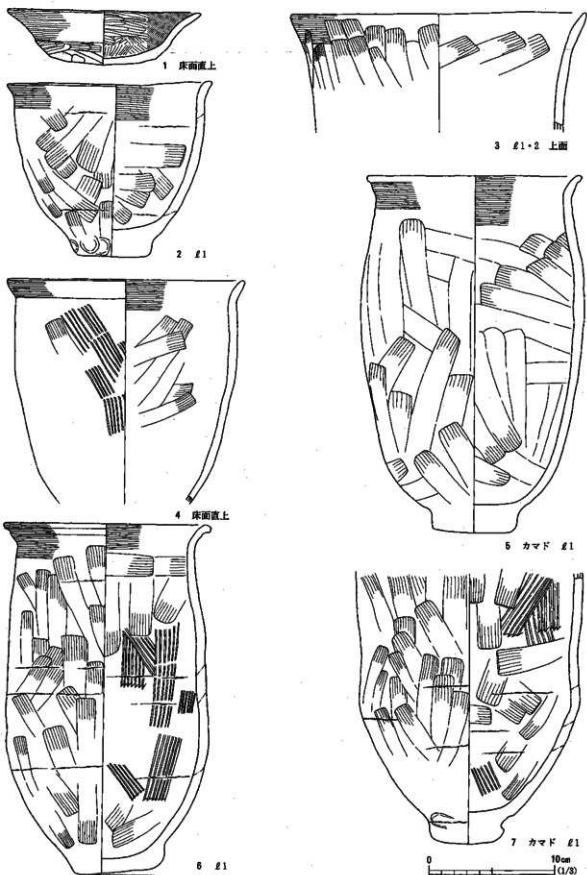


图20 4号住居跡出土土師器

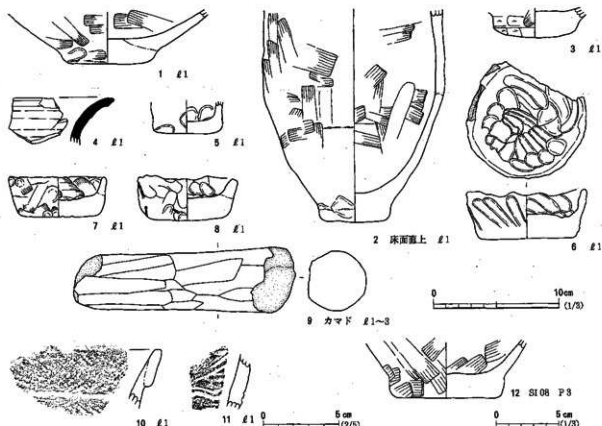


図21 4・8号住居跡出土土器・須恵器・土製品・縄文土器

した。4の外面にはハケメが観察される。5・7はカマド内から、6はカマドの北側の袖部付近から出土した。5・6は、突出した底部を持ち、体部中位で最大径を測り、口縁部が「く」字状に外反する器形である。内外面ともヨコナデ・ヘラナデ調整が施されている。5・7の内面にはハケメが観察される。図21-1は大型甕の底部で、内外面にヘラナデ、外面に指ナデ・指オサエによる指頭痕が認められる。図21-2は、北西部コーナーの床面直上から出土した。内面の調整はヘラナデ・ヘラミガキ、外面はヘラナデである。体部下端に指頭痕が認められる。図21-3は、外面にヘラケズリ調整が施された底部の破片である。底部を突出した器形を持つ甕が多いのが特徴である。

須恵器甕(図21-4) 堆積土から出土した須恵器甕の口縁部の破片である。口唇部に稜による段を持つ。外面はロクロナデで、色調は明灰色である。

土製品(図21-5~9) 5~8は、手握ね土器である。5・6は $\ell 1$ から出土した。7・8はカマドの袖の両側から対を成すように一つずつ完形で出土した。5~8は、いずれも内面に指ナデ・指オサエによる指頭痕を持つ。9は、カマド燃焼部底面に刺さった状態で出土した土製土脚である。遺存長は17.5cm、直径5cmを測る。

土器甕(図21-12) 8号住居跡P3の堆積土より出土したものである。体部下半から底部のみが遺存する。外面の調整はヘラナデ・指ナデ、内面はヘラナデである。底径9.0cmを測り、4号住居跡から出土した土器甕の底径より一回り大きい。

縄文土器(図21-10・11) 10は、縄文中期初頭に比定される大木7a式の折り返し口縁の深鉢で

ある。11は、縄文前期に比定される大木3式の深鉢の体部である。

まとめ

4号住居跡は、南向き斜面に位置する住居跡の中では規模が大きいものの一つである。主軸のずれ具合や西壁にカマドをもつ特徴から、3号住居跡と同時期に存在した可能性が高い。所属時期は出土した遺物から、古墳時代後期と考えられる。4号住居跡より古い8号住居跡もこれと大差ない年代と考えて良いだろう。(佐久間)

5号住居跡 S I 05

遺構 (図22・23, 写真13・14)

5号住居跡は南向き斜面の中段、S13・14グリッドLIVから検出された。しかし、南北壁の一部と東壁は、検出面を下げ平面形の把握に努めたが確認できていない。重複する遺構は7・12号土坑である。新旧関係は、いずれも本住居跡の堆積土より掘り込まれていることから本住居跡が古い。関連して第1遺物包含層は、本住居跡の遺物投棄により形成されたものと考えられる。

住居跡内堆積土は9層に分層された。このなかでℓ1～3は自然堆積の状態を示し、ℓ4～7は人為的な堆積を示している。ℓ9は住居構築時の廃土を利用して床面を平坦にしたものとみられる。

本住居跡の規模は南北が5.65m、東西の遺存長が約3.4mである。周壁は緩やかに立ち上がり、残存高は10.5～60.2cmで斜面側の西壁が遺存良好である。

カマドは西壁に付設されており、煙道は地下式である。カマド内堆積土は単層で、カマド袖部とカマド内堆積土とは同じ土であることから、カマド天井部は砂質シルトで構築されていたことが明らかである。しかし、土質を考慮すると天井部を構築するためには適さないため、燃焼部はLIVを掘り抜いて構築された可能性もうかがわれる。燃焼部は内側で35cm、奥行きは約60cmである。煙道部の幅が16cm、長さが72cmである。

遺物 (図23)

5号住居跡からは弥生土器が2片、土師器が122片、須恵器が24片出土した。そのなかから図示できたものが図23である。このなかで図23-2は床面からの出土である。

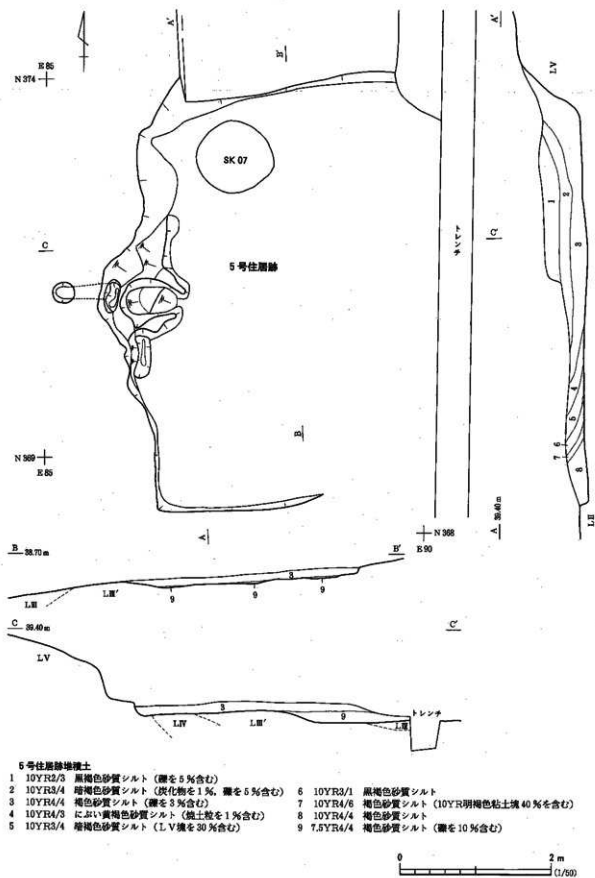
土師器壺 (図23-1) ロクロ整形によるもので、外面の調整は体部上半がロクロナデ、体部下半がヘラケズリ、内面はナデである。

須恵器杯 (図23-2～5) いずれも底部の切り離しは、回転ヘラ切りによるもので再調整は認められない。色調も灰白色である。

須恵器壺 (図23-6) 体部の破片である。外面のタタキ痕、内面のアテ具痕をスリ消している。色調は暗灰色である。

まとめ

5号住居跡の規模については明確にし得なかった。時期については、床面から出土した遺物から9世紀中葉と考えられる。(戸田・吉野)



5号住居跡出土

- | | |
|------------------------------------|--------------------------------------|
| 1 10YR2/3 黒褐色砂質シルト (礫を5%含む) | 6 10YR3/1 黒褐色砂質シルト |
| 2 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (炭化物を1%、礫を5%含む) | 7 10YR4/6 褐色砂質シルト (10YR明褐色粘土塊40%を含む) |
| 3 10YR4/4 褐色砂質シルト (礫を3%含む) | 8 10YR4/4 褐色砂質シルト |
| 4 10YR4/3 におい黄褐色砂質シルト (緑土粒を1%含む) | 9 7.5YR4/4 褐色砂質シルト (礫を10%含む) |
| 5 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (L.V.塊を30%含む) | |

図22 5号住居跡

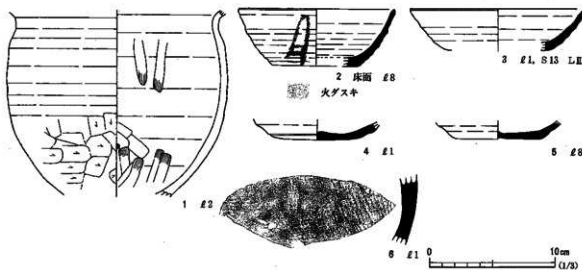
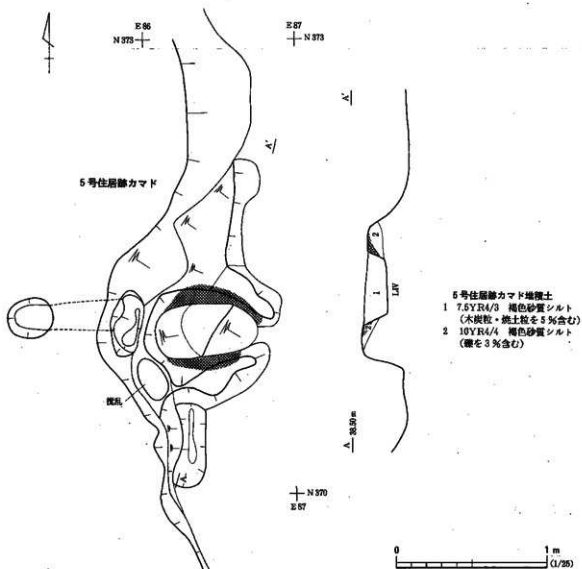


図23 5号住居跡カマド，出土土師器・須恵器

6号住居跡 S106

遺 構 (図24, 写真15・16)

6号住居跡は南向き斜面の中段, U13グリッドに位置する。本住居跡の検出状況は, LⅢbでカマドが検出されたことにより, 住居跡が存在していたことが確認された。さらに, 検出面を下げ平面形の把握に努めたが判然としなため, カマド脇の壁を手掛かりにして掘り込んだが, 北壁の一部を検出したに過ぎない。このために, 住居跡の堆積土及び規模は明らかではない。

他の遺構との重複は, 本住居跡の平面形を把握できず明らかではないが, 位置関係から12号土坑と重複していたと考えられる。新旧関係は明らかではない。

カマドは北壁に付設されており, 煙道は確認されていない。カマド堆積土の②灰褐色粘土と③にぶい黄褐色粘土は, 燃焼部の天井を構築していた粘土とみられる。袖部は両側とも被熱による焼け面が認められる。燃焼部は内側で30cm, 奥行きは38cmを測る。

遺 物 (図24, 写真47・48)

6号住居跡からは土師器が39片, 須恵器が3片, 手捏ね土器が3点出土した。そのなかから図示できたものが図24である。遺物はいずれも堆積土中から出土したものであるが, カマド及びその周辺から出土しており, カマド廃絶の儀礼に関わる遺物と考えることも可能である。

須恵器杯(図24-1・2) 1は底部の切り離し回転ヘラ切りによるもので, 再調整は施されていない。器形は底部と体部の変換点が明瞭であり, 平底である。2はカマド堆積土中から出土した。底部の切り離しは回転ヘラ切りで, ナデが施されている。焼成は不良で内外面の剝離が著しい。

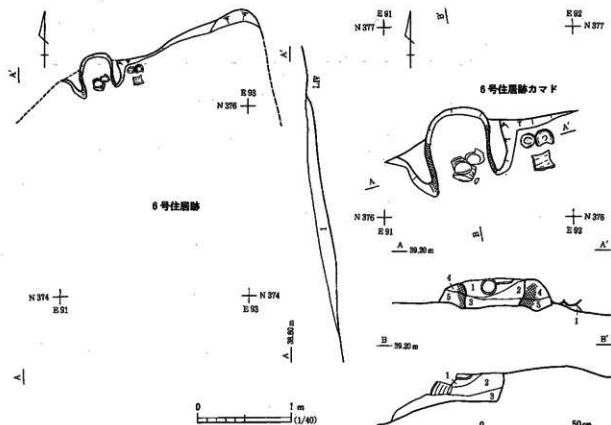
須恵器長頸壺(図24-3) 肩部の破片である。体部外面には自然釉が付着しており, 体部と頸部の接合部分にはリング状の突帯を有する。胎土には砂粒・長石を含む。

須恵器壺(図24-4) 体部の破片である。外面には平行タタキ, 内面にはナデが施されている。割れ口を観察すると焼成の際, 器内の空気が膨張し, 破裂した箇所が認められる。このことから, 遺物の由来は1号須恵器窯跡の灰原によるものと考えられる。

土製品(図24-5~7) いずれも手捏ね土器である。5は口縁部はヨコナデ, 体部外面はケズリ内面はナデ調整が施されている。6・7は横倒しに重なってカマド堆積土中から出土した。共に外面には粘土紐による輪積み痕が明瞭であるが, 内面では丁寧なナデが施されている。底部外面には木葉痕がみられ, 胎土には砂粒を多く含む。6は口縁部を残して体部から底部にかけて欠損している。割れ口を観察すると人為的に穿たれたとも考えられる。7は完成品である。

ま と め

6号住居跡は調査の不手際により, 平面形の把握に至らなかったものである。しかし, カマド内堆積土より遺存良好な手捏ね土器が出土した。時期については, 堆積土中から出土した図24-1の須恵器杯の器形・技法の特徴などから, 9世紀中葉と考えられる。 (吉野)



6号住居跡堆積土

- 1 10YR2/3 黒褐色砂質シルト (礫を10%含む)

6号住居跡カマド堆積土

- 1 10YR4/4 褐色粘質シルト
- 2 7.5YR5/2 灰褐色粘土 (焼土粒を20%含む)
- 3 10YR5/4 におい黄褐色粘土 (礫を15%含む)
- 4 10YR6/4 におい黄褐色粘土 (焼土粒を5%含む)
- 5 10YR4/6 褐色粘質シルト

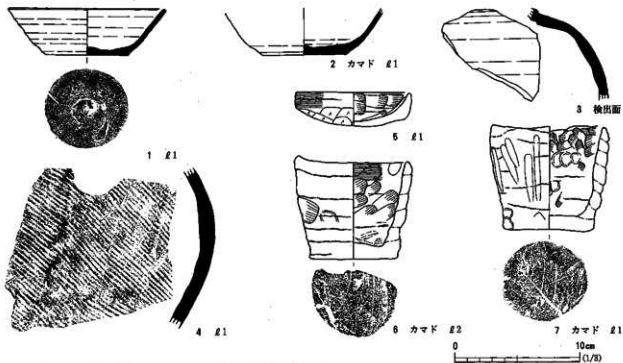


図24 6号住居跡・カマド, 出土須恵器・土製品

7号住居跡 S I 07

遺 構 (図25・26, 写真17・18)

7号住居跡は南向き斜面の中段、T13グリッドに位置する。本住居跡の検出状況はLⅢとLⅤである。本住居跡の北東隅にかかる部分にはLⅤが露出しており、この部分のみLⅤを掘り込んでいる。南壁と東壁の一部については、検出面を下げ平面形の把握に努めたが確認できない。

他の遺構との重複は、1号掘立柱建物跡と認められた。新旧関係は、本住居跡の東壁を1号掘立柱建物跡のP3が掘り込んでいることから、本住居跡が古い。

住居跡内堆積土は9層に分層され、ほぼ自然堆積の状態を示すものと考えられる。本住居跡の規模は長軸が4.5m、短軸が4.0mで、隅丸方形を呈するものとみられる。周壁は緩やかに立ち上がり、残存高は10.5～60.2cmで北壁が遺存良好である。

床面からは、ピットが5個確認された。このなかで柱穴を構成していたのは、P1・2・4・5とみられる。そのなかでもP1・2・5は掘形を有するものである。各ピットの規模は、P1は長軸が57cm、短軸43cm、深さが24cm、柱痕の径が15cmである。P2は長軸が75cm、短軸が約45cm、深さが40cm、柱痕の径が15cmである。P5は長軸が50cm、短軸が43cm、深さ20cm、柱痕の径が17cmである。P3は径が21cmである。P4は径が25cm、深さが36cmである。床面の一部は試掘調査のトレンチにより掘り込まれている。壁際には北東隅と北西隅に壁溝が認められた。幅が上端で8～18cm、深さが6～8cmである。

カマドは西壁に付設されており、煙道は確認されていない。カマド内堆積土は4層に分層された。ℓ1は、カマド廃絶後に堆積したものとみられる。ℓ2浅黄褐色粘土はカマド構築土とみられるが、層厚は薄い。ℓ3灰褐色シルト中から土製支脚と粘土塊が出土した。ℓ4灰褐色シルトには、浅黄褐色粘土が含まれていることから、カマド崩壊土と考えられる。

さらに、堆積土中から粘土塊がカマド周辺と北東隅に認められた。この粘土をカマド構築土と考えると、意識的なカマドの破壊が考えられる。袖部は両側とも被熱による焼け面が認められる。燃烧部は内側で35cm、奥行きは47cmを測る。

遺 物 (図25・26, 写真49)

7号住居跡からの出土遺物は土師器が30片である。そのなかから図示できたものが図25-1・26-1である。遺物はいずれも堆積土中から出土したものである。

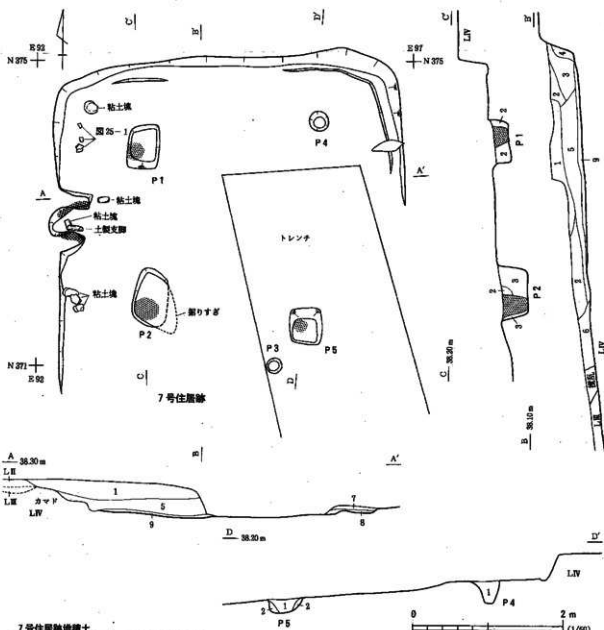
土師器碗(図25-1) 口縁部と体部の境に段を有するものである。外面の調整は、口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデ、内面はミガキ、黒色処理である。

土製支脚(図26-1) カマド内堆積土から出土した。外面はケズリにより成形されている。

ま と め

7号住居跡の時期については、堆積土中から出土した図25-1の土師器碗の器形・技法の特徴などを参考にすると、6世紀後葉と考えられる。

(吉野)



7号住居跡地層土

- 1 10YR3/4 暗褐色シルト (礫を10%含む)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト (礫を20%含む)
- 3 10YR4/3 褐色シルト (礫を15%含む)
- 4 10YR3/3 暗褐色粘質シルト (炭屑粘土を含む)
- 5 10YR3/2 黒褐色粘質シルト (礫を5%含む)
- 6 10YR4/3 におい黄褐色シルト (礫を10%含む)
- 7 10YR4/4 褐色シルト
- 8 10YR5/4 におい黄褐色粘質シルト (礫を3%含む)
- 9 10YR3/3 暗褐色粘質シルト (炭化物を5%含む)

7号住居跡P1地層土

- 1 10YR5/6 黄褐色粘質シルト (礫を5%含む)
- 2 7.5YR4/6 褐色砂質シルト (礫を1%含む)

7号住居跡P2地層土

- 1 10YR4/3 におい黄褐色粘質シルト (礫を10%含む)
- 2 7.5YR4/6 褐色砂質シルト (礫を7%含む)
- 3 7.5YR5/6 明褐色砂質シルト (礫を10%含む)

7号住居跡P3地層土

- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト

7号住居跡P4地層土

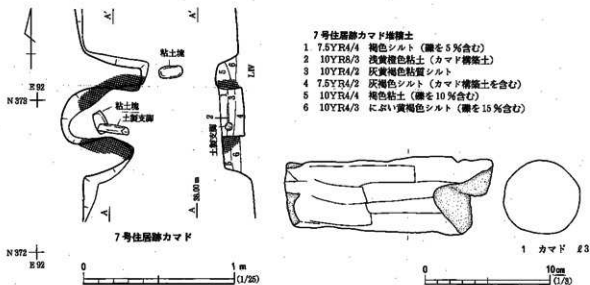
- 1 10YR6/4 におい黄褐色砂質シルト (しまりなし)

7号住居跡P5地層土

- 1 10YR5/6 黄褐色シルト
- 2 7.5YR5/8 明褐色シルト (粘性あり。礫を15%含む)

図25 7号住居跡、出土土器

第2章 遺構と遺物



- 7号住居跡カマド堆積土
- 1 7.5YR4/4 褐色シルト (礫を5%含む)
 - 2 10YR6/3 淡黄褐色粘土 (カマド構築土)
 - 3 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト
 - 4 7.5YR4/2 灰褐色シルト (カマド構築土を含む)
 - 5 10YR4/4 褐色粘土 (礫を10%含む)
 - 6 10YR4/3 におい黄褐色シルト (礫を15%含む)

図26 7号住居跡カマド，出土土製品

9号住居跡 S I 09

遺 構 (図27, 写真19・20)

9号住居跡は南向き斜面の中段，S15グリッドLIVから検出された。しかし，住居跡東側半分の壁および床面は地滑り等により流失し遺存しない。重複する遺構は認められない。南側4mには，6号土坑が近接している。

住居跡内堆積土は単層で自然堆積の状態を示している。本住居跡の規模は東西遺存長が80cm，南北遺存長が約2.84mである。周壁は緩やかに立ち上がり，残存高は10～26cmである。また壁溝は確認されなかった。

床面からはピットが3基検出された。このうち柱穴を構成していたのは，P1・2と考えられる。各ピットの規模は，P1は径が26cm，深さが88cmであり，P2は径が20cm，深さが32cmである。P3堆積土内には，木の根が入っていて柱穴かどうか確認はできなかったが，径は20cm，深さは42cmである。

カマドは西壁に付設されており，煙道は地下式である。カマド内堆積土は4層に分層された。ℓ1は，カマド廃絶後に堆積したものと考えられる。ℓ2・3は，カマドの天井構築土と考えられる。ℓ4は，カマドの崩壊土と考えられる。カマドの袖部は，地山の一部を残し，残した地山を粘土で覆いカマドの袖部が構築されている。また袖部内壁は，被熱による酸化が認められるが，焼成部底面には被熱による酸化が認められなかった。燃焼部は内側で55cm，奥行きは約80cmである。煙道部の幅が20cm，長さが66cmである。

遺 物 (図28, 写真50)

9号住居跡からは，土師器杯1個体，土師器甕2個体，土師器鉢1個体のほか，土師器片が111点，須恵器片が7点出土した。そのなかから図示できたものが図28-1～5である。遺物はいず

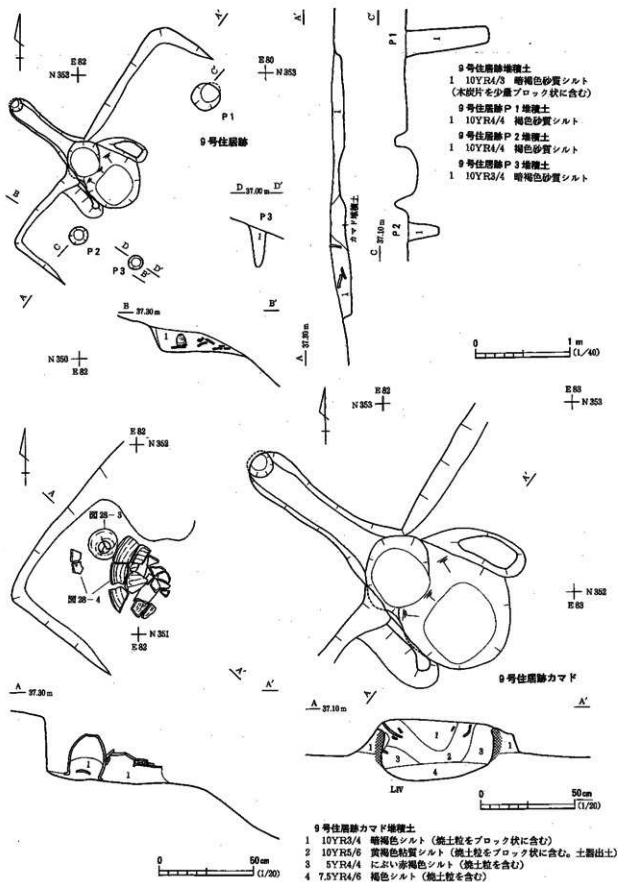


図27 9号住居跡・カマド

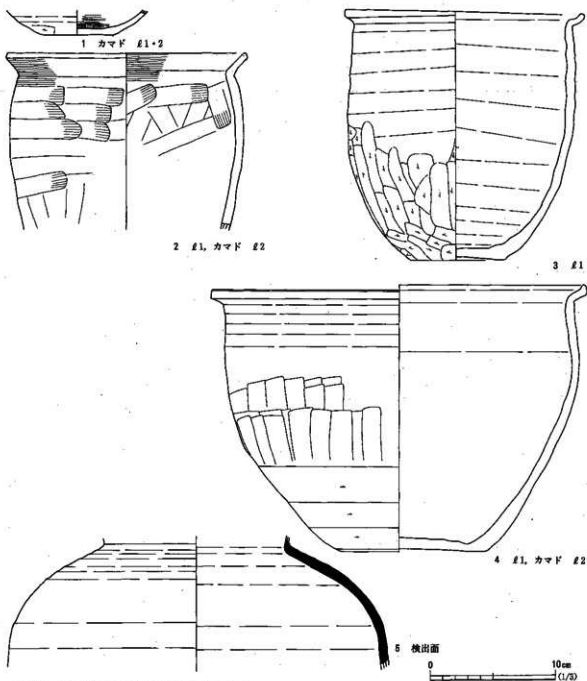


図28 9号住居跡出土土師器・須恵器

れも堆積土中から出土したものであるが、図28-3は、カマドの袖脇で倒立して出土したものである。口縁部は南東側で床面と接していたが、北西側では床面から2～3cmほど浮いていた。土器の内部には、約半分の高さまで土が入り込んでいた。本来は床面上に倒立をさせたまま遺棄された遺物と推測されるが、斜面上方からの土砂の流入により、原位置からやや動かされたものと考えられる。図28-4は、図28-3の南東側で図28-3と接し、壊れた状態で出土した。床面からは、10cmほど浮いていた。本遺構が半埋没後に流入もしくは廃棄されたものと考えられる。

土師器杯(図28-1) ロクロ整形によるもので、外面の調整は体部上半がロクロナデ、体部下半から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整されている。内面の調整はヘラミガキで、黒色処理が

施されている。

土師器甕(図28-2・3) 図28-2は、ロクロ整形によるもので、外面の調整は体部上半はヨコナデ、体部下半はヘラナデ、内面の調整はヨコナデとヘラナデである。図28-3はロクロ整形によるもので、体部上半はロクロナデ、体部下半はヘラケズリ、内面はロクロナデであり、底部全面にはナデが加えられている。また胎土には、砂粒を多く含んでいる。

土師器鉢(図28-4) ロクロ調整によるもので、外面の調整は体部中央はヘラケズリ、体部下半は回転ヘラケズリ、内面はロクロナデであり、底部全面にナデが加えられている。また胎土には、砂粒を多く含んでいる。

須恵器短頸壺(図28-5) ロクロ調整によるもので、内外面の調整はロクロナデである。色調は外面は灰白色、内面は暗灰色であり、外面の一部には自然釉が付着している。また胎土には砂粒を多く含むが、焼成は良好である。

まとめ

9号住居跡の規模については明確にし得なかった。時期については、堆積土中から出土した遺物から9世紀中葉に位置付けられると考える。(佐藤)

10号住居跡 S I 10

遺構(図29, 写真21)

10号住居跡は南向き斜面の南部, T15グリッドL.V上面から検出された。遺構の東側の部分が流出しており、遺存するのは西壁と南壁のごく一部と床面の一部である。重複する遺構はない。南

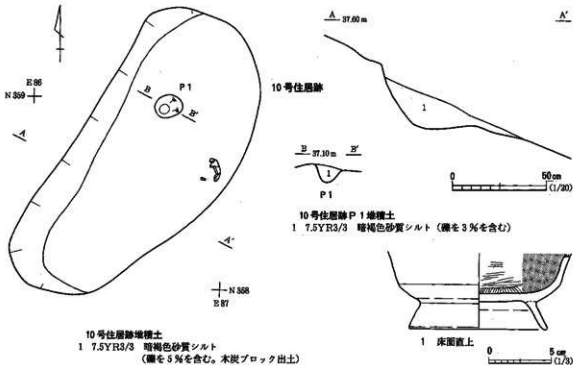


図29 10号住居跡, 出土土師器

側には同じ等高線上に9号住居跡が、北側には同じ等高線上に7号住居跡、やや下がって10・11号土坑が存在する。

住居跡内堆積土は暗褐色砂質シルト1層のみで、堆積過程は不明である。

本住居跡の規模は南北の遺存長が約1.7m、東西の遺存長が約0.8mである。周壁は斜面側の西壁のみが遺存良好であり、緩やかに立ち上がる。残存高は最大で30cmを測る。

住居内施設として、ビット1個を検出した。P1の堆積土は暗褐色砂質シルトの1層で、堆積過程は不明である。検出面から底面までの深さは9cmである。東側の壁が緩やかに立ち上がる。柱穴かどうかは定かでない。

遺物 (図29, 写真51)

遺物は、土師器片が48点、炭化物が1点出土した。そのなかから図示できたものが図29である。

土師器高台付杯 (図29-1) 住居跡東側床面直上より出土した。内面に黒色処理とヘラミガキの調整が施されている。器面が摩滅しているため調整が観察しづらいが、内外面はロクロナデで調整されており、底部の一部に回転ヘラケズリと思われる痕跡が認められた。体部に明瞭な括れを持つのが特徴である。

まとめ

本住居跡は、遺存する西壁から一辺2m程の方形と推定できる。ビット1個を検出したが、柱穴とカマドは不明である。床面直上から出土した土師器高台付杯は、1号須恵器窯跡出土の高台付杯の模倣品と考えられる。本遺構の年代は、この土器の特徴からみて、8世紀中葉～後半と考えられる。

(佐久間)

11号住居跡 S111

遺構 (図30, 写真22)

本住居跡は南向き斜面の最南端、R16グリッドLV上面から不整形の2つのプランとして検出された。当初2基の土坑と考えたが、掘り込んだ結果、北側の底面が平坦なことから、南側がビットと判明したことから、北側が堅穴住居跡のコナー部、南側がこの住居跡に伴うビットであると判断した。重複する遺構はない。付近には、北東側斜面上部に6号土坑・9号住居跡、南西側に3m下がった地点に1号須恵器窯跡が存在する。

堆積土は3層に分けられた。ℓ1は、にぶい黄褐色砂質シルトで北壁側に堆積している。黒褐色砂質シルトのℓ2と黒色砂質シルトのℓ3は炭化物を多く含み、特にℓ3からは木炭片が出土した。堆積の様子は、人為堆積の状況を呈する。

本住居跡はそのほとんどが削平によって失われている。遺存するのは北壁と東壁の一部で、その範囲は東西95cm南北85cmである。遺存する周壁は緩やかに立ち上がり、遺存高は最大で20cmを測る。

南側の床面は流出により消失しているが、床面が消失している部分から焼土が散布状態で確認された。ビットは、床面の推定レベルから12～30cm下のLV上で1個検出した。ビット内堆積土は、

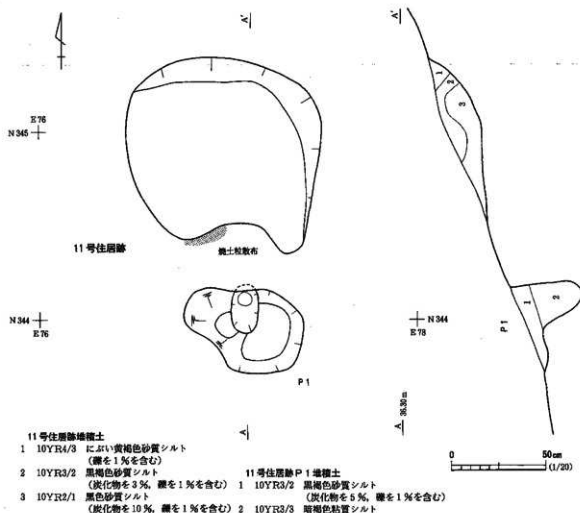


図30 11号住居跡

ℓ 1が黒褐色砂質シルト、ℓ 2が暗褐色粘質シルトの2層である。平面形は、開口部で長径65cm、短径40cmの不整形を呈する。断面形は、ビット上半が南側でテラス状に開き、下半は円筒状で、北壁はオーバーハングして立ち上がる。検出面からビット底面までの深さは26cmであるが、床面の推定レベルからは約50cmを測り、黄褐色・灰色粘土層を掘り込んでいた。当初は柱穴と考えていたが、ビットの径が、長径25cm、短径15cmと細いのに対して深さが異常に深いこと、開口部付近にテラス状の段がみられたこと、ℓ 1に炭化物を含んでいたことなどを考慮すると、ロクロビットの可能性が高い。ただし、ビットの堆積土断面からは軸木痕は確認できなかった。

まとめ

本住居跡は、削平によって遺構のほとんどを消失しており、その規模は明らかにできなかった。出土遺物がなく、遺構の詳細い年代は特定できないが、ロクロビットと思われるビットが検出されたことや、1号須恵器窯跡が隣接することから、8世紀中葉の須恵器生産に関わる工房跡の可能性が高い。

(佐久間)

第3節 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 SB01

遺 構 (図31, 写真23・24)

1号掘立柱建物跡は、調査区南側のT13グリッドに位置する。丘陵裾部の標高39m程の東向き緩斜面の南端部に検出された。検出面はLV上面で一部はLIV上面である。

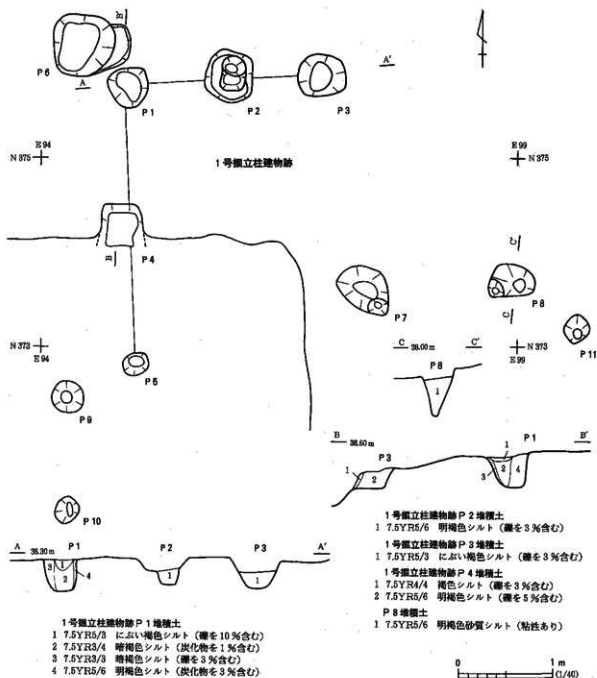


図31 1号掘立柱建物跡、ビット群

重複する遺構は7号住居跡で、新旧関係は7号住居跡の出土遺物を考慮すると、本建物跡の方が新しいことが考えられる。周辺の遺構は、本建物跡の西側に5号住居跡が位置する。

本建物跡はすべての柱穴を検出することはできず、北側柱列と西側柱列のみを検出したに過ぎない。本建物跡の東側柱列については、斜面に位置しているために土砂の流失により欠損したことが考えられる。また、南側柱列については、7号住居跡内堆積土と区別をすることができなかったことなどが考えられる。検出された柱穴は5個であるが、柱痕が確認されたのはP1のみである。P1の底面は平坦で、柱径は柱痕から推定すると5～6cmと考えられる。北側柱列は東西軸から5°北に傾いて構築されている。これらの柱穴や地形から判断して建物跡を復元してみると、東西3間×南北2間の東西棟であると推定できる。各柱穴の芯々は、北側柱列のP1とP2間が1.08m、P2とP3間が96cm、西側柱列のP1とP4間が1.50m、P4とP5間が1.46mである。柱痕はP1のみに確認され、その径は18cmである。さらにP1からは、柱を据えた時の掘形内堆積土が確認された。その他の柱穴ではそれぞれ上部斜面からの流れ込みや壁側の三角堆積が観察されることから、1層又は2層の自然堆積であると考えられる。

出土遺物は小破片のために図示できなかったが、P1から非ロクロ整形の土師器が1点、P2から土師器が2点である。

以下、本建物跡の配列としてとらえることができなかったピットについて述べる。本建物跡の周辺からには、他に6個のピットを検出した。P6はP1の北西部にありピットの中で最大である。遺構内堆積は1層の自然堆積である。P7・8・11はP3の南東部に位置する不整楕円形のピットで、それぞれ1層の自然堆積である。P9・10はP5の南西部の7号住居跡内に位置し、それぞれ1層の自然堆積であり円形のピットである。どちらも堆積土の状態から、7号住居跡に関連するピットではないと判断した。

これらのピットからの出土遺物は、P6から土師器の小破片4点とP11から土師器の小破片3点である。これら6個のピットの性格は明らかではないが、出土遺物より本建物跡と同時期に機能していたと考えられる。

まとめ

本遺構は、東西3間×南北2間の東西棟の掘立柱建物跡の一部である。遺構の機能した時代は出土した遺物より奈良～平安時代と考えられる。

遺構の性格は、付近に同時期に機能していた遺構はないが、竪穴住居に付属する倉庫であったと考えられる。

(堀 島)

表2 掘立柱建物跡柱穴計測表

P No.	単位 (cm)				
	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
長 径	44	54	50	44	28
短 径	42	50	45	—	24
深 さ	34	37	35	24	14
平面形	隅丸方形	隅丸方形	隅丸方形	方 形	楕 円 形
柱 痕	有	無	無	無	無

表3 ピット群計測表

P No.	単位 (cm)					
	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11
長 径	65	62	50	34	30	30
短 径	64	44	34	34	24	28
深 さ	21	17	43	11	15	15
平面形	隅丸方形	楕円形	楕円形	円 形	隅丸方形	隅丸方形
柱 痕	無	無	無	無	無	無

第4節 窯 跡

調査区からは5基の窯跡が検出された。その内容は須恵器窯跡が2基、木炭窯跡が3基である。いずれも西向き斜面に並列して構築されている。遺構の遺存状態は、後世の土取りや河川の浸食などにより、奥壁や前庭部などが欠損しており極めて悪い。特に2号須恵器窯跡や3号木炭窯跡はその痕跡がわずかに確認されるのみである。本窯跡群の特徴として、1号須恵器窯跡の構造が半地下式窯であること。2号木炭窯跡が1号須恵器窯跡を再利用して構築されていることなどである。

1号須恵器窯跡 SR01

遺 構 (図32, 写真25~28)

1号須恵器窯跡は、西向き斜面Q16グリッドLVで検出された。当初は、南北方向に延びる不整形を窯跡と判断していた。しかし、掘り下げを継続しても側壁が検出されないことから、この落ち込みを土取り穴と判断した。再び削平された断面と底面を精査したところ、側壁を検出したため窯跡は長軸が東西方向であることが判明した。

北側には並列して1号木炭窯跡が位置する。主軸方向はN64°Eを示す。堆積土は地山崩落土・天井崩落土に分けられる。焚口から焼成室にかけて木炭層が堆積していた。天井崩落土であるスサ入り粘土は、青灰色熱変化を受けている。このことから、本須恵器窯跡は半地下式窯であることが判明した。

上記の木炭層により2号木炭窯跡が判明した。このことから本須恵器窯跡が廃絶された後、2号木炭窯跡が構築され、さらにその廃絶後再び須恵器窯跡が構築されたことが考えられる。

本窯跡の構造は、土取り穴により奥壁や焼成室の一部が欠損し、さらに前庭部の大半が河川の浸食により流失している。また煙道も確認されていない。全長は7.1m以上、焼成室が約5.9m、最大幅は焼成室のはほぼ中央で1.0m、最小幅は焚口で70cmである。底面はLVを利用していた。底面の傾斜角は3~19°である。壁は直立し、遺存高は良好なところで75cmである。底面と側壁には青灰色熱変化範囲が認められた。その断面の厚さは4~6cmで側壁が厚い。その下層には、赤色熱変化範囲がみられた。その断面の厚さは4~10cmである。

遺 物 (図33~36, 写真51~56)

1号須恵器窯跡からは須恵器が1,094片出土した。そのなかから図示できたものが図33~36である。遺物はいずれも堆積土中から出土したものであるが、特に11からは307点が出土した。ここで焼成されたほとんどの須恵器の胎土には器面に黒色粒がふきだしている特徴がみられた。

須恵器杯 (図33-1~3・15) いずれも全体の器形をうかがわせるものはない。

器形的には体部下半にいくつかの特徴がみられた。底部の切り離しと再調整の有無については、2が回転ヘラ切りで、ナデ調整が施されている。3の体部下端には回転ヘラケズリ、底部には手持

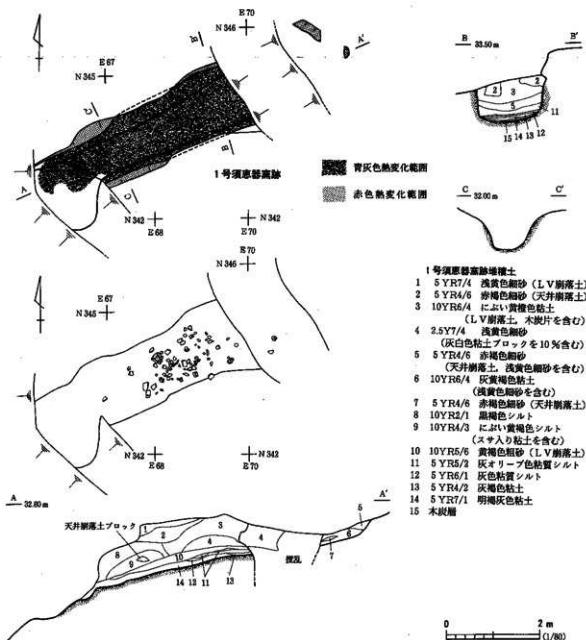


図 32 1号須恵器窯跡

ちヘラケズリ調整が施されている。胎土は細砂粒を少量含むものが多く、7はその含む割合が多い。色調は2・3が灰白色である。

須恵器高台付杯(図33-4~14, 図34-2) 4~8では体部下端に稜が形成され、9・10では稜よりも下に段が形成されている。11は丸味を帯びた器形である。5~8には体部下半に回転ヘラケズリ再調整が施されて、12は高台部が欠損しているが、高台部を貼り付けていた接合線がみられる。これはロクロ回転を利用した2条の沈線である。底部全面には回転ヘラケズリ再調整が施されている。13は高台部である。14は焼成時に変形したもので、底部全面に回転ヘラケズリ再調整が施されている。胎土は12・14, 図34-2が透明砂粒・白色砂粒・細砂粒を少量含むもので、13

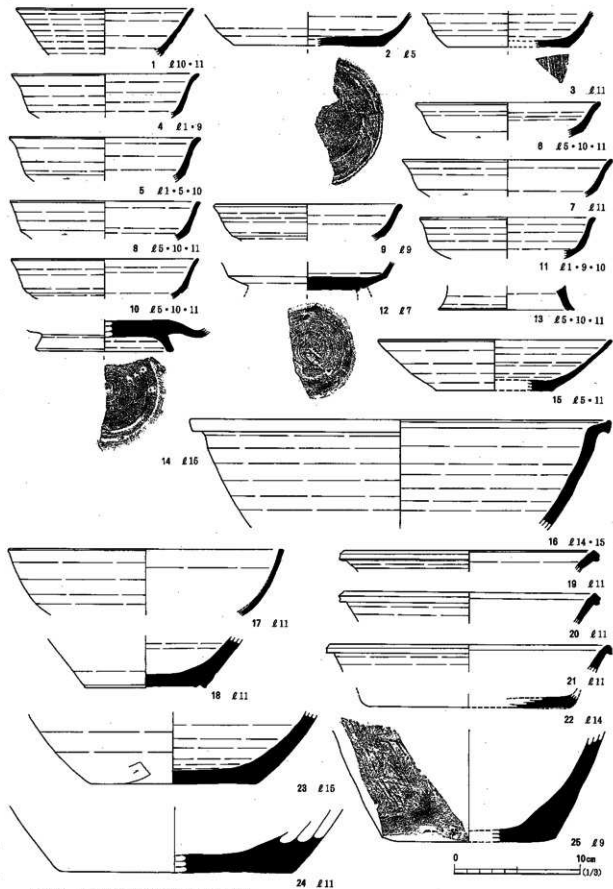


図33 1号須惠器窯跡出土須惠器(1)

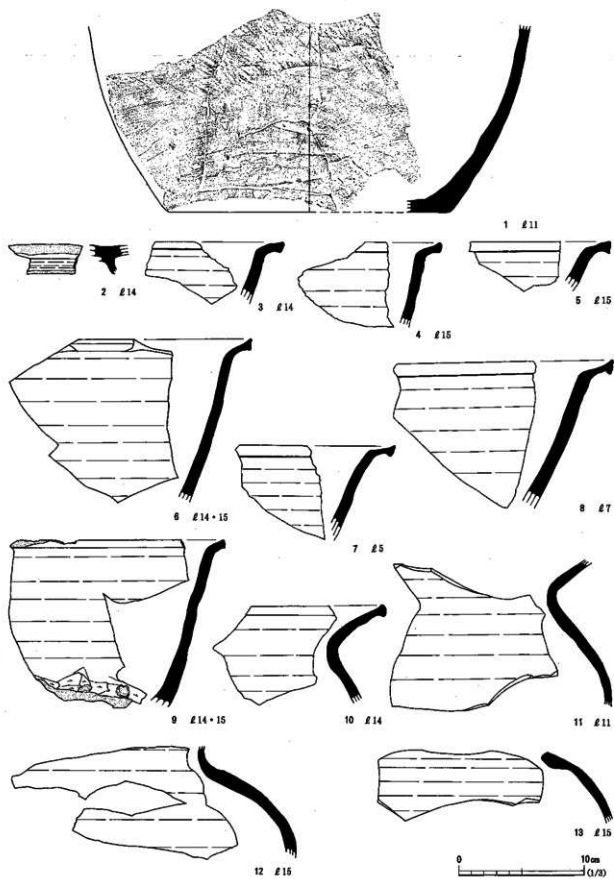


图 34 1号须惠器窯跡出土须惠器(2)

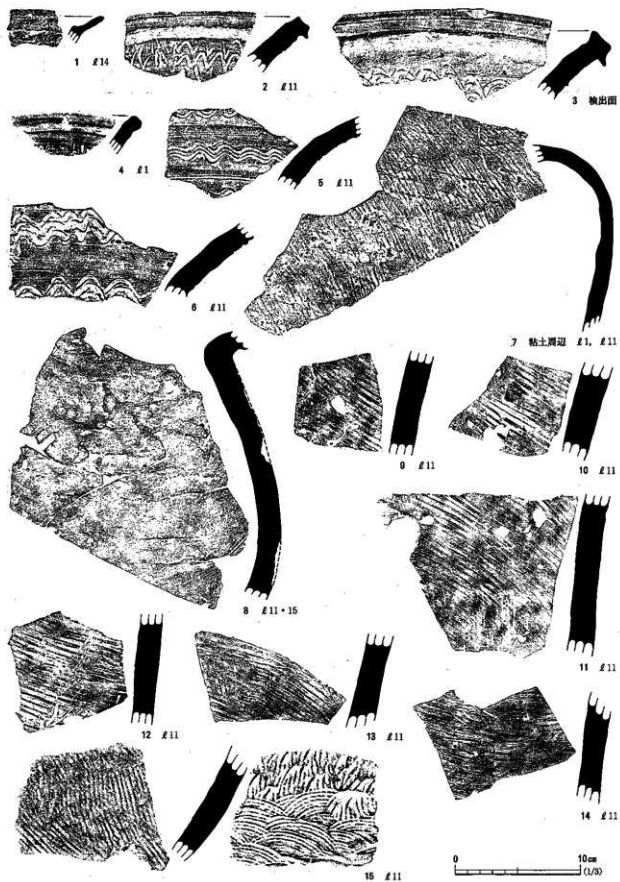


図35 1号須恵器窯跡出土須恵器(3)

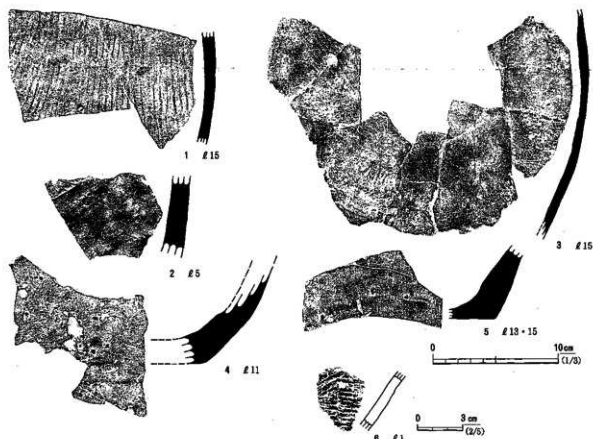


図36 1号須恵器窯跡出土須恵器・弥生土器

は細砂粒を少量含む。色調は12が灰白色で、4～11・13・14が暗灰色である。

須恵器椀(図33-17) 内外面ともに焼け爆ぜが目立つ。胎土は白色砂粒・細砂粒を含み、色調は灰色である。

須恵器鉢(図33-16) 胎土は細砂粒を含み、色調は灰色である。

須恵器長頸壺(図33-18, 図34-13) 図33-18は底部で高台部は貼り付けによるものである。さらに高台部の内側には、ケズリ出しによる断面三角形の突帯が走る。図34-13は肩部である。それぞれの胎土には白色砂粒が多く含まれ、色調は灰色である。

須恵器甕(図33-19～25, 図34～36) 内外面の調整では、図34-1, 図35-9～15, 図36-1・3の外面には平行タタキが認められ、図35-15の内面にはアテ具痕が認められる。図33-25, 図35-7には簾状のタタキが認められる。図36-4の体部から底部にかけての変換点には布目痕が認められる。図35-2～6は口縁部から頸部沈線による波状文が認められる。そのなかには、波状文の間に沈線で区画するもの(5)としないもの(6)とに分けられる。図35のなかで胎土・色調から、同一個体とみられるのは5・15, 9・10, 12・13, 11・14の4個体が認められる。

胎土については図33-23～25, 図34-6・12・13, 図35-1・5・15, 図36-1には白色砂粒が多く含まれ、その他については白色砂粒が少量含まれている。さらに図34-3は粗砂粒が多く含まれている。色調は図33-19・22, 図34-8・10が灰白色, 図33-21が暗灰色, その他は灰

色である。

弥生土器(図36-6) 甕形土器か壺形土器の体部とみられるもので、外面には縄文により施文が行われている。時期は弥生時代中期後半と考えられる。

ま と め

1号須恵器窯跡は遺存状態が悪いため、焼成室・前庭部などの形態や規模を明確に把握することができなかった。時期については、底面からの出土遺物がないために、時期設定は困難であるが堆積土中の出土遺物から、8世紀中葉から後葉の時期が考えられる。(吉野)

2号須恵器窯跡 SR02

遺 構 (図37, 写真29)

中島川に浸食された西向きの急斜面で検出した。検出地区はQ15グリッドで、検出面は西斜面LX(図44参照)から岩盤上にかけてである。岩盤には亀裂が入ってかなり崩落が進んでいる。また、本窯跡と重複して近代の採掘坑が掘り込まれているため、遺構の遺存状態は劣悪である。近代の採掘坑は、明治40年以降に磐城セメントという会社によってセメント原料となる粘土が採掘されたものである。丘陵内には、ほかにも同様の採掘坑が存在する。採掘坑の堆積土からは、窯壁片・須恵器片・炭化物が出土した。窯跡の大半はすでに破壊されており、焼成室底面の一部と思われる焼土面と、青灰色に熱変化した側壁の一部が検出されたのみである。

焼成室底面の一部と思われる焼土面は、長さ1.6m、最大幅30cmの範囲で遺存しており、その一部は青灰色に熱変化した。奥壁に近い部分の底面かと思われる。側壁は焼成室底面からの立ち上がり部分が、幅25cm、高さ10cm程度残っていた。壁面は青灰色に還元化しており、断面から見た還元部の厚さは2~3cm、その外側の酸化部の厚さは1~4cmであった。底面からの立ち上がり角度は約70°である。この西側からは、岩盤の亀裂によって崩壊したと思われる側壁塊の一部が発見された。原位置は保っていないが、図37の平面図中にその状態を示した。僅かに遺存するこれらの底面・壁面の高低差から焼成室の傾斜角度を試算すると、およそ18°であったことが推定される。前庭部については、採掘坑の有無にかかわらず、浸食によって失われていたものと推測される。

遺 物 (図38, 写真57)

須恵器片が182点出土した。すべて採掘坑の堆積土内から出土したものである。原位置から移動した遺物ではあるが、窯壁片・炭化物などとともに出土しているので、本来は窯跡内に存在した遺物と判断した。いずれの破片も褐色を呈し、還元焰焼成が不完全なものである。器面が摩滅しているものが多い。図38に出土遺物の一部を掲載した。

須恵器壺(図38-1~7) 出土した遺物はすべて甕で、他の器種は存在しない。無文の口縁部片(1)と波状文を有する口縁部片(2)があるので、複数個体が存在することがわかる。7は大甕の頸部片で、体部との接合面から剥離している。破片の先端に波状文の一部が認められ、2と同一個体の可能性が高い。3~6は外面に平行タタキを有する体部破片である。

ま と め

本窯跡は、近代の粘土採掘坑による破壊と岩盤の自然崩落とにより、その大半が失われている。このため、規模・主軸方位・窯体構造などについては知ることができない。ただ、粘土採掘坑堆積土内において、窯壁などとともに須恵器片が出土したことから、本遺構が須恵器窯であったと判断した。1号須恵器窯跡・1号木炭窯跡と並列していることから、これらと年代的に近いものと推測される。出土した須恵器甕の特徴から見て、8世紀後半と推定したい。(本間)

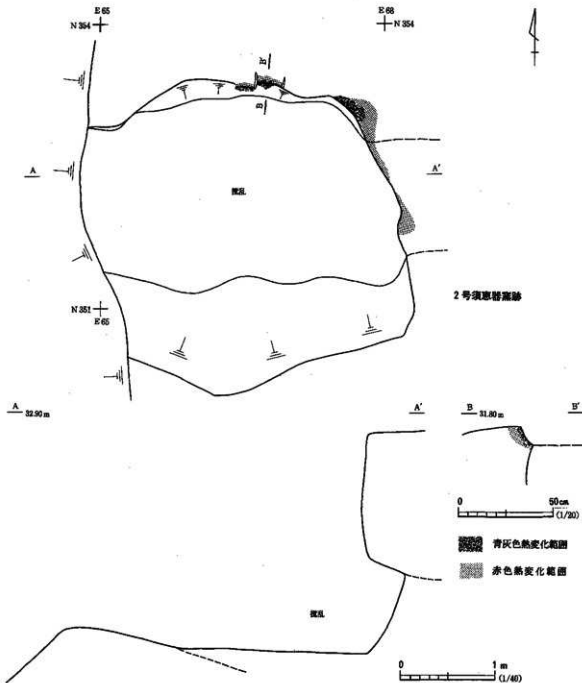


図 37 2号須恵器窯跡

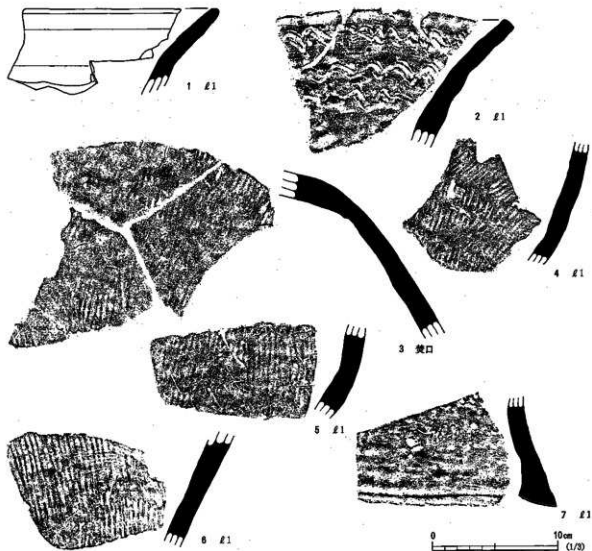


図38 2号須恵器窯跡出土須恵器

1号木炭窯跡 SC01

遺 構 (図39, 写真30・31)

1号木炭窯跡は西向き斜面Q16グリッドに位置し、1号須恵器窯跡と並列する。本木炭窯跡は、当初窯跡として考えた土取り穴の底面より検出された。

本窯跡の構造は、土取り穴により奥壁や焼成室の大半が欠損し、前底部も河川の浸食により流失したとみられる。さらに煙道も確認されていない。

本窯跡の遺存長は6.25m、焼成室の最大幅は約1.04mである。側壁と底面からは、青灰色熱変化範囲と赤色熱変化範囲が認められた。底面においては熱変化範囲は部分的に止まるが、側壁には一様に赤色熱変化範囲が認められる。特に北側壁の底面との変換点では青灰色熱変化範囲が認められる。断面による厚さは、赤色熱変化範囲が4～8cmである。

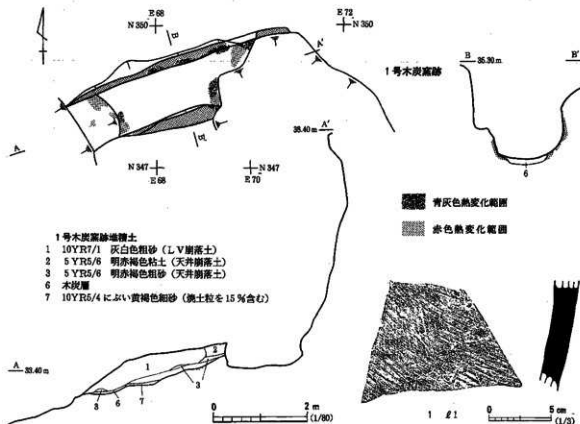


図39 1号木炭窯跡，出土須恵器

遺物 (図39)

1号木炭窯跡からは須恵器が1片出土している。

須恵器壺 外面は平行タタキ，内面はアテ具痕をスリ消している。

まとめ

1号木炭窯跡は遺存状態が悪いため，焼成室・前庭部などの形態や規模は明確ではない。さらに，2号木炭窯跡の時期を参考にすると8世紀中葉から後葉の時期が考えられる。(吉野)

2号木炭窯跡 SC02

遺構 (図40, 写真32)

2号木炭窯跡は西向き斜面Q16グリッドに位置し，1号須恵器窯跡と重複している。

1号須恵器窯跡を底面まで掘り下げたところ，焼成室内に木炭層が認められた。このために木炭窯跡として確認された。1号須恵器窯跡との新旧関係は，本木炭窯跡の方が新しい。

堆積土は1号須恵器窯跡のものと峻別するのは困難であるが， $\ell 13 \cdot 14$ などは本木炭窯跡に伴う地山崩落土・天井崩落土と考えられる。

本窯跡の構造は，土取り穴により奥壁や焼成室の一部が欠損し，さらに前庭部の大半が河川の浸食により流失している。また煙道も確認されていない。全長は7.1m以上，焼成室が約5.9m，最大幅は焼成室のほぼ中央で約1.0m，最小幅は焚口で約70cmである。

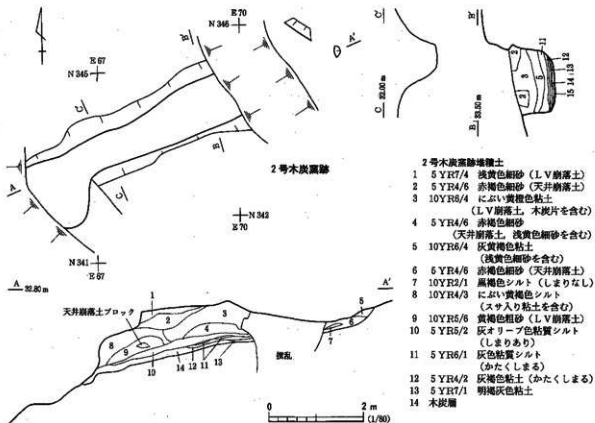


図40 2号木炭窯跡

遺物は、2号木炭窯跡の木炭層から須恵器が77片出土している。しかし本木炭窯跡に伴うとは考え難いため、1号須恵器窯跡出土とした。

まとめ

2号木炭窯跡は遺存状態が悪いため、焼成室・前庭部などの形態や規模は明確ではない。さらに底面からの出土遺物がないために、時期設定は困難であるが1号須恵器窯跡と近接した時期が考えられることから8世紀中葉から後葉の時期が考えられる。

(吉野)

3号木炭窯跡 SC03

遺構 (図41, 写真29)

Q15 グリッドで検出された窯跡である。中島川東岸の崖堆積層を精査中、炭化物・焼土粒と窯壁片の散布が認められたので、窯跡と認定して調査を行った。炭化物等の散布は、崖堆積層の中で認められたので、この堆積層を除去して窯跡の平面プランを把握しようと試みたが、予想以上に遺存状態が悪く、検出できたのは、窯跡奥壁部の北東コーナー部のみであった。

僅かに遺存した北東コーナー部の位置と断面の状況を図41に示した。壁面は高さ27cmまで遺存していた。立ち上がり角度は61°で、途中から「く」字状に屈曲して天井部にいたるつくりである。壁面は青灰色に還元していた。断面から見た還元部の厚さは約2cmで、その外側の赤色熱変化した部分の厚さは1~4cmであった。ただ、この窯壁が確認された岩自体が、すでに岩塊となって

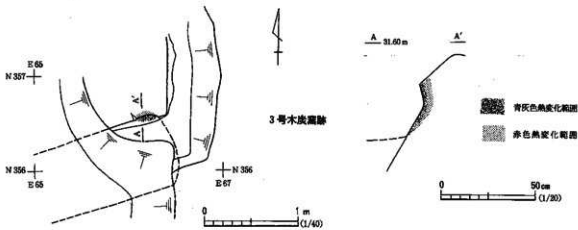


図41 3号木炭窯跡

岩盤から切り離されつつあり、東側には大きな亀裂もあって、崩落寸前という状態であった。したがって、上記の立ち上がり角度も旧状を保ったものとは言えない。遺物は出土していない。

まとめ

自然崩落と浸食により、大半が失われた窯跡である。遺構発見時に多くの炭化物が散布していたことや、須恵器が出土していない点などから、本遺構を木炭窯と推定した。年代については不明であるが、隣接する1・2号須恵器窯などと大差ない年代が与えられると思っている。(本間)

第5節 粘土採掘坑

遺構 (図42～45、写真33・34)

I区の西側斜面には粘土採掘坑群が存在する。この地域の基本土層は、L I～Xまで11層認められた。L I・II以外は東側斜面部とは全く異なるもので、本地区独自に命名したものである。斜面中位に堆積した土層を観察すると、L I・II及び暗褐色砂質シルトで礫を5%ほど含むL III、褐灰色シルト質粘土で礫を7%ほど含むL IVが厚く堆積している。これらは礫を多量に含むことから、斜面上方から流出してきたものと考えられる。標高38m付近からは、明黄褐色で良質の粘土層L Vが厚く広がり、標高32m付近まで斜度10°程の緩斜面が続く。この緩斜面の、南北約32m・東西約15mの範囲に粘土採掘坑群が存在している。その下層、オリーブ黒色シルト質粘土のL VIを挟んで、黄褐色粘土のL VII a、褐灰色粘土L VII bが堆積している。L VII bの下層、斜面下位には黒色シルト質粘土のL VIII、褐色砂質シルトのL IX、褐色シルト質粘土のL Xが堆積しているが、いずれも礫を15～20%ほど含み、斜面西端において中島川の浸蝕によって削られて急斜面を形成している。

粘土採掘坑は総計17基検出されている(各粘土採掘坑については、1号粘土採掘坑を「粘1」のように、略して記してゆくことにする)。すべて前述の基本土層L Vを掘り込んだ遺構であるが、粘8・9の地点は、L V直下が粘土層のL VII aであるため、L VII aまで掘り込まれている。これら

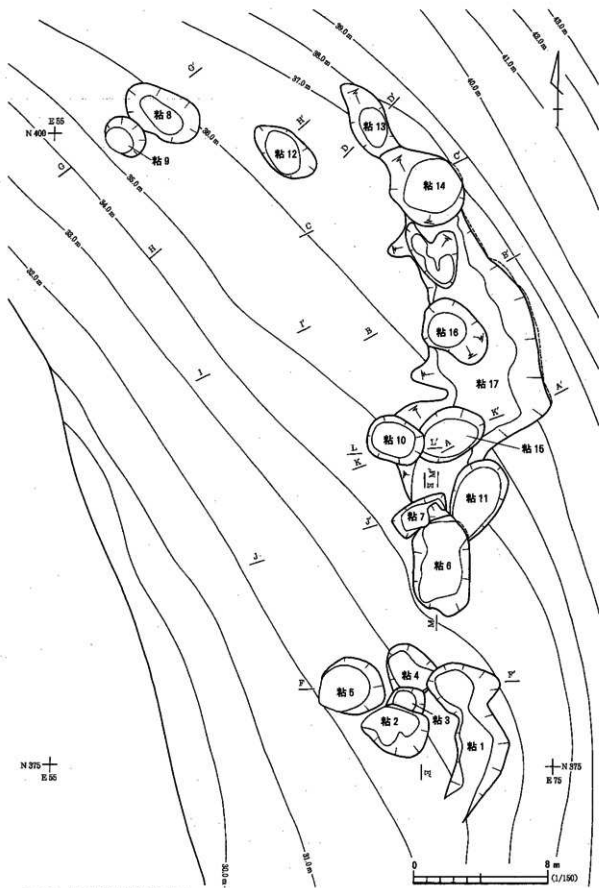


図42 粘土採掘坑群平面図

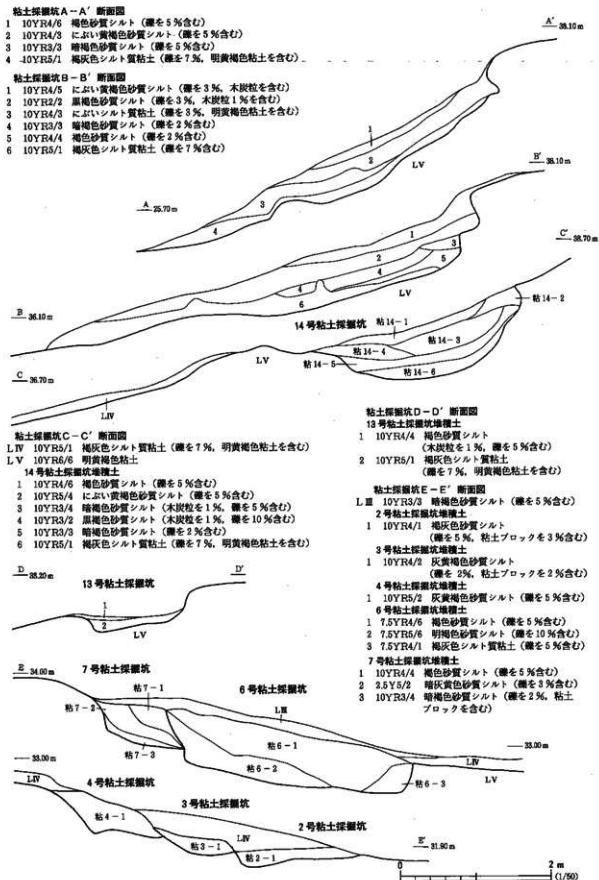


図43 粘土採掘坑群断面図(1)

第2章 遺構と遺物

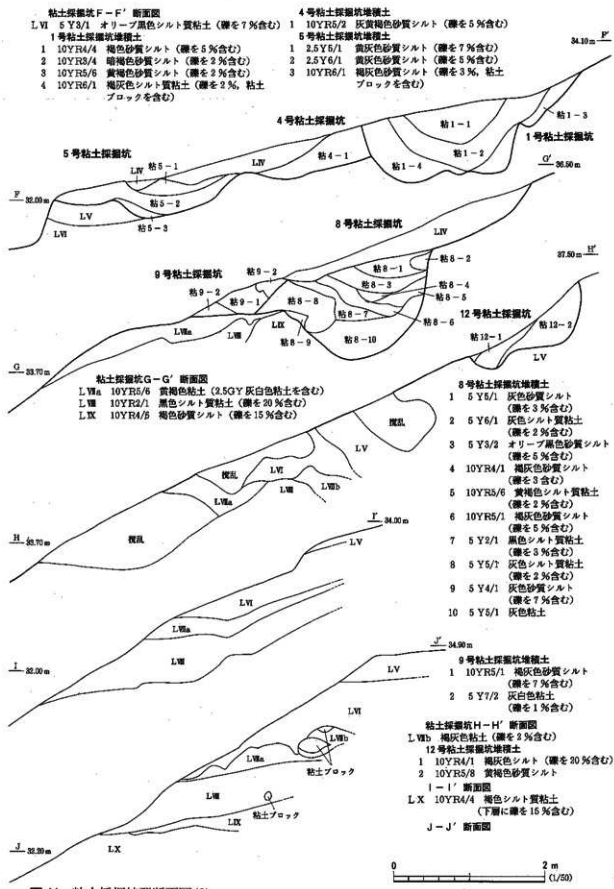


図44 粘土探掘坑群断面図(2)

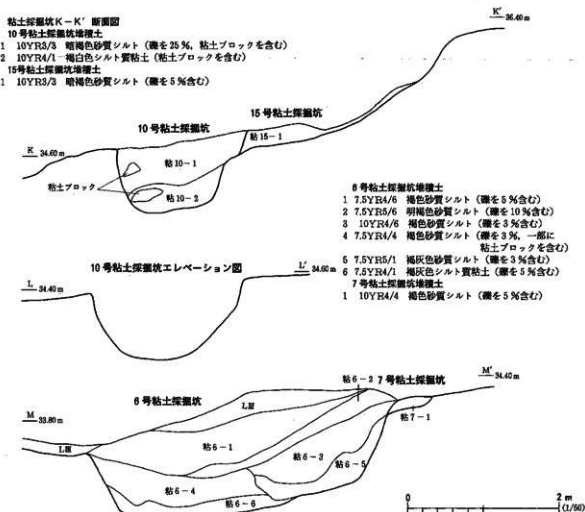


図 45 粘土採掘坑群断面図 (3)

の粘土採掘坑にはいくつかの重複関係が認められる。粘土採掘坑群南端の標高32～34mの地点には、粘2～4及び、粘1・4の間に重複関係が確認されている。このうち、粘2～4の新旧関係は土層観察により粘4→粘3→粘2の順で掘り込まれている。この3基の堆積土及び含有物が近似していることから、ごく短期間に連続して粘土が採掘されたものと考えられる。また、粘1と粘4の重複関係は、粘4→粘1の順で掘り込まれている。粘6・7も重複関係にあり、粘7の堆積土を切って粘6が掘り込まれていることが確認された。粘6は、粘土層を狙って斜面奥深くまでトンネルのように横掘りをする、この地域特有の近代の粘土採掘坑の構造と一致する。同様に、粘6・11も重複しており粘6が新しい。粘8・9の重複関係は土層観察により粘8→粘9の順に掘り込まれていることがわかった。粘8のℓ8を切って粘9が掘り込まれていること、粘8のℓ6と粘9のℓ1が礫を5～7%ほど含む褐灰色砂質シルトではほぼ同質であることから、粘8の埋没途中に粘9が掘り込まれた可能性が高い。粘10・15の重複関係は、粘15の堆積土を切って粘10が掘り込まれていることから粘15の埋没後、粘10が掘り込まれたと考えられる。

次に、本粘土採掘坑群の特徴を記載するが、個々の規模については表4にまとめたので省略する。

表4 大猿田遺跡粘土探掘坑一覧表

()は遺存値を示す

遺構 番号	位置 (グリッド)	規模 (cm)			平面形・断面形・重複関係
		上端	下端	深さ	
粘1	R13	622×204	602×150	94	不整形、底面凹凸、粘4→粘1
粘2	Q13	270×178	225×154	22	不整形、底面平坦、粘4→粘3→粘2
粘3	Q13	152×(80)	80×(71)	24	円形、丸底状、粘4→粘3→粘2
粘4	Q・R13	216×176	170×100	55	不整形、底面凹凸、粘4→粘1、粘4→粘3→粘2
粘5	Q13	261×218	200×192	50	円形、底面凹凸
粘6	Q・R12	453×228	307×162	87	近代の粘土探掘坑、粘7→粘6、粘11→粘6
粘7	Q・R12	231×110	178×88	50	隅丸長方形、粘7→粘6
粘8	P・Q10	320×186	200×100	125	楕円形、丸底状、粘8→粘9
粘9	P10・11	175×138	112×88	40	円形、底面平坦、粘8→粘9
粘10	Q12	221×175	167×130	85	隅丸長方形、鍋底状、粘15→粘10
粘11	R12	(285)×200	(256)×160	55	楕円形、粘11→粘6
粘12	Q10・11	285×153	188×117	65	楕円形、底面凹凸
粘13	Q10・11	321×150	170×97	20	楕円形、底面平坦
粘14	Q・R11	368×268	240×202	78	円形、丸底状、東端オーバーハング
粘15	Q・R12	(292)×200	(230)×154	55	楕円形、粘15→粘10
粘16	Q・R11	292×208	150×143	51	円形
粘17	Q・R11・12	950×520	850×320	70	不整形、底面凹凸、東端オーバーハング

また、粘6は上記の通り近代の粘土探掘坑の構造と一致し、他の粘土探掘坑が完全に埋没してから掘り込まれているので、ここでは粘6以外についてのみ記すこととする。下端の平面形は、円形を基調とするもの(粘3・5・9・14・16)・楕円形を基調とするもの(粘8・11・12・13・15)・隅丸長方形を基調とするもの(粘7・10)・不整形のもの(粘1・2・4・17)とに大別される。上端の平面形は不整形のものが多く、規格性が認められない。断面形は、周壁が急角度で立ち上がるものが数多く、オーバーハングするもの(粘14・17)も存在している。これは良質の粘土層を狙って、横方向から抉りながら探掘したことが原因と考えられる。

底面は平坦なもの、凹凸が見られるもの、丸底状、鍋底状を呈するもの等、様々である。規模は、下端の長径0.5~2.0m・短径0.5~1.0m、検出面から底面までの深さ50cm以下の小規模なもの(粘3・7・9・13)、下端の長径1.0~2.0m・短径1.0~1.5m、深さ50cm以上の中規模なもの(粘4・10・12・16)、下端の長径2.0~3.0m・短径1.5~2.0m、深さ50cm以上の比較的大型なもの(粘2・5・8・11・14・15)、下端の長径3.0m以上・短径1.5m以上、深さ50cm以上の大規模なもの(粘1・17)に分類できる。なお粘2は、深さが22cmと浅いが平面的には大型の部類に属する。

R11グリッドに位置する標高35~38mにかけては、南北9.5m・東西5.2mにわたる大規模な掘り込みが認められる。この粘17の東壁部にはオーバーハングが見られ、粘土探掘に当たり粘土層を横から抉り取った形跡が確認できる。粘17南側には底面をさらに掘り込んで粘15が存在している。粘15底面に堆積する ℓ 1は、粘17南側の堆積土 ℓ 3と一致していることから、粘17の探掘後、連続して粘15が掘り込まれ、同時に埋没した可能性が高い。同様に、粘17中央部の底面をさらに掘り込んだ粘16についても粘17探掘後、連続して掘り込まれた可能性が考えられる。

なお、粘土探掘坑からの出土遺物として、整形技法不明の土師器片が3点確認されているが、いずれも斜面上位からの流れ込みによるもので遺構に伴う遺物ではない。

ま と め

本粘土採掘坑群からは、遺構に伴う遺物は出土していない。しかし、粘6・7及び粘6・11の重複関係から、粘6で見られた近代の粘土採掘坑とそれ以外の粘土採掘坑とは構造が異なり、かなり時間差がある可能性が高い。また、本調査区からは中世以降の遺構が確認されていないことを考えると、粘6以外の粘土採掘坑は、古代に機能していた可能性が高いと考えられる。

本遺構群の周辺部には、1・2号須恵器窯跡が存在する。また、東側斜面部の堅穴住居跡に設置されたカマド袖部に粘土使用が認められ、ロクロピットと思われる施設をもった11号住居跡が存在することなどから、これらに供給するための粘土を採掘した遺構と推測したい。また、個々の粘土採掘坑には明確な規格性が認められないことから、必要な時に必要量だけ、良質な粘土を採掘することが最大の目的であったと考えられる。
(西井)

第6節 土 坑

調査区から検出された土坑は12基である。このなかで古墳時代後半と考えられるのは2号土坑である。さらに壁面や壁面及び底面に焼け面が認められるのは、1・3・6・7・10号土坑などである。なお1・3・7号土坑については、平安時代の住居跡を掘り込んでいる。10号土坑については、出土遺物から平安時代の住居跡と有機的に結びついて機能していたことが考えられる。

1号土坑 SK01

遺 構 (図46, 写真35)

1号土坑は、調査区東側丘陵部のT11グリッドに設置する。2号住居跡の床面を精査している際に検出された。本土坑の堆積土の上に2号住居跡が構築されている状況から、新旧関係は本土坑の方が2号住居跡より古いと考えられる。本土坑は、地山であるLVを掘り込んで構築されている。堆積土は、褐色砂質シルト(ℓ1)と黒褐色砂質シルト(ℓ2)の2層で、どちらにも炭化物・焼土が含まれている。特にℓ2には炭化物・焼土が多い。堆積状況は自然に堆積したℓ2の上を均すようにℓ1が存在していることから、ℓ1は2号住居跡を構築する際に人為的に敷設された貼床と思われる。

平面形は、長径1.5m、短径85cmの隅丸方形を呈する。検出面から底面までの深さは、南側で最大13cmを測る。底面は凹凸があり、壁の立ち上がりは緩やかである。北壁には、わずかに酸化面が確認された。

ま と め

北側の壁に熱を受けたと思われる酸化面が確認できることと、ℓ2に多量の炭化物と焼土を含むことから、本土坑は木炭焼成土坑の可能性が高い。出土遺物がなく、遺構の詳しい年代は特定できないが、2号住居跡より古いことから、8世紀後半以前と考えられる。
(佐久間)

2号土坑 SK02

遺 構 (図46, 写真35)

本遺構は調査区東側のS12グリッドに位置し、丘陵緩斜面の上位に立地する。近接する遺構として、東側約3mの地点に3号住居跡が存在する。検出面はLIVまたはLVの上面である。

遺構内堆積土は2層に分層される。ℓ1は暗褐色砂質シルト、ℓ2はにおい黄褐色砂質シルトでLIVを攪拌して流入堆積した。平面形は楕円形で、規模は、上端で長軸2.4m、短軸1.52m、下端で長軸1.7m、短軸90cmを測る。底面は南北方向で若干の凹凸が見られるが、東西方向ではほぼ平坦で、斜面の傾斜に沿うように西から東にわずかに傾斜する。周壁は、緩やかに外傾しながら立ち上がり、検出面から底面までの深さは最大で32cmを測る。

遺 物 (図46-1・2)

本遺構内からは、ℓ1より土師器片が7点出土した。2は底部及び体部の破片の2点が本遺構より出土したが、S12グリッド尾根付近より出土した体部8片と接合してきたことから尾根部からの流入によるものと考えられる。

土師器壺(図46-1・2) 1は非ロクロ整形で口縁部から体部上位にかけて遺存する。口縁部から頸部にはヨコナデ調整が施され、体部にはヘラケズリの後にヘラナデ調整が加えられている。内面はヨコナデ後にヘラナデ調整が施されている。口径は推定値で13.6cmを測るものと考えられる。

2は非ロクロ整形で体部下位から底部にかけて遺存する。体部にはヘラケズリ調整、内面にはヘラナデ調整が加えられている。

ま と め

本遺構からの遺物はいずれも自然流入によるものと考えられ、遺構に伴う遺物はない。したがって本遺構の時期・性格はともに不明である。

(酒 井)

3号土坑 SK03

遺 構 (図46, 写真35)

3号土坑は南向き斜面T13グリッドに位置する。6号住居跡と重複している。新旧関係は本土坑が新しい。堆積土は炭化物・焼土粒を含む暗褐色シルト及び黒褐色シルトである。炭化物は壁際に沿って堆積していた。

平面形は円形を呈し、径は1.18mで、深さは18cmである。遺物は土師器が2片出土した。

ま と め

本土坑の時期については、出土物が細片で時期を特定するまではいかない。重複する6号住居跡の時期を参考にすると、9世紀中葉頃が考えられる。

さらに、堆積土に残留する成分を分析することで、土坑内に存在していた内容物を推定するためにリン・カルシウム分析を実施した。

(吉 野)

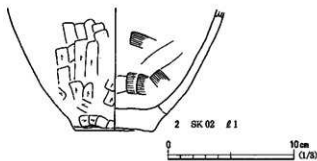
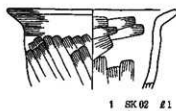
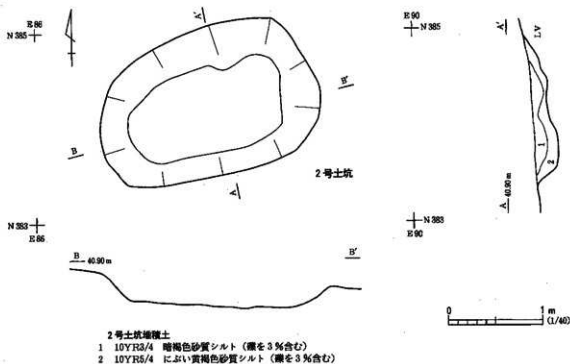
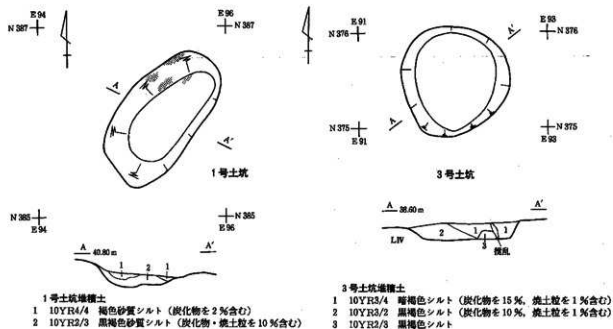


図46 1~3号土坑, 2号土坑出土土器

4号土坑 SK04

遺構 (図47, 写真35)

本土坑は調査区東側のT12グリッドに位置する。丘陵裾部の標高40m程の東向き緩斜面で確認された。検出面は4号住居跡床面であり、この重複関係により本土坑の方が新しい。

遺構内堆積土は2層に分層され、共に小礫を少量含むシルト質の堆積土である。ℓ1は暗褐色砂質シルト、ℓ2は黄褐色砂質シルトで、東側斜面上位からの流れ込みと壁側の三角堆積が観察されることから、自然堆積によるものと考えられる。

平面形は不整楕円形を呈し、遺存する上端の長軸で75cm、短軸で55cmを測る。検出面からの深さは、遺存状態の良い西壁で18cm、最深部で20cmである。

断面形は鍋底状を呈しており、周壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凹凸はあるが、ほぼ平坦である。

まとめ

本土坑の性格は不明であるが、調査区内から検出された土坑の中では小型に属するものである。機能時期は、出土遺物がないため明確には判断し得ないが、古墳時代後期に機能していたものと考えられる。 (福島)

5号土坑 SK05

遺構 (図47, 写真35)

5号土坑は南向き斜面T13グリッドLⅢbで検出された。付近には1号掘立柱建物跡が位置する。堆積土は3層に分層され、ℓ1はLⅡに近い土質である。

平面形は方形を呈し、長軸が1.7m、短軸が1.64mで、深さは14cmである。遺物は土師器が4片出土した。周壁の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿形を呈する。

まとめ

本土坑の時期については、出土遺物が細片であることから、明確な時期の特定は困難である。

(吉野)

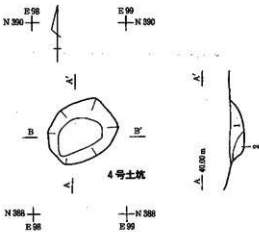
6号土坑 SK06

遺構 (図47, 写真35)

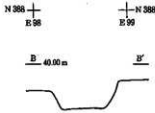
6号土坑は南向き斜面S16グリッドに位置する。他の遺構との重複は認められないが、北側4mには、9号住居跡が近接している。

土坑内堆積土は、ℓ1が褐色砂質シルト、ℓ2は木炭粒をブロック状に含む暗褐色砂質シルトである。

平面形は隅丸長方形を呈し、長軸が88cm、短軸が74cm、深さが16cmである。底面は平坦で、

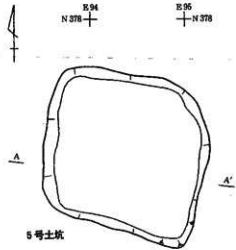


4号土坑

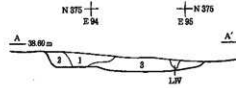


4号土坑増殖土

- 1 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (礫を7%含む)
- 2 10YR4/3 におい暗褐色砂質シルト (礫を3%含む)



5号土坑



5号土坑増殖土

- 1 10YR5/4 におい黄褐色シルト (礫を10%含む)
- 2 10YR4/4 褐色粘質シルト (礫を5%含む)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト (礫を10%, 炭化物を5%含む)

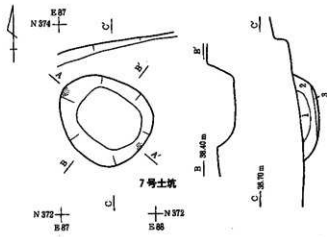


6号土坑

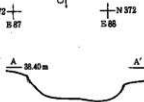


6号土坑増殖土

- 1 10YR4/4 褐色砂質シルト
- 2 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (木炭粒をブロック状に含む)



7号土坑



7号土坑増殖土

- 1 10YR2/1 黒色砂質シルト (木炭粒を多量に含む)
- 2 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (E 1を50%含む)
- 3 10YR2/1 黒色砂質シルト



図 47 4 ~ 7号土坑

周壁は緩やかに立ち上がる。北部と北東部の壁面および底面に赤色熱変化範囲が僅かに認められた。

ま と め

本土坑の性格は堆積土と壁面および底面の熱変化から、坑内で製炭を行った遺構と考えられる。年代を決定づけるような出土遺物はなく、時期については不明であるが、立地状況から見て、9号住居跡と関連する遺構である可能性があらうと考えられる。(佐藤)

7号土坑 SK07

遺 構 (図47, 写真36)

7号土坑は南向き斜面S13グリッドに位置する。5号住居跡と重複しており、新旧関係は本土坑が新しい。堆積土はℓ1が木炭粒を多量に含む黒色砂質シルト、ℓ3が黒色砂質シルトにより、2回に渡り操業が行われたことが考えられる。

平面形は楕円形を呈し、長軸が1.02m、短軸が87cm、深さが18cmである。底面は平坦で、周壁は緩やかに立ち上がる。北西部と南東部の壁面には赤色熱変化範囲が僅かに認められた。

ま と め

本土坑の性格は堆積土と壁面の熱変化から、坑内製炭を行った遺構と考えられる。時期については出土遺物がなく、重複する5号住居跡の時期から想定すると9世紀前半が考えられる。

(戸田・吉野)

8号土坑 SK08

遺 構 (図48, 写真36)

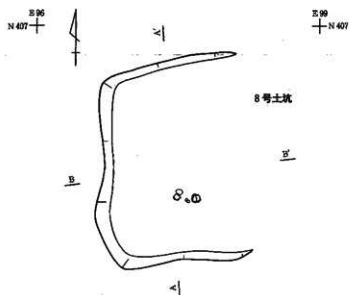
本土坑は、南向き斜面T10グリッドのLV上面で検出された遺構である。重複する遺構はないが、南側に2号住居跡・1号土坑が存在している。

堆積土は3層に分層される。堆積状況は、斜面上位から遺構内に流れ込んで堆積している状況が観察されたことから、自然堆積と考えられる。

平面形は隅丸方形を呈するが、斜面東側が流出しているため、明確なプランは不明である。遺存する規模は、長軸2.15m、短軸1.6mである。底面はやや凹凸があり、東側に向かって緩やかに傾斜している。周壁は、東側斜面下位にいくほど遺存状態が悪く、良好な西壁は底面より直立ぎみに立ち上がっている。壁高は最も遺存状態の良い西壁で40cmを測る。遺物は、中央部やや南側の底面から土師器甕片6点が出土したが、全て摩滅が著しく、小片のため図示できなかった。

ま と め

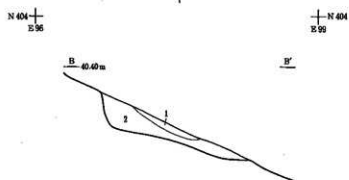
本遺構は、検出時に住居跡の可能性も考慮に入れ精査を行ったが、床面が平坦でない点やカマド・柱穴が確認できなかったことから土坑と判断した。遺構の性格は不明であるが、図示できなかった遺物中には非ロックロ土師器甕と小型甕があり、丘陵縁辺部に立地する他の遺構との関連も考慮すると古墳～奈良時代の遺構と思われる。(佐久間)



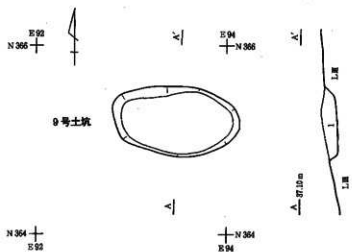
8号土坑

8号土坑堆積土

- 1 7.5YR3/2 黒褐色シルト (礫を10%含む)
- 2 7.5YR4/3 褐色シルト (礫を3%含む)
- 3 10YR4/4 褐色シルト (礫を3%含む)

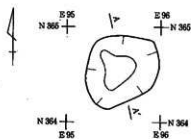


9号土坑

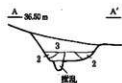


9号土坑堆積土

- 1 10YR3/3 暗褐色砂質シルト



11号土坑



11号土坑堆積土

- 1 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (炭化物を4%含む)
- 2 7.5YR4/6 褐色砂質シルト
- 3 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (粘土粒を1%含む)



図48 8・9・11号土坑

9号土坑 SK09

遺構 (図48, 写真36)

9号土坑は南向き斜面T14グリッドにLⅢから検出された。付近には10・11号土坑が位置する。堆積土は暗褐色砂質シルトのみである。

平面形は長楕円形を呈し、長軸が1.35m、短軸が75cm、深さが15cmである。底面はほぼ平坦で、周壁は緩やかに立ち上がる。

まとめ

本土坑の性格や時期については明確ではないが、付近の遺構から勘案すると時期は平安時代が妥当なものと考えられる。
(戸田・吉野)

10号土坑 SK10

遺構 (図49, 写真36)

本土坑は、南向き斜面T14グリッドのLV上面で検出された遺構である。底面中央部で11号土坑と重複する。新旧関係は本土坑の方が11号土坑より新しい。近接している遺構には、北側に7号住居跡、南側に第1遺物包含層が存在している。

堆積土は3層に分層され、どの層も炭化物を多く含んでいるのが特徴である。特にℓ3は黒色砂質シルトで斜面下部に当たる遺構の南側になるほど炭化物の量が増える。堆積の状況は、あらかじめ遺構内に存在していたℓ3の上に、斜面上位からℓ1・2が流れ込んで堆積したと考えられる。

平面形は方形を呈するが、斜面南側が流出しているため、明確なプランは不明である。遺存する規模は、南北方向に4m、東西方向に2mである。周壁は、南側斜面下位にいくほど遺存状態が悪く、良好な北壁と東壁は底面から直立ぎみに立ち上がっている。壁高は最も遺存状態の良い北壁で22cmを測る。底面はほぼ平坦で、南側に向かって緩やかに傾斜している。

遺構の南側底面で半径約20cmの円形の酸化面を確認した。また、それより南側の底面からは炭化物がまとまって出土している。一番大きなもので長さ85cm、幅4~10cmを測る。更に遺構外ではあるが、本土坑のすぐ西側には長さ約80cm、短径約55cmの楕円状の範囲で炭化物を集積したと思われる炭化物層が確認されている。本土坑と関連があるものと思われる。

遺物 (図49)

10号土坑から土師器片が49点、須恵器片が1点出土した。その中から図示したものが図49である。

土師器杯 (図49-1) ロクロ整形による土師器杯である。内面黒色処理が施されており、体部下位に横方向、底部に一方方向への顕著なミガキが施されている。外面は体部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ再調整が施されている。

須恵器杯 (図49-2) 胴部下端から底部にかけて遺存する須恵器杯である。体部下端及び底部全

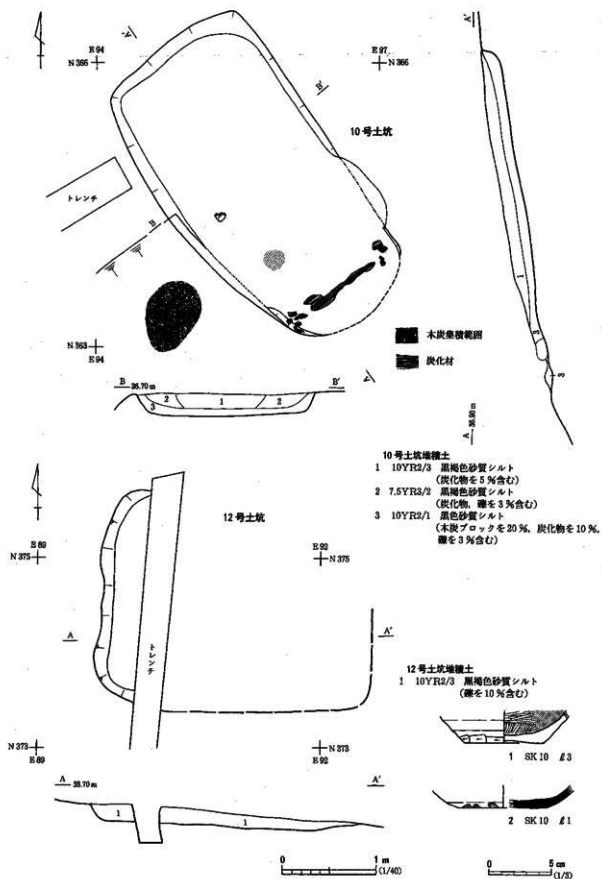


図49 10・12号土坑。10号土坑出土土器・須恵器

面にかけて手持ちヘラケズリ再調整が施され、火ダスキが認められる。

ま と め

遺構の性格は、出土する炭化物の量が多いこと、南側底面に酸化面が確認できたことから木炭焼成土坑の可能性はあるが、壁面に酸化面を確認できないことから、なお断定はできなかった。

本遺構の所属時期は出土した遺物から8世紀末～9世紀前葉と思われる。(佐久間)

11号土坑 SK11

遺 構 (図48, 写真36)

本土坑は、南向き斜面T14グリッドの10号土坑底面から検出された遺構である。新旧関係は本土坑の方が10号土坑より古い。堆積土は3層に分層され、 $\ell 1$ には炭化物を、 $\ell 3$ には焼土を微量含んでいる。堆積状況は、自然に堆積した $\ell 1$ の上をならすように $\ell 2$ が堆積していることから、10号土坑を構築する際に人為的に埋められたものと思われる。平面形は直径約70cmのほぼ円形を呈する。周壁は緩やかに立ち上がる。底面は攪乱を受け凹凸があり、深さは最深部で25cmを測る。

ま と め

本遺構の性格は、堆積土より炭化物や焼土が出土しているが、量が少ないことから木炭焼成土坑の可能性は低い。詳しい性格は不明である。また、所属時期についても出土遺物がないので確定できないが、10号土坑との重複の様子から8世紀末～9世紀前葉と思われる。(佐久間)

12号土坑 SK12

遺 構 (図49, 写真36)

12号土坑は、南向き斜面S13グリッドLIVで検出された。重複する遺構は5号住居跡である。新旧は住居跡の壁を掘り込んでいる本土坑が新しい。堆積土は1層のみの黒褐色シルトで、LIIIに近い土質である。平面形は西側の周壁を検出したのみである。東西の長さが上端で2.2mで、深さは17cmである。遺物は土師器が4片出土した。周壁の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿形を呈する。

ま と め

本土坑の時期については、出土遺物が細片で明確な時期の特定は困難である。しかし、重複する5号住居跡の年代を参考にすると、9世紀前半の時期が考えられる。(吉野)

第7節 遺物包含層

第1遺物包含層 SH01

遺 構 (図50, 写真37・38)

本遺物包含層は、調査区東部T15グリッドを中心とした標高34～38mの南向き斜面の下段に

位置する。斜面上部には5号住居跡があり、東側に9～11号土坑、西側に10号住居跡が隣接する。

その範囲は東西約9.6m、南北約15mの不整形を呈する。平面的な広がりには約103㎡となっている。この斜面の斜度は平均約14°最大斜度は約20°である。

包含層の堆積土は4層に分層された。ℓ1は、暗褐色シルトで斜面下位南側の方が厚い。ℓ2は褐色シルトで、斜面上位から広い範囲に堆積しており、その厚さは20cmを測る。ℓ3は暗褐色シルトで包含層の中心部のみ見られる土層である。厚さは最深部で30cmを測る。ℓ4は黒褐色シルトで地山のLV上に40cmの厚さで堆積している。基本土層との対応は、ℓ2がLⅡに、ℓ3がLⅢaに、ℓ4がLⅢbに対応する。ℓ1に対応する土層は基本土層中には存在しない。

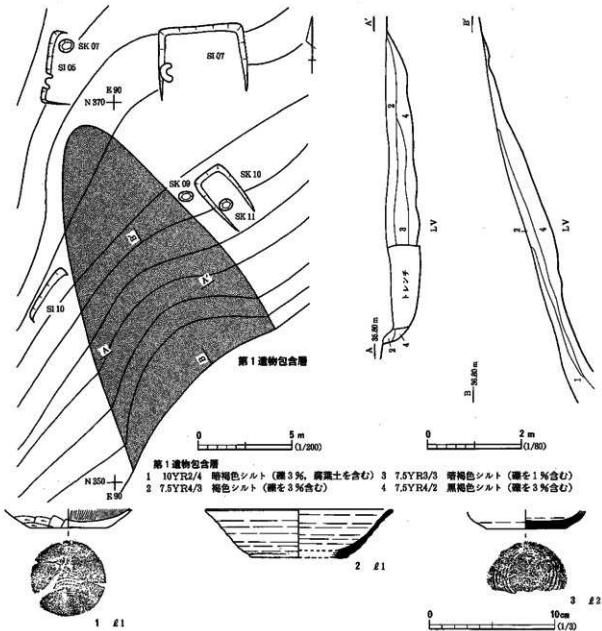


図50 第1遺物包含層，出土土師器・須恵器

遺物 (図50, 写真58)

本遺物包含層から出土した遺物は、土師器片が404点、須恵器片が44点である。そのなかから図示できたものが図50である。

土師器杯 (図50-1) ロクロ整形による土師器杯である。底部の切り離しは回転糸切りによるもので、手持ちヘラケズリによる再調整が認められる。内面は黒色処理が施され、ヘラミガキが顕著に認められる。

須恵器杯 (図50-2・3) いずれも内面と外面にロクロナデによる調整が認められる。底部の切り離しは、2が回転ヘラ切りによるもので、3は回転糸切りである。

まとめ

本遺物包含層は、斜面上方に5号住居跡があることから、この住居跡の遺物が流入して形成されたものとする。時期については、8世紀末以降と考えられる。(佐久間)

第8節 遺構外出土遺物 (図51~53, 写真58・59)

遺構外から出土した遺物は、縄文土器が93点、弥生土器が70点、土師器が889点、須恵器が42点、石器が1点である。遺物は遺構が集中する南向き斜面から多く出土している。

土師器杯 (図51-1~6) いずれも内面にはミガキ・黒色処理が施されている。1のみが非ロクロ整形のもので、2~6はロクロ整形のものである。

底部の切り離しは3・6が回転糸切りである。底部の調整は2・3・6が体部下半から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整、4が体部下半から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整である。5については外面が摩滅しているため調整などは不明である。

土師器高台付杯 (図51-7) 杯部内面にはミガキ・黒色処理が施されている。

土師器壺 (図51-8~14) 9・11~13は非ロクロ整形で、8・10・14はロクロ整形である。8・9の体部外面下端にはケズリが施されている。10の体部外面はロクロナデ、体部内面はナデが施されている。11の頸部には段を有し、口縁部はヨコナデ、体部外面にはナデ・ミガキが、体部内面にはナデ・ミガキが施されている。12の口縁部はヨコナデ、体部外面はケズリ・ナデ、体部内面はナデが施されている。13の口縁部はヨコナデ、体部外面はケズリ、内面はナデが施されている。14の体部内外面ともにロクロナデが施されている。

須恵器杯 (図52-1~5) 底部の切り離しは1~4が回転ヘラ切りで、5が回転糸切りである。1・2・4には手持ちヘラケズリ調整が施されている。色調はいずれも灰白色を呈している。

須恵器壺 (図52-6~9) 6~8の体部外面には平行タタキが、体部内面にはアテ具がスリ消されている。6の体部外面もタタキメをスリ消されており、7の体部外面のタタキメを切るようにして布目痕が認められた。9は底部の破片で、外面はナデが施されている。

土製品 (図52-10) 4号住居跡のものと同形態が類似する手捏ね土器である。粘土紐積み上げによ

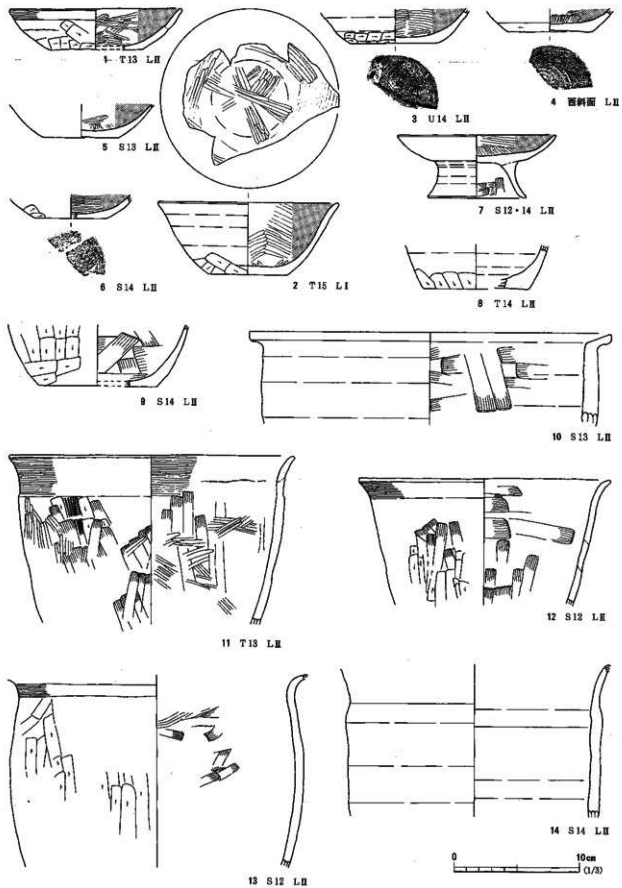


图51 遺構外出土土師器

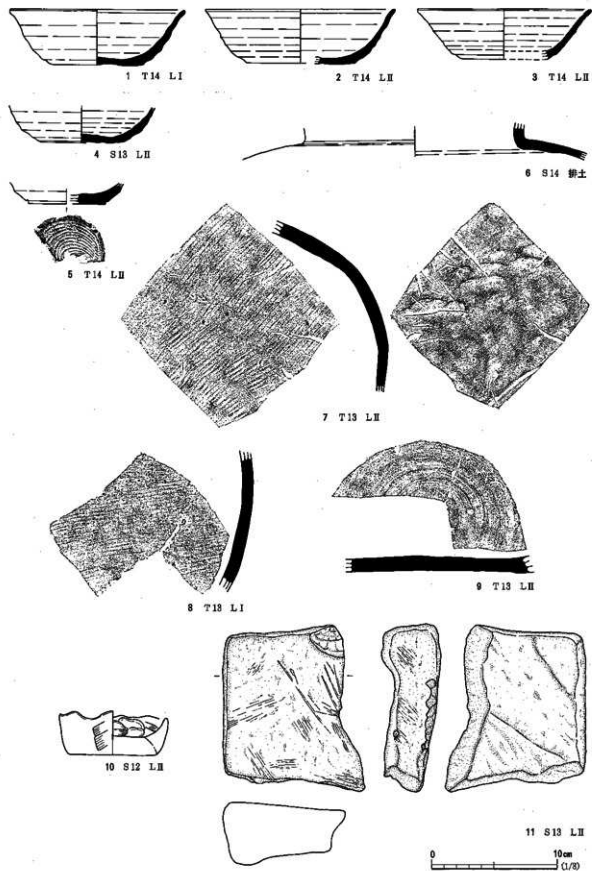


図52 遺構外出土須恵器・土製品・石製品

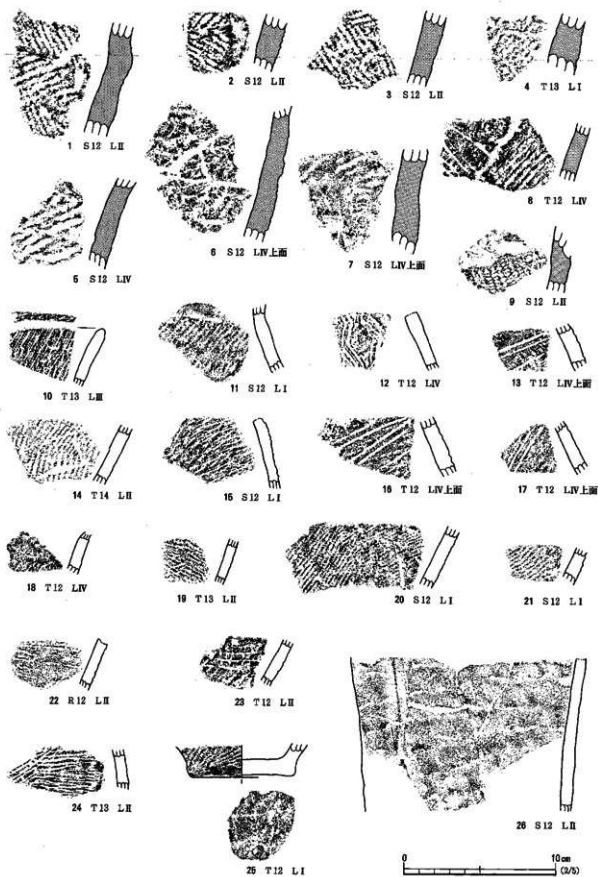


図53 遺構外出土縄文土器・弥生土器

り成形され、外面はナデ、内面は指ナデにより仕上げられている。

弥生土器（図53-14～25） 12・13・16・17は壺形土器と考えられるが、14・15・18～25は壺形土器か甕形土器かは判然としない。10は口縁部、11は頸部、25は底部である。25の底部外面には木葉痕が認められる。10～25については、時期は弥生中期後半のものと思われる。

縄文土器（図53-1～13・26） 1・2には羽状縄文が施され、6の内面には条痕がみられる。さらに1～4・9と5～7は胎土・色調・文様などから同一個体とみられる。1～9の胎土には繊維が含まれている。26は体部外面は無文であるが、隆帯が縦方向に巡っている。時期は1～7・9が縄文前期初頭、8・10～13が縄文前期の大木3式で、26が中期の阿玉台式とみられる。

石製品（図52-11） 砥石であり、最大長が13.2cm、最大幅が11.4cm、最大厚が5.0cmである。

（吉野）

表5 大猿田遺跡出土土器一覽表(1)

注：()内は測定値 []内は残存量 単位はcm

遺物番号	原形	器形	出土地点	口径	底径	器高	遺存度	外面の特徴	内面の特徴	備考	
図11-1	土師器	杯	S101F2	(12.6)	(8.8)	5.15	45%	ロコナデ、体部下端 一底面凹陥ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色地層		
2	土師器	杯	S101F1	(15.0)		[6.1]	50%	ロコナデ	ヘラミガキ、黒色地層		
3	土師器	杯	S101F2		(6.4)	[3.8]	25%	ロコナデ、体部下端 一底面凹陥ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色地層		
4	土師器	杯	S101F3	(13.4)	6.3	4.8	70%	ロコナデ、体部下端 一底面凹陥ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色地層	底面に黒着	
5	土師器	小壺型	S101F3	(14.4)	7.4	10.2	55%	指オサエ、ヘラナデ ヘラケズリ	ヘラナデ		
6	土師器	小壺型	S101F3		7.1	[5.3]	30%	ロコナデ、体部下端 凹陥ヘラケズリ	ロコナデ	凹陥へ切り	
7	土師器	壺	S101カマF2F6	(15.5)		[7.2]	10%	ロコナデ	ロコナデ		
8	土師器	壺	S101カマF2F6	(20.0)		[7.7]	10%	ロコナデ	ロコナデ		
9	土師器	壺	S101F2・3、カマF2F5・6	18.5		[28.8]	70%	ロコナデ、ヘラケズリ	ロコナデ、ヘラケズリ		
10	土師器	壺	S101F2・3 カマF2F5・6・8	21.9		[28.5]	55%	ロコナデ、ヘラケズリ	ロコナデ、ヘラナデ		
図12-1	須恵器	瓶蓋型	S102F2、カマF2F6			(8.2)	30%	ロコナデ	ロコナデ		
2	土師器	壺	S102F2	15.0	7.8	3.8	90%	ロコナデ、ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色地層		
3	土師器	壺	S102F1・輸出面 カマF2F1	(19.4)		[19.0]	40%	ナギキ、ロコナデ ヘラケズリ	ロコナデ	凹陥へ切り	
図16-1	3	須恵器	瓶	S101 輸出面		(8.0)	[1.4]	10%	ロコナデ	ロコナデ	凹陥へ切り
4	土師器	杯	S103F4	18.7	8.6	90%	ロコナデ、ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色地層			
2	土師器	小壺型	S103F1・2	16.3	7.8	14.1	80%	ロコナデ、ヘラナデ ヘラケズリ	ロコナデ、ヘラナデ		
3	土師器	瓶	S103F1	22.0	9.9	19.5	90%	ロコナデ、ヘラケズリ	ロコナデ、ヘラミガキ		
4	土師器	壺	S103F2	19.3	7.2	17.5	65%	ロコナデ、ヘラケズリ	ロコナデ、ヘラナデ		
5	土師器	壺	S103F1、カマF2F1 上面	17.8	5.8	28.1	60%	指オサエ ロコナデ、ヘラナデ ヘラケズリ	ロコナデ、ヘラナデ		
7	須恵器	杯	S103 輸出面		(6.2)		15%	ロコナデ	ロコナデ		
10	土製品	手捏ね	S103F2	(8.0)	(6.0)	3.4	50%	指ナデ、指オサエ	指オサエ		
図20-1	土師器	杯	S104 床面直上	(15.4)		4.8	65%	ロコナデ、ヘラミガキ ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色地層		
2	土師器	小壺型	S104F1	(16.4)	6.1	14.1	70%	ロコナデ、ヘラナデ、指オサエ	ロコナデ、ヘラナデ		
3	土師器	壺	S104F1・2上面	(23.4)		[9.4]	15%	ロコナデ、ヘラナデ	ロコナデ、ヘラナデ		
4	土師器	壺	S104 床面直上	19.0		[17.8]	40%	ロコナデ、ヘラミガキ、ヘラナデ	ロコナデ、ヘラナデ		
5	土師器	壺	S104F1、カマF2F1	16.8	6.3	28.3	85%	ロコナデ、ヘラナデ	ロコナデ、ヘラナデ		
6	土師器	壺	S104F1	16.5	7.2	27.8	95%	ロコナデ、ヘラナデ	ロコナデ、ヘラミガキ、ヘラナデ		
7	土師器	壺	S104カマF2F1		8.7	[21.3]	40%	ヘラナデ、指オサエ	コナデ、ヘラナデ		
図21-1	土師器	壺	S104F1	6.6	[4.1]	10%	ヘラナデ、指ナデ、指オサエ	ヘラナデ			
2	土師器	壺	S104 床面直上・F1	8.0	[16.9]	10%	ヘラナデ、指オサエ	ヘラナデ、ヘラミガキ			
3	土師器	壺	S104F1	6.5	[2.4]	10%	ヘラケズリ				
4	土製品	手捏ね	S104F1	8.4	[2.7]	70%	指ナデ	指ナデ、指オサエ			
6	土製品	手捏ね	S104F1	(9.8)	7.5	3.8	80%	指ナデ	指ナデ、指オサエ		
7	土製品	手捏ね	S104F1	7.8	4.8	3.2	100%	ヘラナデ、指オサエ	指ナデ、指オサエ		
8	土製品	手捏ね	S104F1	8.6	6.0	3.7	100%	指ナデ、指オサエ	指ナデ、指オサエ		
12	土師器	壺	S106P3		9.0	[4.4]	15%	ヘラナデ、指ナデ	ヘラナデ		
図23-1	土師器	壺	S106F2		[10.7]	20%	ロコナデ、ヘラケズリ	ロコナデ、ヘラナデ			
2	須恵器	杯	S105床面F8、南側F1	(12.4)	(7.0)	4.5	20%	ロコナデ	ロコナデ	凹陥へ切り 大グスク	
3	須恵器	杯	S105F1、S10LII	(14.0)		[3.3]	20%	ロコナデ	ロコナデ		
4	須恵器	杯	S105床面F8、南側F1		5.0	[2.2]	20%	ロコナデ	ロコナデ	凹陥へ切り	
5	須恵器	杯	S105F8		7.0	[1.6]	20%	ロコナデ	ロコナデ	凹陥へ切り	
図24-1	須恵器	杯	S106F1	12.6	6.4	3.7	90%	ロコナデ	ロコナデ	凹陥へ切り	
2	須恵器	杯	S106カマF2F1		6.6	[3.7]	50%	ロコナデ、底面ヘラナデ	ロコナデ	凹陥へ切り	
5	土製品	手捏ね	S106F1	9.0	2.7	85%	ロコナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ			
6	土製品	手捏ね	S106カマF2F2	9.2	7.8	7.8	80%	指ナデ、指オサエ	ロコナデ、指ナデ	底面本葉痕	
7	土製品	手捏ね	S106カマF2F1	8.8	7.2	8.4	100%	指ナデ、指オサエ	指ナデ、指オサエ	底面本葉痕	
図25-1	土師器	瓶	S107F5	(17.9)		[7.1]	40%	ロコナデ、ヘラナデ	ヘラミガキ、黒色地層		
図28-1	土師器	杯	S109F1、カマF2F2		5.6	[2.0]	30%	ロコナデ、体部下端 一底面手捏ねヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色地層		
2	土師器	壺	S109F1、カマF2F2	(19.0)		[14.0]	20%	ロコナデ、ヘラナデ	ロコナデ、ヘラナデ		
3	土師器	壺	S109F1	19.0	7.2	30.0	100%	ロコナデ、ヘラケズリ	ロコナデ		
4	土師器	杯	S109F1、カマF2F2	30.0	11.4	31.1	75%	ロコナデ、ヘラケズリ 体部下端凹陥ヘラケズリ	ロコナデ		
5	須恵器	瓶蓋型	S109 輸出面		[10.6]	20%	ロコナデ	ロコナデ			
図29-1	土師器	高台杯	S110F1・床面直上		11.0	(6.0)	70%	ロコナデ	ヘラミガキ、黒色地層		
図33-1	須恵器	杯	S201F10・11	(14.2)		[3.7]	20%	底面凹陥ヘラケズリ	ロコナデ		
2	須恵器	杯	S201F5		(11.8)	[2.7]	20%	ロコナデ、底面ヘラナデ	ロコナデ	凹陥へ切り	

表6 大猿田遺跡出土土器一覧表(2)

注：()内は埋定値 []内は残存値 単位は㎝

遺物番号	器種	器形	出土地点	口径	底径	器高	遺存度	外面の特徴	内面の特徴	備考		
図38-3	須恵器	杯	S R01 E11		(8.6)		[2.9]	5%	ロクロナデ、底部下端回転ヘラケズリ、縁部持ちヘラケズリ	ロクロナデ		
4	須恵器	高台付杯	S R01 E1-9	(15.0)			[3.5]	20%	ロクロナデ	ロクロナデ		
5	須恵器	高台付杯	S R01 E1-6・10	(16.4)			[3.5]	40%	ロクロナデ、底部下端回転ヘラケズリ	ロクロナデ		
6	須恵器	高台付杯	S R01 E5・10・11	(14.8)			[2.9]	15%	ロクロナデ、底部下端回転ヘラケズリ	ロクロナデ		
7	須恵器	高台付杯	S R01 E11	(16.8)			[2.9]	20%	ロクロナデ、底部下端回転ヘラケズリ	ロクロナデ		
8	須恵器	高台付杯	S R01 E5・10・11	(15.2)			[3.0]	20%	ロクロナデ、底部下端回転ヘラケズリ	ロクロナデ		
9	須恵器	高台付杯	S R01 E9	(16.0)			[2.8]	10%	ロクロナデ	ロクロナデ		
10	須恵器	高台付杯	S R01 E1-9・10	(14.0)			[3.3]	30%	ロクロナデ	ロクロナデ		
11	須恵器	高台付杯	S R01 E1-10・11	(15.0)			[3.2]	30%	ロクロナデ	ロクロナデ		
12	須恵器	高台付杯	S R01 E7		(7.4)		[1.9]	40%	底面回転ヘラケズリ	ロクロナデ		
13	須恵器	高台付杯	S R01 E5・10・11		10.8		[1.9]	20%	ロクロナデ	ロクロナデ	高台部	
14	須恵器	高台付杯	S R01 E15		(11.0)		[2.5]	25%	底面回転ヘラケズリ	ロクロナデ		
15	須恵器	杯	S R01 E5・11	(17.6)	(8.4)	4.3		10%	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラケリ	
16	須恵器	鉢	S R01 E14・15	(38.2)		[8.7]		10%	ロクロナデ	ロクロナデ		
17	須恵器	輪	S R01 E11	(22.0)		[8.3]		15%	ロクロナデ	ロクロナデ		
18	須恵器	長頸瓶	S R01 E11		(9.8)		[4.0]	10%	ロクロナデ	ロクロナデ		
19	須恵器	壺	S R01 E11	(19.8)			[1.7]	8%	ロクロナデ	ロクロナデ		
20	須恵器	壺	S R01 E11	(20.0)			[2.5]	15%	ロクロナデ	ロクロナデ		
21	須恵器	壺	S R01 E11	(22.2)			[2.2]	15%	ロクロナデ	ロクロナデ		
22	須恵器	壺	S R01 E14		(16.4)		[1.1]	5%				
23	須恵器	壺	S R01 E15		(13.0)		[5.3]	5%	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ		
24	須恵器	壺	S R01 E11		(18.4)		[5.2]	5%	ヘラケズリ	ヘラケズリ		
25	須恵器	壺	S R01 E9		(14.0)		[4.8]	5%	タタキ	ヘラケズリ		
図34-1	須恵器	壺	S R01 E11		(22.4)		[14.8]	10%	タタキ、ヘラケズリ	ヘラケズリ		
図46-1	土師器	甕	S K02 E1	(13.6)			[6.2]	20%	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラケズリ		
2	土師器	甕	S K02 E1-2		6.5		[8.7]	30%	ヘラケズリ	ヘラケズリ		
図40-1	土師器	杯	S K10 E3・床面		(6.2)		[2.6]	30%	ロクロナデ、ヘラケズリ、底部下端一線部手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色施層		
2	須恵器	杯	SK10 E1		(6.2)		[1.9]	15%	ロクロナデ、ヘラケズリ、底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ		
図50-1	土師器	杯	S H01 E1		6.0		[1.5]	40%	底部手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色施層	回転系回り 回転ヘラケリ	
2	須恵器	杯	S H01 E1	(18.0)			[7.6]	2.8	10%	ロクロナデ	ロクロナデ	
3	須恵器	杯	S H01 E2	(6.2)			[1.8]	30%	ロクロナデ	ロクロナデ	回転系回り	
図51-1	土師器	杯	T16 L II	(15.6)			(7.4)	3.3	40%	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色施層	
2	土師器	杯	T16 L I	(14.2)			6.2	5.7	40%	ロクロナデ、底部下端一線部手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色施層	
3	土師器	杯	U14 L II		6.7		[2.5]	20%	ロクロナデ、底部下端一線部手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色施層	回転系回り	
4	土師器	杯	西新田中屋 L II	(6.6)			[1.8]	25%	底部下端一線部手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色施層		
5	土師器	杯	S12 L II		6.2		[2.5]	40%		ヘラミガキ、黒色施層		
6	土師器	杯	S14 L II	(6.6)			[1.5]	30%	ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色施層	回転系回り	
7	土師器	高台付杯	S12 L II, S14 L II	(12.6)			(7.8)	6.0	50%	ロクロナデ、ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色施層	
8	土師器	壺	T14 L II	(8.4)			[3.4]	6%	ロクロナデ、ヘラケズリ	ヘラケズリ	回転系回り	
9	土師器	壺	S14 L II	(9.4)			[4.2]	5%	ヘラケズリ	ヘラケズリ		
10	土師器	壺	S15 L II	(28.8)			[7.4]	10%	ロクロナデ	ロクロナデ		
11	土師器	壺	T13 L II	(22.6)			[15.3]	30%	ヨコナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラミガキ		
12	土師器	壺	S12 L II	(20.0)			[10.0]	10%	ヘラケズリ、ヘラケズリ	ヘラケズリ、ヘラケズリ		
13	土師器	壺	S12 L II				[16.2]	30%	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヘラミガキ、ヘラケズリ		
14	土師器	壺	S14 L II				[12.0]	15%	ロクロナデ	ロクロナデ		
図52-1	須恵器	杯	T14 L I	(14.0)	7.1	4.4		30%	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラケリ	
2	須恵器	杯	T14 L I	(15.2)	(8.4)	4.8		30%	ロクロナデ	ロクロナデ		
3	須恵器	杯	T14 L II	(14.0)	(6.0)	4.0		20%	ロクロナデ	ロクロナデ		
4	須恵器	杯	T14 L II		7.1		[2.9]	70%	ロクロナデ、底部ヘラケズリ	ロクロナデ	回転ヘラケリ	
5	須恵器	杯	T14 L II	(6.2)			[1.8]	25%	ロクロナデ	ロクロナデ	回転系回り	
6	須恵器	壺	S14 職土中				[3.1]	15%	ロクロナデ	ロクロナデ		
7	土師器	手取碗	S12 L II	8.6	7.0	3.5		100%	ヘラケズリ	黒オシキ、黒ナデ	底部木敷痕	
図53-25	有土土器	壺	T12 L I		(6.5)		[2.1]	5%				

第3章 考 察

第1節 遺物について

本調査区から遺物は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・土製品・石製品などが出土した。そのなかで土師器・須恵器については、各時期毎に土器群を設定することが可能である。本稿では各土器群の特徴と時期について考察してゆきたい。なお、縄文土器・弥生土器については、それぞれの時期に該当する遺構が確認されないためここでは除外したい。この稿では、I区のみ成果であり、調査区Ⅱ・Ⅲ区を総合した遺物の考察は2次調査の報告書に譲りたい。

各遺構・遺構外から出土した土師器を器形・技法上の特徴から分類したところ、第1～3土器群を設定することができた。さらに須恵器についても、器形・技法上の特徴から第2・3土器群に含むことができ、これを年代の根拠とした。なお、土器群設定までの分類は、遺構から出土した遺物が少ないためにこれを省いた。以下、それぞれの土器群ごとに記述してゆく。

第1土器群（図54-1～11）

本土器群に含まれるのは、3・4・7・8号住居跡出土土師器である。器種組成は杯・椀・瓶・小型甕・甕・手捏ね土器などで高杯・鉢・須恵器などは確認されていない。手捏ね土器については、次節で述べるためここでは触れない。

本土器群の基準は、各器種に整形段階でロクロが用いられないこと、杯の口縁部が強く外反し底部が丸底で、外面にミガキ、内面に黒色処理が施されていること、椀の口縁部が直立し、外面にミガキ、内面に黒色処理が施されること、甕は長胴化し、一部を除いて体部外面にハケメ調整が施されないこと、瓶に内外面共にミガキが施されていることなどである。

周辺地域の類例と本遺跡第1土器群とを比較検討してゆきたい。まず、本遺跡から北東約1.7kmの位置にあるタタラ山遺跡（2次調査）出土土師器・須恵器と比較してゆきたい。なお、ここで述べるタタラ山遺跡出土土器の年代観は、平成8年度に刊行される報告書での見解が優先されるものであり参考程度にとどめておきたい。

タタラ山遺跡11・15・18号住居跡出土土師器の器種組成は、杯・高杯・鉢・瓶・小型甕・甕などである。杯は有段丸底で、内面には黒色処理が施されている。甕は長胴を呈しており、頸部に段を有する。瓶・小型甕・甕の体部外面にはハケメ調整が施されている。このような特徴は、いわき地方の編年案（廣岡；1989）によると栗閉式古段階併行とすることができる。これに対して、本遺跡第1土器群でみられる杯・椀外面のミガキ、瓶内外面のミガキ、甕外面のナデ調整などが、タタラ山遺跡11・15・18号住居跡出土土師器にはみられない。

いわき地方において栗閉式古段階併行とされているものは、朝日長者遺跡46号住居跡（鈴木ほか；1981）、内宿遺跡6号住居跡（櫻村ほか；1982）、久世原館3号住居跡（吉田ほか；1989）出土土師

器などである(廣岡;1989)。上記の器種組成は、杯・高杯・鉢・甌・小型甕・甕などである。このなかで本遺跡第1土器群と共通する特徴は、土師器甕の外面調整がハケメとナデの両方がみられる。さらに、本遺跡第1土器群と類似する栗罎式古段階併行の中通り地方の資料は、西白河郡東村佐平林遺跡16号住居跡出土土師器(目黒ほか;1978)が挙げられる。器種組成は、杯・鉢・甌・小型甕・甕などである。ここから出土した土師器は、杯の外面にミガキ調整が施されていること、甌の内外面にミガキ調整が施されていることなど本遺跡第1土器群と共通している。以上から、本遺跡第1土器群は諸例からみると栗罎式古段階併行と考えられる。

年代については、タタラ山遺跡11・15・18号住居跡より先行する13・17・26号住居跡からは、MT15～TK10型式期(6世紀第2四半期～第3四半期)の須恵器杯身・高杯・甌などが土師器と共に出土している。このことから、タタラ山遺跡11・15・18号住居跡の年代は6世紀後半と考えられる。本遺跡第1土器群もタタラ山遺跡11・15・18号住居跡と同時期とみられることから、栗罎式古段階併行は6世紀後半と考えられる。

第2土器群(図54-12～29)

本土器群に含まれるのは1・2号須恵器窯跡、2・10号住居跡、遺構外出土土師器・須恵器である。本遺跡第2土器群の基準は、土師器については、器形の調整段階でロクロを用いない土師器杯(図54-12・13)と器形の調整段階でロクロを用いる土師器高台付杯(図54-14)が含まれることである。土師器の器種組成は、住居跡からの良好な出土例がないため不明である。

須恵器については、1号須恵器窯跡出土遺物を基準とした。器種は1号須恵器窯跡から出土した杯・高台付杯・碗・鉢・長頸壺・甕などである。杯は体部下端から底部にかけて再調整されるもの(図54-15)とヘラキリ・ナデ調整されるもの(図54-16)とヘラキリ無調整されるもの(図54-18)とに分かれる。高台付杯は体部下端に回転ヘラケズリ調整されるもの(図54-19～22)と調整されないもの(図54-23～26)とに分かれ、底部は回転ヘラケズリ調整(図54-27・28)される。高台付杯は金属器横敷の稜椀とみられる器形で、土師器高台付杯(図54-14)は須恵器高台付杯を横敷したものと考えられる。甕は頸部外面に波状文が描かれるものと描かれないものとに分かれる。波状文が描かれるものは、波状文の上下が沈線により区画されるものとされないものとに分けられる。甕の体部には、体部外面には平行タタキ・簾状タタキが認められ、内面には同心円文・無文のアテ具痕とアテ具痕が認められないのがみられた。なお、体部外面に簾状タタキのものは、体部内面に無文のアテ具痕が認められる。

いわき地方の窯跡資料で、比較的材料とまっている金山窯跡B地区出土須恵器と比較してみる。この資料は表採資料であるが、杯・高台付杯・蓋・甕・壺・円面甕・瓦塔など多様な器種が紹介されている(熊谷ほか;1977)。杯の切り離しの大半はヘラキリ無調整であるが、体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリ調整や体部下端から底部周縁に手持ちヘラケズリ調整が施されるものもみられる。高台付杯は底部の切り離しが回転ヘラキリ無調整である。年代については8世紀後半とされている。

本遺跡第2土器群の杯では図54-22・23のように、体部下端から底部にかけて調整が施されるものと底部が回転ヘラキリのものがあり、金山窯跡B地区と同じ様相を示している。しかし、金山窯跡B地区の杯の底径が6.6～9.6cmの範囲であること、高台付杯の底部がヘラキリ無調整であることに對して、本遺跡第2土器群の杯(図54-16)の底径が11.8cmであること、高台付杯の底部が回転ヘラケズリ調整であることなど相違点がみられる。このように杯の底径の大きさと高台付杯底部の調整から、本遺跡第2土器群は金山窯跡B地区出土遺物よりも先行するものと考えられる。

いわき地方の住居跡からは、タタラ山遺跡2号住居跡(飯村ほか;1995)出土土器が挙げられる。ここからは、非ロクロ整形の土師器杯(図54-①)・ロクロ整形の土師器杯(図54-②)・須恵器高台付杯(図54-③)が共に出土している。図54-②の底部には、一部糸切り痕が認められるために、非ロクロ整形の杯と判断できる。この年代は8世紀第3四半期とみられる。

相双地方では、相馬郡新地町善光寺遺跡9号窯跡(木本ほか;1989)出土須恵器杯、原町市金沢地区遺跡群大船迫A遺跡南区(安田ほか;1995)出土須恵器高台付杯(図54)が挙げられる。

善光寺遺跡9号窯跡出土須恵器杯は、そのほとんどのものが体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリ調整が施されるものである。さらに、9号窯跡出土杯の底径平均値が10.28cmであり、本遺跡第2土器群の杯と近い数値である。しかし、本遺跡第2土器群の杯には体部下端から底部にかけて調整が施されないため、9号窯跡よりも後続するものと考えられる。

大船迫A遺跡南区出土須恵器高台付杯は遺構外から出土したものであるが、底部には回転ヘラケズリ調整が施され、底部外面に「今」とヘラ書きされている。この須恵器高台付杯を模倣したとみられる土師器高台付杯が遺構外から出土している。この土師器高台付杯には、内外面ミガキ・黒色処理が施され、底部外面にも「今」のヘラ書きがされている。この須恵器の器形を土師器が模倣する特徴は、本遺跡第2土器群と共通する。この土器の年代は、8世紀第2四半期から第3四半期とされている。

茨城県では、石岡市鹿の子C遺跡146号工房跡(川井ほか;1983)出土須恵器高台付杯が挙げられる。鹿の子C遺跡146号工房跡出土須恵器高台付杯は、高台が高く体部下端に稜が形成されている。底部は回転ヘラケズリ調整である。さらに、ここからは「勝宝」と年紀が記された漆紙文書が出土している。この文書を戸籍とすると、天平勝宝年間の戸籍は延暦元年(782年)には廃棄されることから、高台付杯の時期は8世紀末～9世紀初頭とされている。しかし、この年代に對して、土器の検討から8世紀第3四半期とする指摘(浅井;1992)がなされており、ほぼ妥当な年代観と考えられる。

宮城県では、栗原郡築館町伊治城跡4号住居跡(白鳥ほか;1978)、桃生郡江南町須江窯跡群代官山遺跡1号窯跡(佐藤;1993)出土須恵器高台付杯が挙げられる。伊治城跡4号住居跡出土の高台付杯の底部はヘラキリ・静止糸切り無調整である。共伴する土師器は、非ロクロ整形の杯とロクロ整形の甕である。この年代については、8世紀第3四半期～第4四半期の時期とされている(白鳥;1992)。代官山遺跡1号窯跡出土高台付杯は、本遺跡第2土器群と同様に高台接合面にロクロ

回転を利用した接合沈線がみられる。器形は体部下端に稜が形成されず丸みを帯びているが、底部は回転ヘラケズリ調整である。1号窯跡の年代は8世紀第3四半期を中心とする年代が与えられている。以上、類例をみてきた。本遺跡第2土器群は金山窯跡B地区よりも先行し、善光寺遺跡9号窯跡よりも後続する編年の位置付けができる。本遺跡第2土器群の年代については、9号窯跡の年代が8世紀第1四半期から第2四半期とされており、諸例の多くが8世紀第3四半期に集約されることから、8世紀第3四半期と考えられる。

2号須恵器窯跡出土遺物については、甕のみの出土である。この口縁部の形態と頸部外面の波状文が、1号須恵器窯跡出土甕よりも簡略化されていることから、1号須恵器窯跡より2号須恵器窯跡が後続する編年の位置付けができる。年代については8世紀第4四半期が考えられる。

第3土器群

第1小群(図54-30・31) 第1小群に含まれるのは6号住居跡出土須恵器である。6号住居跡からは、須恵器と手捏ね土器が出土している。手捏ね土器については、次節で述べるためここでは触れない。

第1小群を設定した基準は、須恵器杯の器形において体部と底部の変換点が明瞭なもので、回転ヘラキリ無調整のもの(図54-30)と回転ヘラキリナデ調整のもの(図54-31)とに分かれる。

このなかで図54-30は、会津若松市大戸窯跡群上雨屋12号窯式期の杯と類似するものである。上雨屋12号窯式期は8世紀末葉から9世紀前葉とされている(石田ほか;1994)。

さらに、宮城県多賀城市多賀城跡SE2101B井戸跡第Ⅲ層出土須恵器(真山ほか;1992)と類似する。ここからは、天長7年(830)と記された書状と弘仁12年(821)の具注曆断簡の漆紙文書が出土している。漆紙文書からSE2101B井戸跡第Ⅲ層出土土器の年代は、9世紀前半代に限定されるものである。このことから、第1小群の年代は9世紀第1四半期から第2四半期と考えられる。

第2小群(図54-32~45) 第2小群に含まれるのは1・2・5・9号住居跡、遺物包含層、遺構外出土土師器・須恵器である。器種は土師器が杯・鉢・小型甕・甕であり、須恵器が杯・長頸壺などである。

第2小群とした基準は、土師器杯の底径口径比がほぼ0.4で、器高口径比が0.36~0.4となり、底径が小さく器高が高い器形であること、土師器杯の調整は体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリと手持ちヘラケズリが施されていること、小型甕・甕は非ロクロ調整のものとロクロ調整のものがみられること、須恵器杯は体部の立ち上がりが緩やかで椀状を呈しており、底部は回転ヘラキリ無調整などである。

第2小群の須恵器杯は、宮城県仙台市五本松窯跡B群窯跡(小川ほか;1987)出土須恵器杯と類似する。五本松窯跡B群窯跡は瓦陶兼業窯である。ここで焼かれた瓦は、多賀城政庁跡第4期第1小期の建物に使用されたものである。第4期第1小期は、貞観11年(869)に発生した陸奥国大地震の復興期にあたり、五本松窯跡B群窯跡の年代も869年を上限とするその直後とされている。このことから、第2小群の年代は9世紀第3四半期と考える。

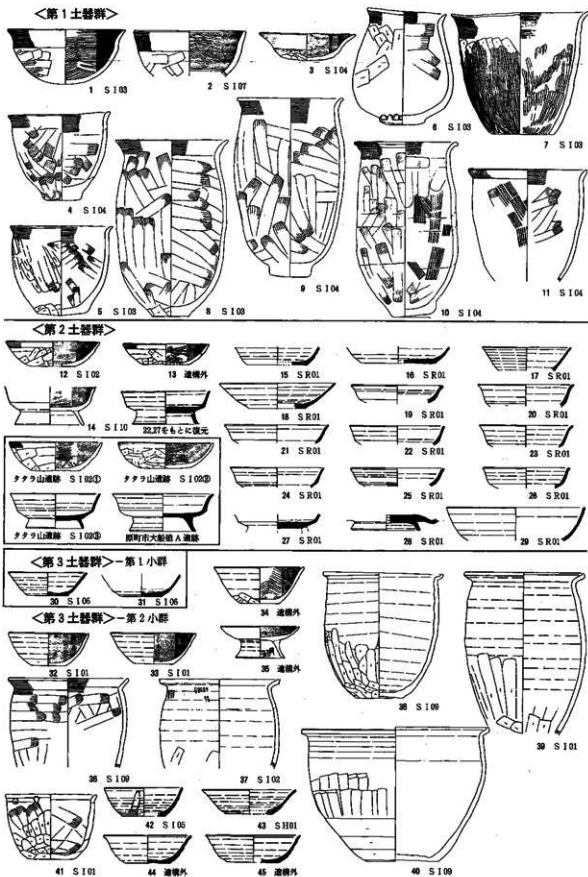


図54 大猿田遺跡出土土器群

第2節 遺構について

本調査区から検出された遺構について、出土遺物と遺構の切り合いから各期毎の遺構群を復元してゆきたい。しかし、この見解は現段階のもので、さらに2次調査の結果により変更されうることを付け加えたい。

遺構群の変遷

I期の遺構群 (図55-①) 第1土器群が出土した3・4・7・8号住居跡、2号土坑がこの時期に含まれる。I期の遺構群の年代は、第1土器群の検討から6世紀後半とした。各住居跡に共通するのは、竪穴住居跡の外壁にカマドが設けられていること、カマドの袖部分を予め掘り残して構築していること、4・8号住居跡は建て替えが認められるが、他の住居跡とは切り合い関係が認められないことが上げられる。8号住居跡については、3・4・7号住居跡より先行するが、4号住居跡との時間差はカマドが同一の壁に平行移動して営まれており、近接した時期が考えられる。このことから3・4・7号住居跡はほぼ同時期に営まれた可能性が高く、住居跡小群としてとらえたい。

II期の遺構群 (図55-②～④) 第2土器群が出土した1～2号須恵器窯跡、10号住居跡と1～3号木炭窯跡、11号住居跡、粘土採掘坑、8号土坑が含まれる。

II期の遺構群は、タケノ山遺跡と同様に須恵器生産もしくは木炭生産のムラとなる。1号須恵器窯跡と2号木炭窯跡との重複関係から最初に1号須恵器窯跡により須恵器生産が行われる。これに付随するのは10・11号住居跡、粘土採掘坑である。特に11号住居跡にはロクロピットと考えられる小穴が検出されていることから工房跡と考えられる。次に鉄生産に用いられた木炭生産を1号須恵器窯跡を改修して行い、さらにその後再び須恵器生産を行っている。この一連の流れから須恵器工人により木炭生産も担われていた(第1小期-8世紀第3四半期)。

次の時期は、2号須恵器窯跡により須恵器生産が行われる(第2小期-8世紀第4四半期)。1・3号木炭窯跡の操業については、須恵器生産と木炭生産が同時に行われていたとは燃料・原料の関係からは考えがたい。このため1号木炭窯跡は2号木炭窯跡とほぼ同時期で、3号木炭窯跡は2号須恵器窯跡の操業後と考えられる(第3小期-9世紀前葉)。

III期の遺構群 (図55-⑤・⑥) III期の遺構群は第1～3小期に分けられる。まず、第1小期(9世紀第1四半期～第2四半期)は第3土器群第1小群が出土した6号住居跡のみとなる。

第2小期(9世紀第3四半期)は、第3土器群第2小群が出土した1・2・5・9号住居跡、第1遺物包含層と1号掘立柱建物跡、10・11号土坑が含まれる。第1・2小期の特徴は、遺構としては住居跡の規模も縮小し、床面からは明確な柱穴が検出されない。

第3小期(9世紀第4四半期)は、1・3・6・7・12号土坑が含まれる。このなかで1・3・7・12号土坑は、2・5・6号住居跡を掘り込んでいることから、第2小期に後続する時期とした。1・3・7号土坑については、壁面の被熱や堆積土に炭化物を含むことから、坑内製炭施設や

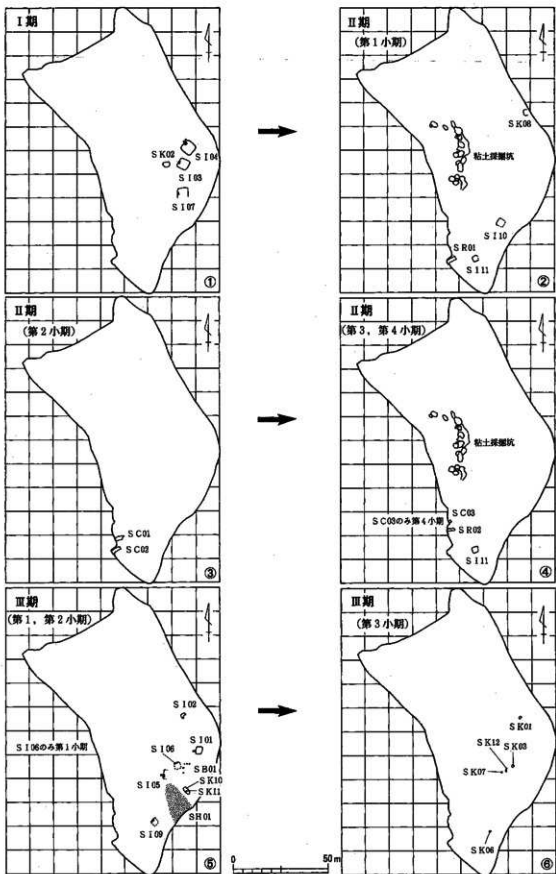


図55 遺構変遷図

火葬施設などの性格が考えられる。これらの土坑については、共通する特徴がみられることから、それぞれの時期は隔絶したものではないと考えられる。

第3節 遺跡の性格と問題点

本節では、第2・3節で検討した遺物・遺構を総合した見解を述べたい。さらに本遺跡で特記されるカマド祭祀と木簡についても項目を設けて記述をおこなう。

本遺跡調査区Ⅰ区は前節で述べたように、狭隘な丘陵地に立地しているため、Ⅰ期では少数の竪穴住居で集落が構成されている。Ⅱ期はⅠ期より1世紀以上隔たり、須恵器生産と鉄生産に付随する木炭生産の集落となる。Ⅱ期からⅢ期への移行は断絶することではなく、Ⅲ期には竪穴住居と掘立柱建物で構成される集落となる。最後は小規模の木炭生産もしくは火葬施設の場となる。

Ⅰ期の集落の性格は、小規模な農業共同体の成員によって成り立っている。この少ない成員により、耕作が可能な谷水田の存在が集落を存続させていたものと考えられる。このことは自然的影響に左右され易いことも意味しており、それが農業生産の安定を欠き、集落が短期間に廃絶へと向ったものと考えられる。さらに水田耕作に併行して畑作も同時に行われていたと想定されるが、この場合も丘陵地のために可耕地が限られ、それが制約となり小規模な農業共同体にとどまったのであろう。

Ⅱ期の集落の性格については、須恵器生産・鉄生産に付随する木炭生産への変換が短期間で頻繁になされていること、窯業生産の拡大化・長期化への傾向がわずかにとどまること、図36-4の甕の体部外面に布目痕がみられることから、瓦工人の関与も考慮されることが挙げられる。この生産形態の変換は、在地手工業生産の掌握者の要求に基づくものと考えられる。在地手工業生産掌握者を郡司と仮定すると、この要求は流通経路の拡大を目指すのではなく官衙での使用目的で生産されたものと推測する。8世紀中葉は、地方における須恵器生産の進展期と位置付けられる。その歴史的背景は、地方官衙の整備や国分寺・国分尼寺の造営などが相次ぎ、そこで用いられる饗膳容器の需要が高まったことによる。

Ⅲ期の集落の性格は、Ⅱ期の集落では須恵器・木炭生産の場であったものが再び生活の場となることである。さらに、遺構・遺物からは平安時代における一般集落との顕著な違いはみられない。だが、調査区Ⅲ区から出土した木簡の年代が、9世紀代も含まれる可能性もあることから、一般集落とは異なる性格も考慮しなければならない。第2次調査の結果を待って判断したい。

カマド祭祀について

ここでは、前節で述べることができなかった大猿田遺跡Ⅰ・Ⅲ期の集落におけるカマド祭祀について触れてみたい。

Ⅰ期の集落から手捏ね土器は、3号住居跡から1点(図56-4)、4号住居跡から4点(図56-1～3・6)、さらに3号住居跡の周辺から1点(図56-5)が出土している。図56-1～5に

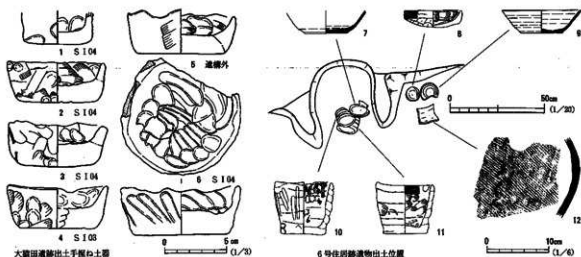


図56 カマド祭祀関連図

ついでには木葉痕は確認されないが(6は底部外面が欠損しており、判別できない)、図56-10・11では底部外面に木葉痕が認められる。

4号住居跡から出土した手捏ね土器は大きさの点で差がみられる。しかし、図56-2～5については出土地点が異なるものの形状が類似する。そのなかでも図56-2・3は、4号住居跡カマドが壁に取り付く両端の対称的な位置からそれぞれ1点ずつ出土した(図19参照)。これらの出土層位は $\delta 1$ であるが、出土地点から人為的によって配置されたものと推察される。

I期の集落では、各住居跡カマドから出土遺物がみられた。その出土状態は、4号住居跡カマドから、土師器甕が2点出土し、そのなかの1点の底部には土製支脚が突き刺さった状態で出土している。土製支脚は燃焼部底面の下に据えられていたことから、使用時の状態で遺存していたことが考えられる。カマド内堆積土からカマド廃絶状態を復元すると、煙道部煙出に斜面上方からの土砂が流れ込んだため、カマドが埋没した。その後天井部を壊して、カマドに掛けていた甕を残したものと考えられる。

Ⅲ期第1小期の6号住居跡からはカマド内とカマド東脇の壁際より、手捏ね土器と須恵器が出土した。カマド内からは須恵器杯が1点(図56-7)・手捏ね土器が2点(図56-10・11)出土した。手捏ね土器はいずれも横倒し状態で重なり、須恵器杯は手捏ね土器からやや東側から出土した。その出土状態は、上から2・3の順番で重なっていた。2が3の上から出土したものである。2は完形品、3は体部の一部が欠けているが(写真48)、この欠けた部分を意識的に打ち欠いたものかは判断がつかない。カマド東脇の壁際からは、須恵器杯・甕がそれぞれ1点(図56-9・12)、手捏ね土器(図56-8)が1点出土した。須恵器杯と手捏ね土器は壁際に並列して出土し、その南側に須恵器甕が内面を上にして出土した。カマド内堆積土から判断するとカマド廃棄後、直ちに天井部が壊され手捏ね土器が置かれたことが考えられる。しかし、出土層位からみると、手捏ね土器は堆積土の上層である。ここで推論を立ててみると、当初立てて置かれていた手捏ね土器が自然流入土の堆積過程で、横倒しになったとも考えられる。このように、4号住居跡ではカマド廃絶のち

にカマド周辺に手捏ね土器を置くこと、6号住居跡ではカマド廃絶ののちに、カマド内に手捏ね土器を置く特徴がみられた。

6号住居跡カマドから出土した手捏ね土器の類例として、双葉郡榑葉町赤粉遺跡37号住居跡出土手捏ね土器が挙げられる。出土地点は住居跡内堆積土でカマドではない。ここではカマド廃絶の後に、河原石が置かれている（宇佐見 雅夫氏から教示を受けた）。

福島県内における手捏ね土器の出土した例は、52遺跡が挙げられている（高松；1993）。

これらの時期は、4世紀から10世紀後半までの出土例がみられる。出土遺構は住居跡・土坑・溝跡・周溝・遺物包含層などで、同じ遺構から出土している祭祀に関わる遺物は、丸玉・白玉・有孔円板・剣形品・土鈴・木製形代などである。出土地点では、カマド内及びその周辺・ピット内及びその周辺・住居跡の壁間などである。出土層位は床面はわずかであり、大半が堆積土中である。

上記から、本遺跡4・6号住居跡のようにカマド内及びその周辺から手捏ね土器が出土した例は、大沼郡会津高田町十五壇遺跡2・5号住居跡（小柴ほか；1990）、須賀川市沼平遺跡5・8号住居跡（大越ほか；1981・高橋；1993）、西白河郡矢吹町笹目平遺跡8号住居跡（鈴鹿ほか；1992）、田村郡船引町仲ノ縄D遺跡1号住居跡（逸見；1993）などのように、住居跡のカマド及びカマド周辺から、手捏ね土器が出土している例はわずかである。手捏ね土器の出土地点・出土層位などは様々であり、そこからは規則性は見出だせない。さらに、祭祀に関わる遺物として手捏ね土器と土製丸玉などの組み合わせが多い傾向がみられる。

カマドからの遺物出土状態について先学の論考によると、カマドへの廃棄行為を住居廃棄における祭祀的行為の延長上としてとらえる論考（寺沢；1992）や、カマド周辺からの祭祀遺物の出土例を民俗例と比較してカマド祭祀ととらえる論考（久松；1992）などがある。さらに、手捏ね土器については、「非実用品」として日常から切りはなされた行為すべてに用いられていた祭祀具で、カマド祭祀に手捏ね土器をとまう例は関東なども含め地域を限らず普遍的にみられる（寺沢；1986）。このことから、4・6号住居跡には、何らかの祭祀行為が成されたことがうかがわれる。その用途としては神饌を盛っていた容器や燈明皿などが上げられている（楢山；1991）。この対象としては「龍神」と底部外面に墨書された土師器杯が千葉県山武郡芝山町小原子遺跡群庄作遺跡58号住居跡から出土している（松田ほか；1993）。杯は内外面に赤彩が施され、年代は8世紀後半とされている。このことから、東国の集落におけるカマド祭祀の対象が龍神であることの確実性が増したことを示している。カマド祭祀の意味は、中国での慣習から龍神が年に二度、天帝に家族のその間の功罪を報告するために上天するのを防ぐためとされている（水野；1985）。カマドの起源が大陸文化の伝播によるものか、炉からの発展形態なのかは確定的ではないが、後者の見解には検討すべき余地を残す問題がある（笹森；1990）。このことからカマドの起源を大陸に求めると、カマドと共にカマド祭祀の習慣も伝播したことも考慮するべきであろう。

このように住居廃棄の重要な要素として、カマド廃棄があるのは明らかである。この行為と遺物を配置する例、さらに、その遺物が日常雑器か祭祀遺物かその出土状態から踏まえたうえで、カ

マド祭祀と判断すべきものと思われる。手捏ね土器は、日常雑器のように普遍的に存在するものではなく、特定の目的のために製作・使用されるものと考えられる。そこで本遺跡では、この特定の目的をカマド祭祀として考えて、手捏ね土器が出土した4・6号住居跡についてカマド祭祀が行われたものとする。

調査区Ⅲ区出土の木簡について

調査区Ⅲ区から出土した木簡に触れたい。以下の記述は、平川 南氏からの教示により記述したもので、木簡についての詳細な報告は平成9年度に正式に行う予定である。

大猿田遺跡出土1号木簡

・「判□十六_フ×」

・「_フ」 104×11×3 (mm)

木簡は刃物で半截されて廃棄されている。この釈文を復元すると「判□〔郷〕十六〔人〕^{〔正丁十五人〕}少丁^{〔人〕}」となる。「判□」はいわき市小茶円遺跡出土木簡記載の「判□郷」と関連するものである。「判□郷」は10世紀前半に成立した『和名類聚抄』には記載されていない郷名である。少丁は大宝令で17歳以上から20歳以下の男子の称で、調は正丁の4分の1負担である。割り書きの欠損部分には少丁は正丁に付帯するものであるから、正丁十五〔人〕が記載されていたことが復元できる。このことから、「十六」は正丁と少丁を合わせた人数とされる。裏面の「_フ」は合点である。

内容は何らかの税負担に関する文書木簡と考えられる。木簡の年代は記載された事項から特定してみると、少丁は天平宝字元年(757)施行の養老令では中男と名称が変更される。しかし文献では大宝2年(702)美濃・筑前・豊前・豊後国戸籍(注1)で初見し、延喜2年(902)阿波国戸籍(注2)においても見受けられる。さらに、小茶円遺跡出土木簡には大同元年(806)の記載もみられる。このために8世紀前半～10世紀初頭の年代幅を考慮しておかなければならない。

大猿田遺跡から木簡が出土した意義は、一般集落とは異なる性格を有する遺跡と推測されることである。いわき市内で木簡が出土した小茶円遺跡・荒田目条里制遺構などは官衙関連施設とされているが、本遺跡がどのような性格を帯びたものであるかは、今後の第2次調査の成果と合わせて再検討してゆきたい。

以上、わずかながら若干の検討を行った。今後は、第2次調査の成果と総合して大猿田遺跡の最終的な考察としたい。

(吉野)

本報告書作成に当たっては、下記の方々にご協力をいただいた。(敬称略)

三辻利一・バリノサーヴェイ株式会社・斎藤恵美子・鈴木絹子・半沢真理・三浦千恵・渡邊由香
・五十嵐千加子・小川ひろみ

(注1) 東京帝国大学史料編纂掛編『大日本古文書』卷之一 東京帝国大学

(注2) 竹内 理三編『平安遺文』古文書編 第1巻188 東京堂

〈引用・参考文献〉

- 浅香 年木 1971 『日本古代手工業史の研究』法政大学出版局
- 宮本 教 1971 「戸籍・計帳」『日本の古代』第9巻研究資料 角川書店
- 中山 吉秀 1976 「離れ国分考」『古代』第61号 早稲田大学考古学会
- 井上 光貞ほか 1976 『律令』日本思想大系3 岩波書店
- 熊谷 常正ほか 1977 「いわき市金山跡跡群出土遺物について」『福島考古』第18号 福島県考古学会
- 目黒 吉明ほか 1978 『母畑地区発掘調査報告書II』朝福島県文化センター・福島県教育委員会
- 氏家 和典ほか 1978 『伊治城跡I』宮城県多賀城跡調査研究所・宮城県教育委員会
- 高橋 一夫 1979 「計画村落について」『古代を考える』20号 古代を考える会
- 大越 道正ほか 1981 『母畑地区発掘調査報告書III』朝福島県文化センター・福島県教育委員会
- 鈴木 重美ほか 1981 『朝日長者遺跡・夕日長者遺跡』朝いわき市文化事業団・いわき市教育委員会
- 櫻村 友延ほか 1982 『内宿遺跡』朝いわき市文化事業団・いわき市教育委員会
- 川井 正一ほか 1983 『鹿の子C遺跡』『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書5』朝茨城県教育財団
- 田辺 昭三 1984 『古代産業の成立』『講座・日本技術の社会史』第4巻産業 日本評論社
- 真鍋 健一ほか 1984 『福島県地域のガイド』コロナ社
- 水野 正好 1985 『招福・除災—その考古学—』『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館
- 寺沢 知子 1986 「祭祀の変化と民衆」『季刊 考古学』第16号 雄山閣
- 土井 義夫ほか 1987 『平安時代の住居形態』『物質文化』No.49 物質文化研究会
- 木本 元治ほか 1989 『国道113号バイパス遺跡調査報告V』朝福島県文化センター・福島県教育委員会
- 宇野 隆夫 1989 『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』真福社
- 吉田 生哉ほか 1989 『久世原館』朝いわき市文化事業団・いわき市教育委員会
- 廣岡 敏 1989 「福島県いわき地方の土師器」『福島県に於ける古代土器の諸問題』鹿島町教育委員会
- 鬼頭 清明 1990 『木簡』考古学ライブラリー57 ニューサイエンス社
- 小柴 吉男ほか 1990 『十五墳遺跡発掘調査報告書』会津高田町教育委員会
- 笹森 健一 1990 『聖穴住居跡の使い方』『古墳時代の研究』2 雄山閣
- 村田 政基ほか 1990 『小原子遺跡群』小原子遺跡群調査会・芝山町教育委員会
- 真狩 忠雄ほか 1991 『戸田条里遺跡』朝いわき市文化事業団・いわき市教育委員会
- 石田 悟ほか 1992 『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991 多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所
- 浅井 哲哉 1992 『茨城県における奈良・平安時代の土器(Ⅱ)』『研究ノート』2号 朝茨城県教育財団
- 鈴鹿 良一ほか 1992 『矢吹地区発掘調査報告10』朝福島県文化センター・福島県教育委員会
- 寺沢 知子 1992 「カマドへの祭祀的行為とカマド神の成立」『考古学与生活文化』同志社大学
- 久松哉瑣子 1992 「カマドをめぐる祭祀」『考古学与生活文化』同志社大学
- 馬目 順一ほか 1992 『新しいいわきの歴史』いわき地域学会出版部
- 白鳥 良一 1992 『陸奥国における城柵・官衙の土器』『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東—』
古代の土器研究会
- 高橋 信一 1993 『沼平遺跡』『第19回古代城柵官衙遺跡検討会資料』古代城柵官衙遺跡検討会
- 櫻村 友延 1993 『荒田目桑里制遺構・砂畑遺跡』『第19回古代城柵官衙遺跡検討会資料』古代城柵官衙遺跡検討会
- 高松 教雄 1993 『福島県における祭祀遺跡』『古墳時代の祭祀』第1分冊 東日本埋蔵文化財研究会
- 逸見 克巳ほか 1993 『田村西部工業団地関連遺跡調査報告書II』船引町教育委員会
- 乾藤 敬幸 1993 『須江窯跡群官山遺跡』江南町教育委員会
- 平川 南 1993 『地方の木簡』『古代東国と木簡』雄山閣
- 吉田 生哉 1993 『福島・小茶円遺跡』『木簡研究』第15号 木簡学会
- 石田 明夫ほか 1994 『会津大戸窓』会津若松市教育委員会
- 村田 晃一 1994 「土器からみた官衙の終末」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』東日本埋蔵文化財研究所
- 沖田 茂司 1994 「東北地方におけるロクロ土師器の受容とその背景」『考古学雑誌』第79巻第3号 日本考古学会
- 渡辺 一 1994 『須恵器作りのムラ』『古代東国の民衆と社会』古代王権と交流2 名著出版
- 藤原 学 1995 『須恵器窯と燃料薪』『関西大学考古学研究室開設40周年記念 考古学論叢』関西大学
- 桜はか 1995 『原町火力発電所関連遺跡調査報告VI』朝福島県文化センター・福島県教育委員会
- 石本 弘 1995 『福島県における律令制成立以前の土器様相とその背景』『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 鈴木 敬治ほか 1995 『土地分類基本調査—平—』福島県農林水産部農地計画課
- 飯村 均ほか 1995 『常磐自動車道遺跡調査報告4』朝福島県文化センター・福島県教育委員会
- 中山 雅弘 1996 『古代常磐地域における土器様相』『物質文化』No.60 物質文化研究会



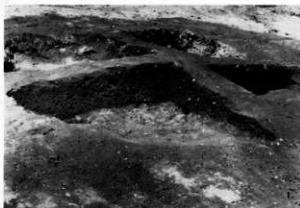
1 調査区全景(南東から)



2 調査区近景(東から)



3 1号住居跡全景(東から)



4 1号住居跡

1 断面(南西から)

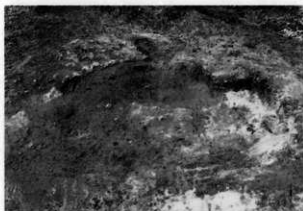
2 焼土竈断面(東から)

3 カマド全景(南東から)

4 カマド断面(南東から)



5 2号住居跡全景(東から)



6 2号住居跡

1 検出(東から)
3 ピット1全景(東から)

2 断面(南から)
4 カマド全景(東から)



7 3号住居跡全景(東から)



8 3号住居跡

1 断面(南から)

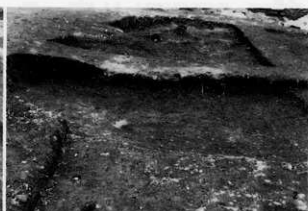
3 カマド断面(東から)

2 遺物出土状態(北東から)

4 カマド全景(東から)



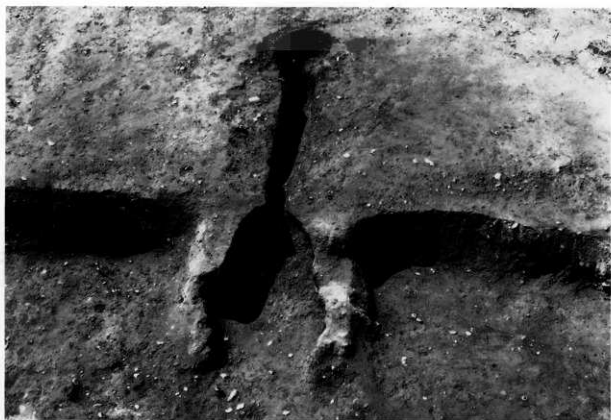
9 4・8号住居跡全景(東から)



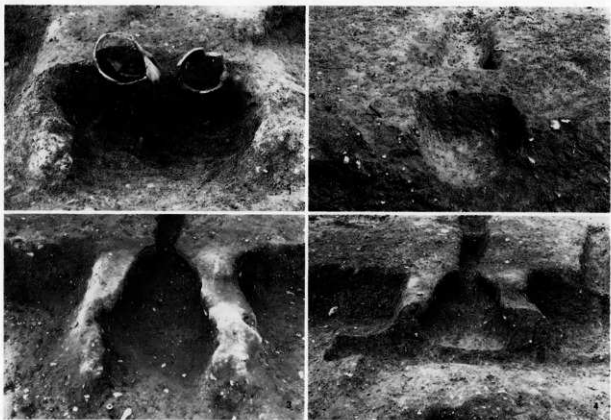
10 4・8号住居跡(1)

1 断面(南から)
3 遺物出土状態(北西から)

2 断面(南から)
4 遺物出土状態(東から)

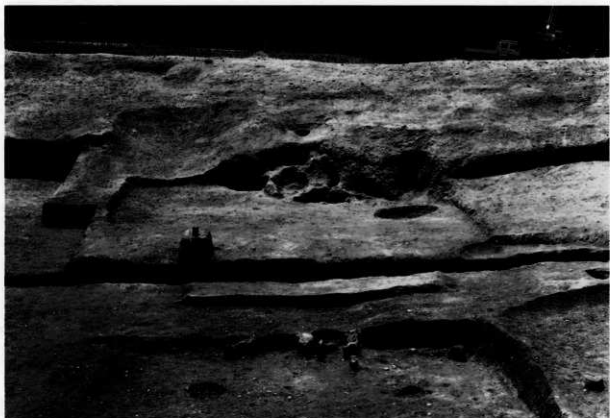


11 4号住居跡カマド全景(東から)



12 4・8号住居跡(2)

- 1 4号住居跡カマド断面(東から)
- 2 8号住居跡カマド煙道断面(東から)
- 3 4号住居跡カマド近景(東から)
- 4 4号住居跡カマド断ち割り断面(東から)



13 5号住居跡全景(東から)

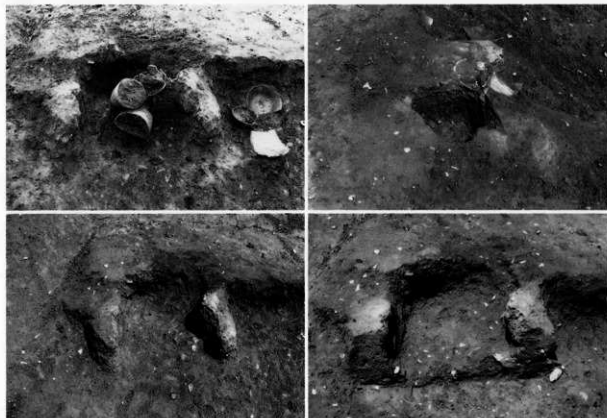


14 5号住居跡

- 1 断面(南から) 2 カマド断面(東から)
 3 カマド全景(東から) 4 カマド断ち割り断面(東から)



15 6号住居跡全景(南から)



16 6号住居跡

1 カマド遺物出土状態(南から) 2 カマド断面(北西から)
3 カマド全景(南から) 4 カマド断ち割り断面(南から)



17 7号住居跡全景(東から)



18 7号住居跡

1 断面(北東から) 2 断面(南西から)
3 カマド断面(東から) 4 カマド全景(東から)



19 9号住居跡全景(南東から)



20 9号住居跡

1 断面(南東から)

3 カマド断面(東から)

2 遺物出土状態(南から)

4 カマド断ち割り断面(東から)



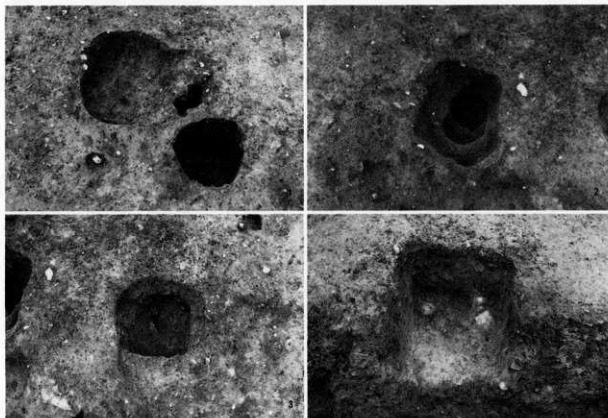
21 10号住居跡全景(東から)



22 11号住居跡全景(南から)



23 1号掘立柱建物跡全景(南から)



24 1号掘立柱建物跡

1 ビット1全景(南から)
3 ビット3断面(東から)

2 ビット2全景(南から)
4 ビット3全景(南から)



25 1号須恵器窯跡全景(西から)



26 1号須恵器窯跡断ち割り全景(西から)



27 1号須恵器窯跡遺物出土状態(東から)



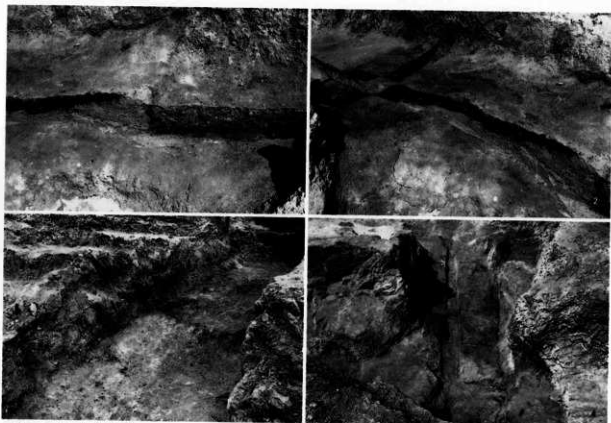
28 1号須恵器窯跡断ち割り断面(西から)



29 2号須恵器窯跡・3号木炭窯跡全景(南西から)



30 1号木炭窯跡全景(東から)



31 1号木炭窯跡

1 断面(南から)

2 断面(南東から)

3 側壁(南西から)

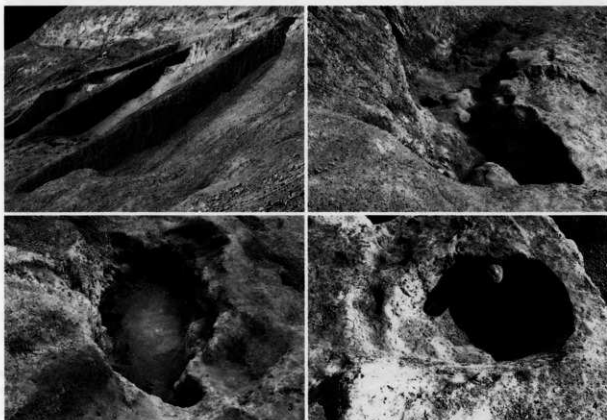
4 断ち割り(北から)



32 2号木炭窯跡全景(南東から)



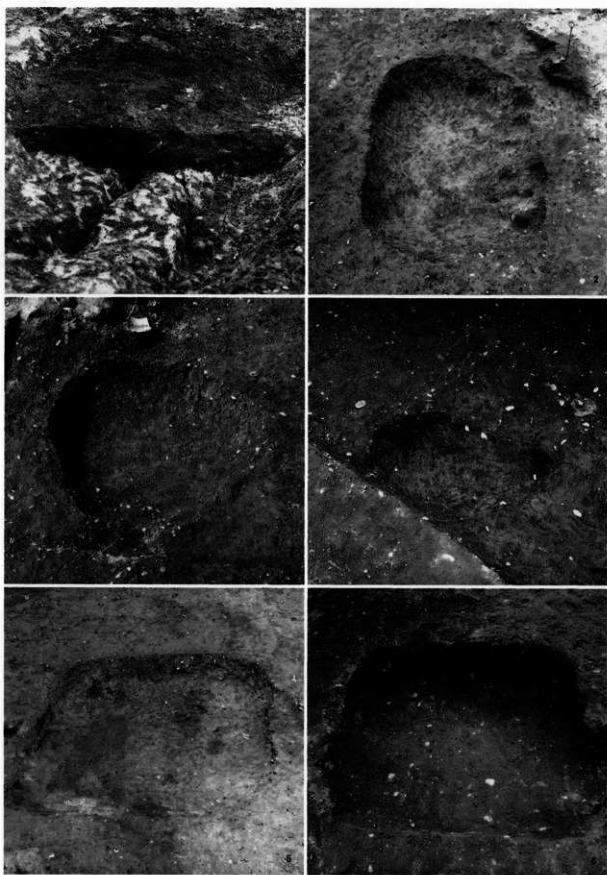
33 1～16号粘土採掘坑全景(北から)



34 1～16号粘土採掘坑

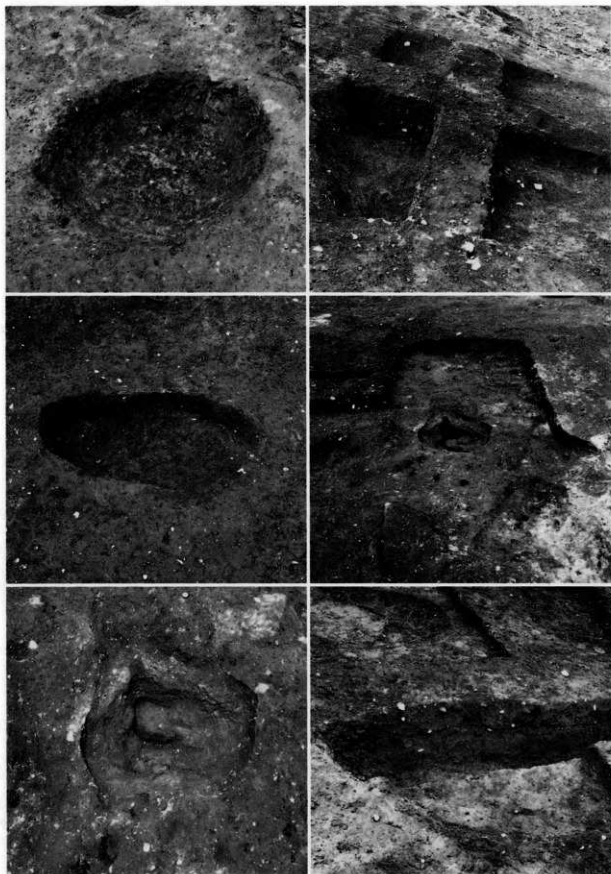
1 基本土層断面(南から)
3 6号粘土採掘坑(北から)

2 1号粘土採掘坑(北から)
4 10号粘土採掘坑(北から)



35 1～6号土坑

- | | |
|---------------|----------------|
| 1 1号土坑全景(南から) | 2 2号土坑全景(東から) |
| 3 3号土坑全景(南から) | 4 4号土坑全景(東から) |
| 5 5号土坑全景(東から) | 6 6号土坑全景(南東から) |

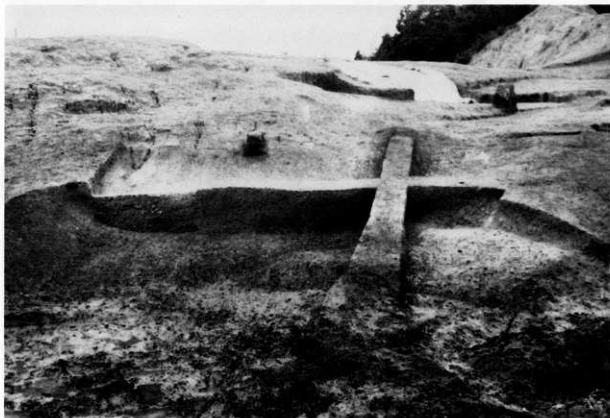


36 7~12号土坑

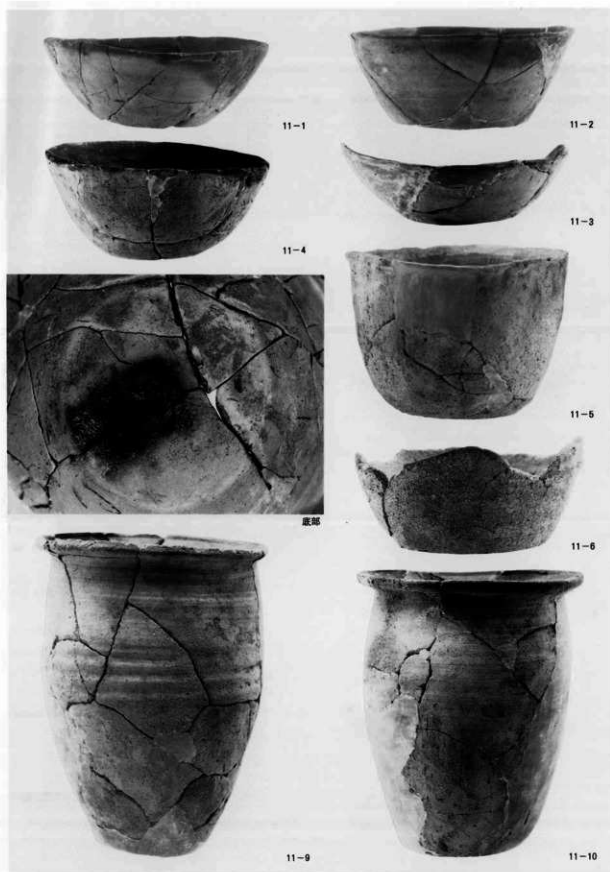
- | | |
|----------------|----------------|
| 1 7号土坑全景(南から) | 2 8号土坑断面(南から) |
| 3 9号土坑全景(南から) | 4 10号土坑全景(南から) |
| 5 11号土坑全景(南から) | 6 12号土坑断面(西から) |



37 1号遺物包含層断面(南東から)



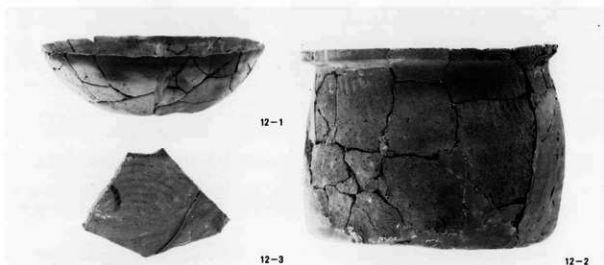
38 1号遺物包含層断面(南西から)



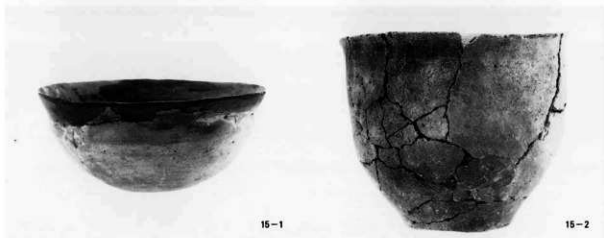
39 1号住居跡出土土師器



40 1号住居跡出土須恵器



41 2号住居跡出土土師器・須恵器



42 3号住居跡出土土師器



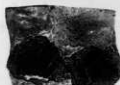
15-3



15-4



15-5



15-6



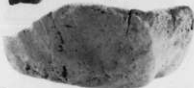
15-7



15-9



15-8



15-10



15-11



15-13



15-12

43 3号住居跡出土土師器・須恵器・土製品・弥生土器

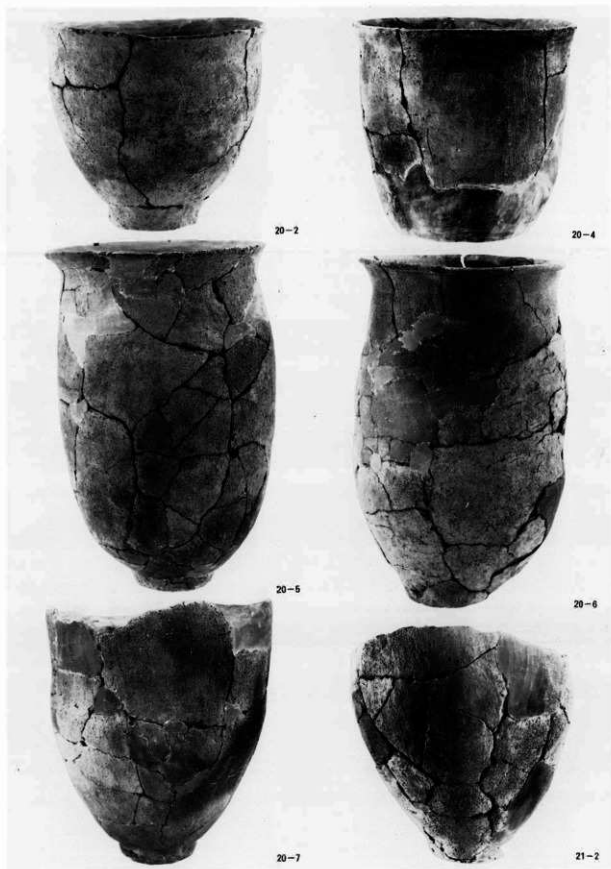


20-1

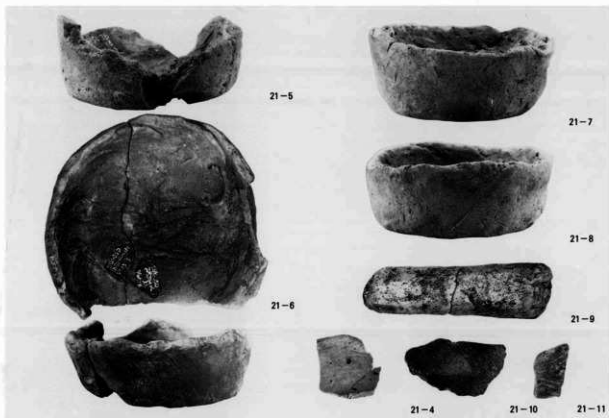


20-3

44 4号住居跡出土土師器



45 4号住居跡出土土師器



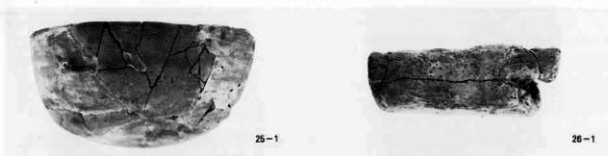
46 4号住居跡出土土師器・須恵器・土製品・縄文土器



47 6号住居跡出土須恵器・土製品



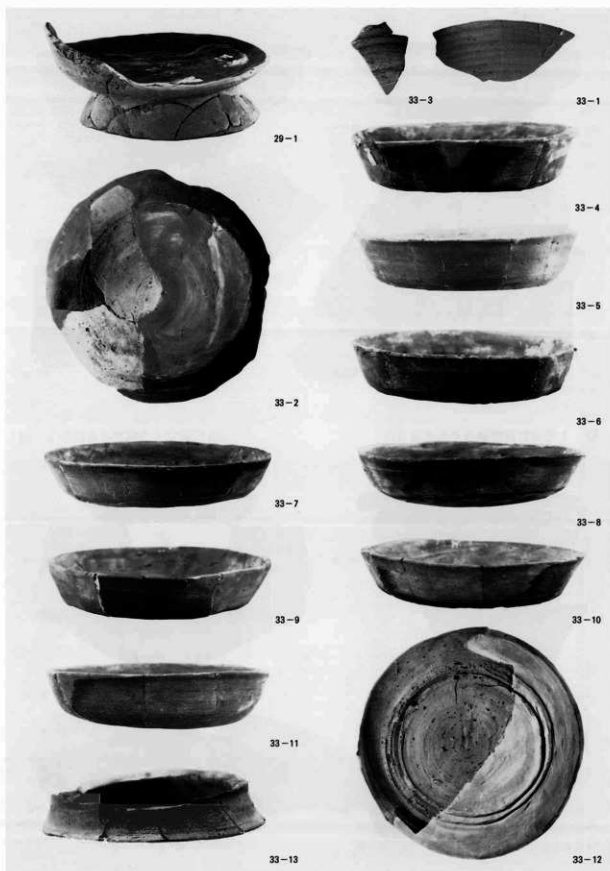
48 6号住居跡出土土製品



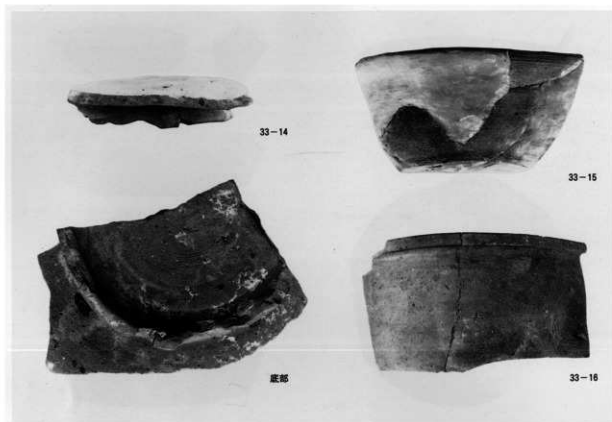
49 7号住居跡出土土師器・土製品



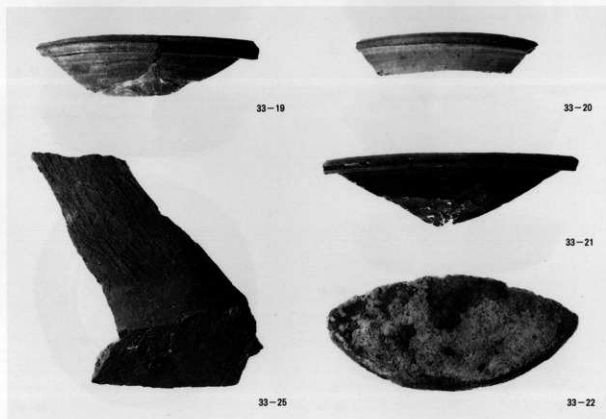
50 9号住居跡出土土師器



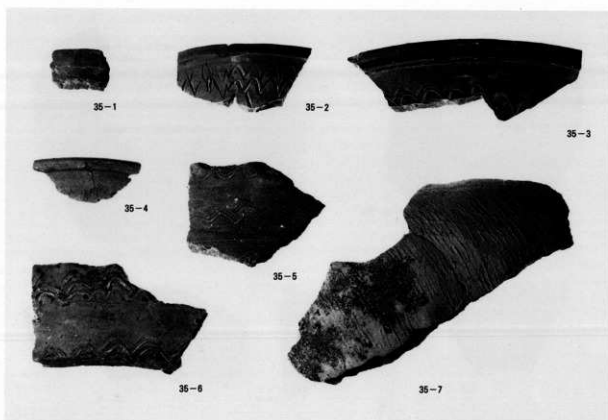
51 10号住居跡、1号須惠器窯跡出土土師器・須惠器



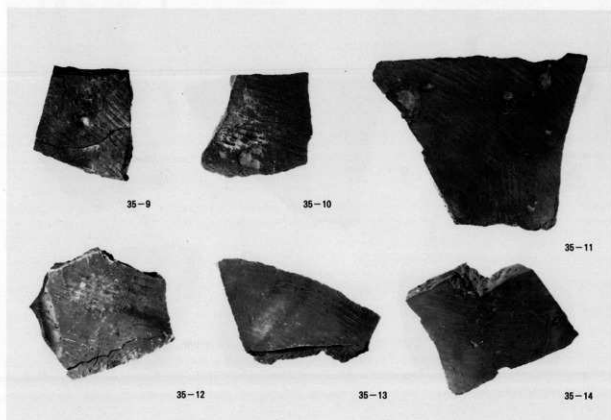
52 1号须惠器窯跡出土須惠器(1)



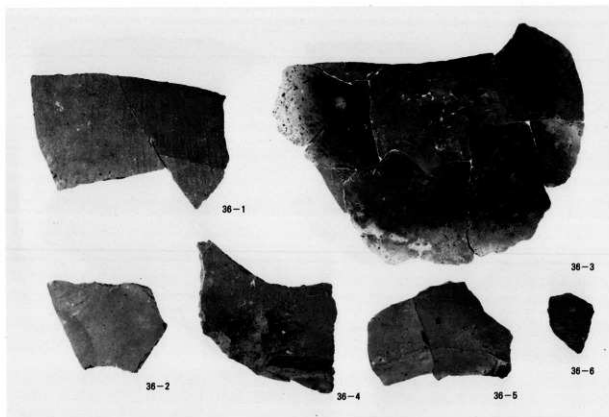
53 1号须惠器窯跡出土須惠器(2)



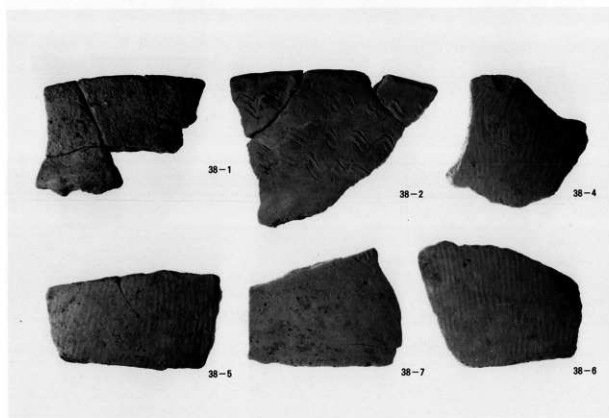
54 1号须惠器窯跡出土須惠器(3)



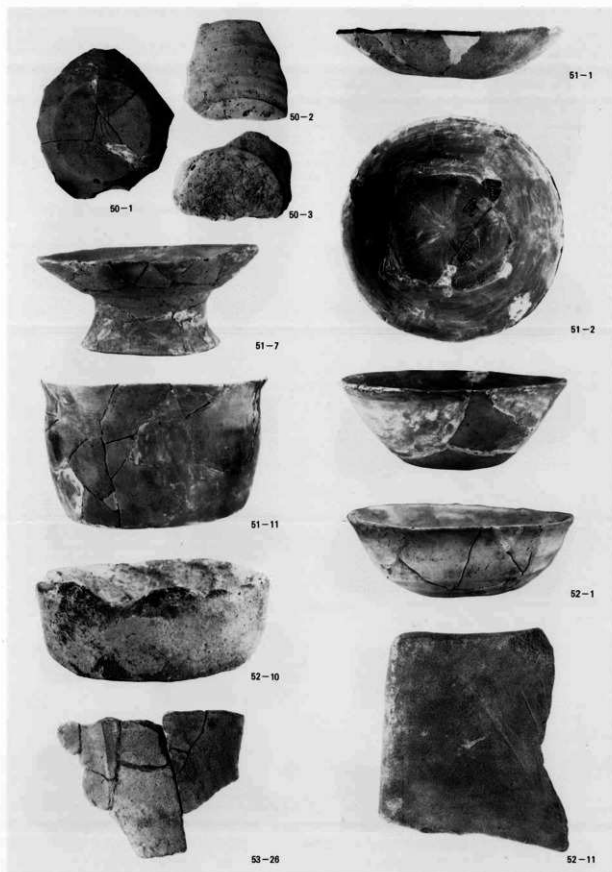
55 1号须惠器窯跡出土須惠器(4)



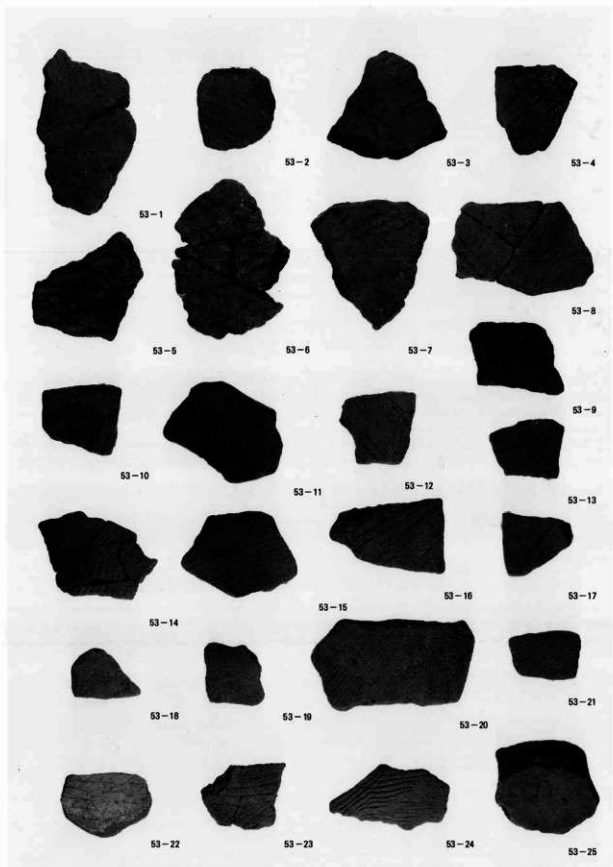
56 1号須惠器窯跡出土須惠器(5)



57 2号須惠器窯跡出土須惠器



58 1号遺物包含層，遺構外出土土師器・須恵器・縄文土器・土製品・石製品



59 道構外出土縄文土器・弥生土器

付章1 いわき市大猿田遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

1 はじめに

福島県内の窯跡出土須恵器の分析データは大部分整理されてきた。これまでのデータによると、会津若松の大戸窯群の須恵器にはK, Rbが比較的多く、Ca, Srが比較的少ないのに対し、県東北部の相馬郡内の窯跡出土須恵器はこれとは対照的な化学特性をもつことがわかっている。さらに、いわき市周辺のもはK, Rbが少ないこともわかっている。

今回はいわき市の奈良・平安時代の須恵器窯と推定される大猿田1・2号窯から出土した須恵器の蛍光X線分析の結果について報告する。

2 分析結果

岩石標準試料JG-1の各元素の蛍光X線強度を使って標準化した分析値は表1にまとめられている。

表1の生データを使って作成したRb-Sr分布図を図2に、また、K-Ca分布図を図3に示してある。両図ではともに、大猿田1号窯の試料をほとんど包含するようにして、定性的な大猿田領域を描いてある。また、比較のために、大戸領域も描いてある。これまでのデータからは、いわき市周辺の窯跡出土須恵器や瓦には例外なく、K, Rb量が少なかったため、大猿田窯の須恵器胎土にも、K, Rb量が少ないことが予想された。ところが、この予想に反して、図2, 3に示すように、大猿田窯の須恵器にはK, Rb量が多かったのである。それも、大戸窯の須恵器胎土に含まれるK, Rb量よりも多かったのである。このようなことは全国どの地域でもみられたことはなく、驚きであった。この原因を理解するためには、素材の粘土や大猿田窯の後背地の岩石を分析してみなければならないだろう。さらに、もう一つ驚くべきことは、2号窯の須恵器片が2点しかないとはいえ、2号窯の須恵器の化学特性はかなりはっきりと、1号窯の須恵器の化学特性とは異なる点である。このことは図7に示したFe因子でも認められる。1号窯の須恵器胎土と2号窯の須恵器胎土は類似していないのである。これも珍しいことである。この原因も今後、解明する必要があるだろう。

次に、住居跡から出土した須恵器胎土をみてみよう。Rb-Sr分布図を図4に、また、K-Ca分布図を図5に示す。両図で大猿田領域に対応するのはNa50だけである。しかし、Na50はNa47, 48とともに大戸領域にも対応しているので、大戸窯の製品である可能性もある訳である。そこで、他の因子についてもみてみることにした。図6にはNa因子を比較してある。Na47, 48, 50の3点はまとまっているが、大猿田領域の端にしか分布しない。むしろ、Na44がNa因子でも大猿田

領域に近い。図7にはFe因子を比較してある。Na44はFe因子でも大猿田領域に近い。結局、Na44は全因子で大猿田領域に近く、大猿田1号窯産の製品である可能性をもつ。Na50も同様にして、大猿田1号窯の製品である可能性をもつ。また、Na47、48の2点も全因子で類似しており、同一産地の製品であることはほぼ間違いない。ただ、どこの製品かという点、Fe量が少し多い点に気になるが、大戸窯群産の可能性もある。Na45、46の2点も同一産地の須恵器であるが、その産地は不明である。Na42は大猿田2号窯の2点の須恵器の化学特性に近いが、何しろ2点しかないので、定かなことは不明である。ここで、他の須恵器と化学特性が異なるのはNa49である。Rb-Sr分布図でも、K-Ca分布図でも、大猿田領域にも、大戸領域にも対応しない。Ca量、Sr量が少ないのが特徴である。さらに、図6をみると、Na量も他の須恵器に比べて少ないことがわかる。K、Rb量が比較的多く、Ca、Sr、Na量が少ないのは名古屋を中心とした東海地域の須恵器の特性である。Na49は東海地域からの搬入品である可能性をもつ。

結局、今回の分析データでは大猿田1号窯と2号窯の須恵器の化学特性は類似しておらず、素材粘土は異なること、そして、比較的試料数の多かった大猿田1号窯の須恵器の化学特性が理解し難いくらい異常であったと、しかも、その大猿田1号窯の製品である可能性をもつものは、住居跡の須恵器の中にはNa44、50の2点に過ぎないことなど、予想に反したデータが多かった。そして、分析データからほぼ確実といえることは、Na45とNa46、Na47とNa48はそれぞれ、同じ胎土であり、同一産地の製品であることである。ただし、両グループの産地はこれだけのデータからは推定困難である。

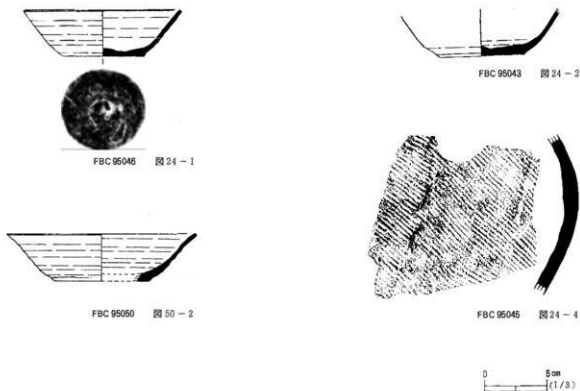


図1 分析試料実測図

表 1 大猿田遺跡出土須恵器分析値

試料番号	出土位置	種別	器形	時期	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	押印番号
FBC 95001	1号須恵器窯跡 # 5	須恵器	杯	奈良・平安	0.813	0.081	1.64	0.822	0.337	0.192	
FBC 95002	1号須恵器窯跡 # 13	須恵器	杯	奈良・平安	0.689	0.128	1.56	0.802	0.352	0.098	
FBC 95003	1号須恵器窯跡 # 15	須恵器	杯	奈良・平安	0.777	0.158	1.93	0.821	0.309	0.088	
FBC 95004	1号須恵器窯跡 # 11	須恵器	長頸壺	奈良・平安	0.838	0.127	1.23	1.06	0.336	0.102	
FBC 95005	1号須恵器窯跡 # 11	須恵器	長頸壺	奈良・平安	0.733	0.118	1.56	0.797	0.381	0.208	
FBC 95006	1号須恵器窯跡 # 2	須恵器	甕	奈良・平安	0.805	0.134	1.20	1.04	0.357	0.095	
FBC 95007	1号須恵器窯跡 # 10	須恵器	甕	奈良・平安	0.809	0.180	1.26	1.07	0.369	0.092	
FBC 95008	1号須恵器窯跡 # 14	須恵器	甕	奈良・平安	0.673	0.134	1.80	0.753	0.366	0.127	
FBC 95009	1号須恵器窯跡 # 2	須恵器	甕	奈良・平安	0.844	0.149	1.17	1.04	0.368	0.090	
FBC 95010	1号須恵器窯跡 # 11	須恵器	甕	奈良・平安	0.755	0.143	1.37	0.849	0.338	0.127	
FBC 95011	1号須恵器窯跡 # 11	須恵器	甕	奈良・平安	0.788	0.149	1.21	1.03	0.399	0.092	
FBC 95012	1号須恵器窯跡 # 11	須恵器	甕	奈良・平安	0.768	0.162	1.26	1.06	0.358	0.094	
FBC 95013	1号須恵器窯跡 # 11	須恵器	甕	奈良・平安	0.723	0.183	1.89	0.801	0.318	0.173	
FBC 95014	1号須恵器窯跡 # 14	須恵器	甕	奈良・平安	0.811	0.217	1.63	0.878	0.377	0.164	
FBC 95015	1号須恵器窯跡 # 2	須恵器	甕	奈良・平安	0.781	0.167	1.78	0.850	0.304	0.159	
FBC 95016	1号須恵器窯跡 # 2	須恵器	甕	奈良・平安	0.811	0.164	1.20	1.06	0.362	0.097	
FBC 95017	1号須恵器窯跡 # 2	須恵器	甕	奈良・平安	0.711	0.215	1.75	0.791	0.377	0.132	
FBC 95018	1号須恵器窯跡 # 3	須恵器	甕	奈良・平安	0.782	0.179	1.61	0.920	0.369	0.184	
FBC 95019	1号須恵器窯跡 # 5	須恵器	甕	奈良・平安	0.864	0.118	1.27	1.06	0.316	0.087	
FBC 95020	1号須恵器窯跡 # 5	須恵器	甕	奈良・平安	0.850	0.282	1.83	0.815	0.374	0.250	
FBC 95021	1号須恵器窯跡 # 11	須恵器	甕	奈良・平安	0.595	0.166	1.14	0.747	1.47	0.251	
FBC 95022	1号須恵器窯跡 # 11	須恵器	甕	奈良・平安	0.797	0.136	1.22	1.02	0.369	0.084	
FBC 95023	1号須恵器窯跡 # 7	須恵器	甕	奈良・平安	0.808	0.224	1.63	0.887	0.360	0.169	
FBC 95024	1号須恵器窯跡 # 11	須恵器	甕	奈良・平安	0.794	0.135	1.22	1.02	0.363	0.082	
FBC 95025	1号須恵器窯跡 # 11	須恵器	甕	奈良・平安	0.771	0.161	1.29	1.04	0.355	0.106	
FBC 95026	1号須恵器窯跡 # 11	須恵器	甕	奈良・平安	0.734	0.182	1.91	0.802	0.318	0.185	
FBC 95027	1号須恵器窯跡 # 14	須恵器	甕	奈良・平安	0.618	0.192	2.58	0.612	0.651	0.127	
FBC 95028	1号須恵器窯跡 # 14	須恵器	甕	奈良・平安	0.907	0.179	1.61	0.974	0.312	0.138	
FBC 95029	1号須恵器窯跡 # 14	須恵器	甕	奈良・平安	0.394	0.733	3.33	0.216	0.718	0.402	
FBC 95030	1号須恵器窯跡 # 2	須恵器	甕	奈良・平安	0.760	0.174	1.90	0.829	0.305	0.167	
FBC 95031	1号須恵器窯跡 # 10	須恵器	甕	奈良・平安	0.826	0.115	1.30	1.08	0.333	0.093	
FBC 95032	1号須恵器窯跡 # 14	須恵器	甕	奈良・平安	0.835	0.238	1.59	0.875	0.367	0.162	
FBC 95033	1号須恵器窯跡 # 14	須恵器	甕	奈良・平安	0.675	0.129	1.76	0.763	0.371	0.115	
FBC 95034	1号須恵器窯跡 # 15	須恵器	甕	奈良・平安	0.670	0.109	1.50	0.692	0.306	0.085	
FBC 95035	1号須恵器窯跡 検出面	須恵器	甕	奈良・平安	0.853	0.120	1.20	0.978	0.319	0.081	
FBC 95036	1号須恵器窯跡 # 5	須恵器	杯	奈良・平安	0.749	0.104	1.33	1.09	0.381	0.079	
FBC 95037	1号須恵器窯跡	須恵器	杯	奈良・平安	0.816	0.209	1.19	1.09	0.381	0.103	
FBC 95038	1号須恵器窯跡 # 1	須恵器	長頸壺	奈良・平安	0.830	0.164	1.21	1.05	0.352	0.091	
FBC 95039	1号須恵器窯跡 # 10	須恵器	長頸壺	奈良・平安	0.764	0.155	1.32	0.972	0.351	0.124	
FBC 95040	2号須恵器窯跡 契口	須恵器	甕	奈良・平安	0.615	0.105	2.57	0.544	0.220	0.130	
FBC 95041	2号須恵器窯跡 契口	須恵器	甕	奈良・平安	0.596	0.074	2.57	0.546	0.201	0.120	
FBC 95042	5号住居跡 南側 # 1	須恵器	杯	奈良・平安	0.683	0.106	2.86	0.549	0.292	0.154	
FBC 95043	6号住居跡 カマF # 1	須恵器	杯	奈良・平安	0.608	0.160	1.68	0.538	0.557	0.163	224-2
FBC 95044	6号住居跡 カマF # 3	須恵器	甕	奈良・平安	0.824	0.120	1.19	1.12	0.333	0.076	
FBC 95045	6号住居跡 # 1	須恵器	甕	奈良・平安	0.687	0.282	1.52	0.750	0.648	0.301	224-4
FBC 95046	6号住居跡 # 1	須恵器	杯	奈良・平安	0.656	0.251	1.50	0.721	0.594	0.331	224-1
FBC 95047	9号住居跡 検出面	須恵器	短頸壺	奈良・平安	0.564	0.256	1.76	0.646	0.356	0.234	
FBC 95048	1号遺物包含層 # 2	須恵器	杯	奈良・平安	0.633	0.124	2.26	0.605	0.416	0.194	
FBC 95049	1号遺物包含層 # 1	須恵器	杯	奈良・平安	0.624	0.020	2.29	0.756	0.192	0.034	
FBC 95050	1号遺物包含層 # 1	須恵器	杯	奈良・平安	0.695	0.104	1.58	0.710	0.370	0.179	250-2

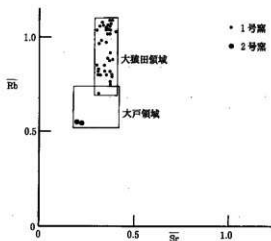


図2 竈跡出土須恵器のRb-Sr分布図

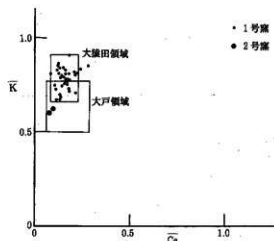


図3 竈跡出土須恵器のK-Ca分布図

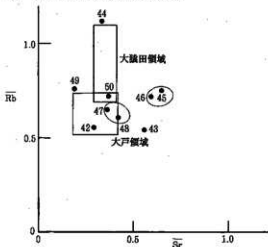


図4 住居跡出土須恵器のRb-Sr分布図

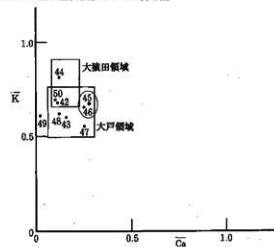


図5 住居跡出土須恵器のK-Ca分布図

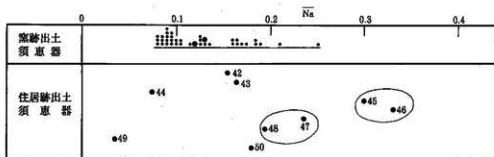


図6 Na因子の比較

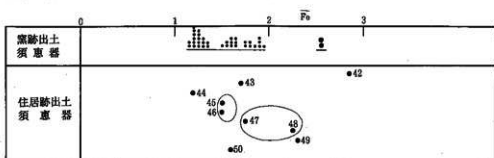


図7 Fe因子の比較

付章2 いわき市大猿田遺跡出土須恵器の鉤物胎土分析

バリノ・サーヴェイ 株式会社

1 はじめに

奈良時代に形成された須恵器窯跡から杯や大甕が出土した。また、同時代の粘土採掘坑からは粘土塊が検出され、須恵器の母材として利用された可能性があると考えられる。このことから、須恵器窯跡内から出土した須恵器の胎土と粘土塊の鉤物組成を明らかにして、須恵器胎土と粘土塊の鉤物組成を比較検討する。

表1 薄片作製鑑定およびX線回折分析試料

試料番号	遺構名	出土位置	種別	器形・部位	時代・時期	分析項目	
						薄片	X線
FBC95001	1号須恵器窯跡	£11	須恵器	杯・口縁部	奈良時代	○	○
FBC95002	1号須恵器窯跡	£11	須恵器	甕・体部	奈良時代	○	○
FBC95003	1号須恵器窯跡	£10	須恵器	甕・体部	奈良時代	○	○
FBC95004	1号粘土採掘坑	壁面	粘土	塊状	奈良・平安時代		○
FBC95005	1号粘土採掘坑	壁面	粘土	塊状	奈良・平安時代		○

2 試料

胎土薄片作製観察試料は、奈良時代の須恵器窯跡堆積物から検出された須恵器3試料である。また、X線回折分析試料には須恵器3試料と1号粘土採掘坑・10号粘土採掘坑から採取された粘土塊2試料である(表1)。

3 分析方法

土器胎土分析の方法としては、土器胎土中に含まれる岩片や鉤物粒の種類および量比を調べる方法と胎土の元素組成を調べる方法とがある。前者では、土器片をそのまま肉眼で観察するだけのものから、土器片を粉碎して砂粒を取り出す方法、さらに土器片の薄片を作製して顕微鏡観察を行うなどの方法がある。当社では、土師器以前の土器に関しては土器片粉碎による胎土の重鉤物分析を胎土分析の主な方法としてきた。しかし、本試料のような須恵器に関しては、材質の違い(焼成温度、砂の含量など)により、良好な分析結果が得られないために、土器片の薄片作製による胎土の観察と粉末X線回折分析を行う。なお、胎土試料については、粉末X線回折分析のみを行った。各分析方法の手順を以下に示す。

(a) 薄片作製観察

薄片は試料の一部を切断して、正確に 0.03mm の厚さに研磨して作製した。今回は、岩石学的手法を用いて構成鉱物および組織を中心に顕微鏡下で観察を行い、各試料の特徴把握および比較検討が可能な資料の作成に努めた。

(b) X線回折分析

・無定方位法

試料を乾燥、磨砕して粉末試料を作成した。粉末試料の一定量 (約 1 kg) を採取してアルミニウムホルダーに装着し、次の条件で X線回折試験を実施した。

装置：島津製作所製 XD-3A

Target：Cu (K α)

Filter：Ni

Voltage：30 KVP

Current：30 mA

Count Full Scale：5,000 c/s

Time Constant：1.0 sec

Scanning Speed：2°/min

Chart Speed：2 cm/min

Divergency：1°

Receiving Slit：0.3mm

Scanning Range：2～61°

全粉末試料は上の条件で回折試験を行ったが、ピークがスケールアウトする鉱物が存在する場合は適宜該当する範囲の 2θ 区間について Count Full Scale を 10,000 c/sec または 20,000 c/sec として再走査させ、正確な相対強度が計算できるようにした。

・定方位法および EG 処理定方位法

粉末試料について簡易水ひを行い、ガラス板上で風乾して定方位試料を作製し、Scanning Range を 2～30° (2θ) とした他は無定方位回折試験と同一条件で回折試験を行い、とくに粘土鉱物の存在の確認を行った。さらに、定方位法に用いた試料を EG (エチレングレコール) 処理した後、2～15° (2θ) Scanning Range について再度定方位法と同一条件で X線回折を行い、粘土鉱物を同定した。

4 結果および考察

(a) 薄片作製観察

須恵器 3 試料の薄片を顕微鏡観察すると、胎土中には碎屑片として鉱物片・岩片が含まれ、素地の主要構成物となる粘土鉱物・碎屑片は高温で焼成されているため、加熱変化を生じていることが

認められる。本文では、胎土の碎屑片の種類・量比を明らかにして、器物による差異を検討し、鉱物の加熱変化から焼成温度を推定した。各試料の観察結果を以下に述べる。またそれを一覧表にして表3に示す。

・FBC 95051 (杯口縁部)

鉱物片では石英が少量、カリ長石および斜長石が微量、不透明鉱物がきわめて微量認められる。石英は径1mm以下で、他の鉱物片は0.5mm前後の径を示す。また、岩片では最大径0.2mmのチャートと径1.1mmのシルト岩が微量認められる。どちらも亜角礫状を呈する。基質は全般に淡い灰色であり、配向性は弱い。粘土の比率は高いが、大型の鉱物片・岩片を含むため淘汰度は中程度～不良である。基質を構成しているのは多量の粘土鉱物と0.2mm以下の少量の石英であるが、粘土鉱物は高温焼成されているため残存せず、粒径0.01mm以下の針状～鱗片ムライトを晶出し、その集合体に変化している。

石英には高温加熱によるクラックと溶融が認められ、またカリ長石にも高温加熱による溶融が認められること、およびムライトの晶出が認められることから、本試料は1,200℃±の焼成温度と推定される。

・FBC 95052 (壘体部)

鉱物片、岩片ともに、観察される特徴は上記のFBC 95051とほぼ同様である。ただし、本試料では、シルト岩は認められず泥岩が認められる。基質の特徴もFBC 95051とほぼ同様であるが、一部に粒径最大0.25mmの酸化鉄が濃集した粒状の結核と粒径0.1mmの円形を示す化石を含む。酸化鉄結核は赤鉄鉱化している。推定される焼成温度も上記同様に1,200℃±である。

・FBC 95053 (壘体部)

鉱物片では、上記2試料でみとめられた石英、カリ長石、斜長石、不透明鉱物は本試料でもほぼ同様の特徴をもって認められるが、これらに加えて極めて微量の黒雲母と単斜輝石も認められる。黒雲母は最大径0.22mmで褐色を呈し、単斜輝石は径0.3mm程度で淡黄褐色を呈する。岩片では、径0.5～0.8mmの亜角礫状を呈するチャート、砂岩、石英片岩、凝灰岩、珪化岩が微量認められ、さらに径0.2mmの亜円礫状の泥岩と径2.9mmで亜円礫状のスコリア様物質が認められる。スコリア様物質は、黒色多孔質ガラスで構成されている。

基質の特徴は、上記2試料とほぼ同様である。また、推定される焼成温度も上記同様に1,200℃±である。

(b) X線回折分析

X線回折分析で得られたチャート上に同定鉱物の略号を付して添付(図1～15)した。以下に各試料について述べる。

・FBC 95051・FBC 95052・FBC 95053

須恵器3試料の結果はほぼ同様であり、無定方位法X線回折分析により、中量の石英、少量のムライトが検出される。また、定方位法では、簡易水ひにより、石英の一部が除去されるため、この

回折強度はやや減少する。これら3試料からは、粘土鉱物は検出されない。

・FBC 95054 (1号粘土探掘坑)

無定方位法X線回折分析により、多量の石英、少量～微量の斜長石・カリ長石、微量の雲母鉱物・カオリナイト、痕跡程度のスメクタイト(モンモリロナイト)が検出される。

なお、雲母鉱物とした鉱物のX線回折線は白雲母の一種で、muscovite 1 Mとされるものを標準として解析しているが、黒雲母もこれときわめて近似した回折線を有するため微量に含まれている場合には、X線回折線のみで両者を区別することは困難である。したがって、本文の「雲母鉱物」は白雲母・黒雲母、あるいは堆積岩中のセリサイトまたはイライトに対する用語として用いた。雲母鉱物の細区分は顕微鏡観察等を要する。

定方位法では、簡易水ひにより、石英の一部が除去されるため、この回折強度は減少し、相対的に粘土鉱物のカオリナイト・雲母鉱物・スメクタイトが濃集する。

EG処理定方位法では、 14.2\AA ($2\theta: 6.2^\circ$)の回折線は 17.7\AA (5.0°)に移動する傾向がみられ、痕跡程度のスメクタイト(モンモリロナイト)が検出される。

・FBC 95055 (10号粘土探掘坑)

無定方位法X線回折により、多量の石英、少量～微量の斜長石・カリ長石、微量の雲母鉱物・カオリナイト、痕跡程度のスメクタイト(モンモリロナイト)が検出される。

定方位法では、簡易水ひにより、石英の一部が除去されるため、この回折強度は減少し、相対的に粘土鉱物のカオリナイト・雲母鉱物・スメクタイト(モンモリロナイト)が濃集する。

EG処理定方位法では、緑泥岩の 14.2\AA ($2\theta: 6.2^\circ$)の回折線は 17.7\AA (5.0°)に移動する傾向がみられ、痕跡程度のスメクタイト(モンモリロナイト)が検出される。

薄片の顕微鏡観察により、FBC95051とFBC95052はほぼ同質の須恵器と考えられるが、FBC95053はこれら2点とはやや異質であるといえる。一方、X線回折では3点ともに同様の結果となったが、これは、石英とムライトとしか捉えられなかったために区別ができなかったことによる。このムライトという鉱物は、カオリナイトなどの粘土鉱物が熱分解によって生成する鉱物である(岩生ほか; 1985)。本分析の粘土探掘坑の粘土試料はどちらもカオリナイトなどの粘土鉱物を含むから、これを使って作られた須恵器があった場合、そのX線回折分析結果は、本分析の須恵器試料とほぼ同様な結果になると考えられる。ただし、石英やカオリナイトを含む粘土は、分布域に限られるような特殊な粘土ではないから、今回の分析結果は、須恵器試料とを直接結びつけるものでもない。

ところで、須恵器等の原料となる粘土中に含まれる鉱物片・岩片は粘土供給源となる後背地の地質を反映することから、FBC95053の原料となった砂または粘土の採取地は、他の2点のそれとは異なる可能性がある。現時点では具体的な粘土や砂の採取地を推定することはできないが、まず遺跡周辺の地質と3点の須恵器試料の胎土とを比較してみたい。

大猿田遺跡周辺の山地を構成する地質は、上部白亜系とされる双葉層群や古第三系とされる白水層群などの堆積岩である(日本の地質「東北地方」編集委員会; 1989)。FBC95051およびFBC95052

に認められた鉱物片・岩片の種類は、この地質と異質なところはない。一方、FBC95053に認められた鉱物片・岩片のうち、黒雲母や単斜輝石および石英片岩や凝灰岩などは、上記の地質とはやや異質な種類であるといえる。これらの鉱物片や岩片の由来として、周辺地域では、上記地質に分布域よりも西側にあるカコウ岩帯や八基地域の変成岩や火山岩などを考えることができる。FBC95053の胎土は、遺跡周辺ではこのような地質に由来するのかも知れない。

本分析では、3点の土器試料と2点の粘土試料の分析だけであったが、複数の胎土の存在が示唆され、しかも遺跡周辺の地質との関係も考えられたことが成果であったといえる。いずれにしても現時点では、胎土の由来について具体的な地域や場所を考えることはできない。遺跡周辺域ではなく、もっと遠方の地質に由来する可能性もある。今後は、土器についても粘土や砂などの自然堆積物についても分析例を蓄積し、解析を進めることが必要であろう。

〈引用文献〉

日本の地質「東北地方」編集委員会(1989)「日本の地質2 東北地方」338p. 共立出版
 岩生周一・長沢敬之助・宇田川重和・加藤忠蔵・喜田大三・青柳宏一・渡邊裕(1992)「粘土の辞典」504p.
 朝倉書店

表2 薄片顕微鏡観察結果

No	鉱物片					岩片							素地鉱物			素地の性状			推定焼成温度(°C)	備考				
	Qz	Kf	Pl	Bi	Cpx	Op	Ch	Ss	Silt	Md	Tf	Sc	Q-s	Si	Mu	Qz	FeC	Col			Ori	Clay	Sort	
1	△	+	+			±	+	+							△	+	±	+	+	○	△	+	1,200	
2	△	+	△			+	+		+						△	+	+	△	+	○	△	+	1,200	
3	△	±	±	±	±	±	±	+		+	±	+	+	+	△	+	+	+	+	○	+		1,200	

注

試料 1: FBC95051 2: FBC95052 3: FBC95053

鉱物片略記号 Qz: 石英 Kf: カリ長石 Pl: 斜長石 Bi: 黒雲母 Cpx: 単斜輝石 Op: 不透明鉱物

岩片略記号 Ch: チャート Ss: 砂岩 Silt: シルト岩 Md: 泥岩 Tf: 凝灰岩 Si: 珪化岩

Q-s: 片状石英岩 Sc: スコリア燻物質

素地鉱物略記号 Mu: ムライト Qz: 石英 FeC: 酸化鉄結核

量比 ◎: 多量 ○: 多量～中量 △: 中量 ○△: 中量～少量 △: 少量 △+: 少量～微量 +: 微量 ±: 微量～きわめて微量 ±: きわめて微量

素地の性状 Col 素地の色調 ○: 濃色 ○△: 濃色～中間色 △: 中間色 △+: 中間色～淡色 +: 淡色

Ori 素地の配向性 ○: 強い ○△: 強い～中程度 △: 中程度 △+: 中程度～弱い +: 弱い

Clay 粘土部の量 ○: 多い ○△: 多い～中程度 △: 中程度 △+: 中程度～少ない +: 少ない

Sort 海次の程度 ○: 良好 ○△: 良好～中程度 △: 中程度 △+: 中程度～不良 +: 不良

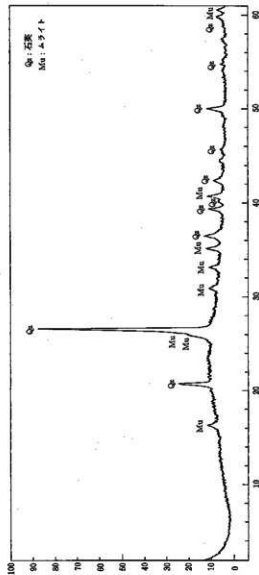


図1 試料番号PBC95051 (杯・口縁部) X線回折チャート (解定方位法)

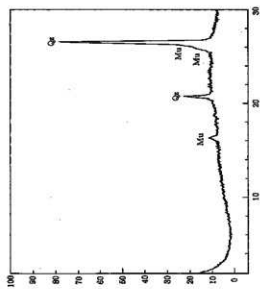
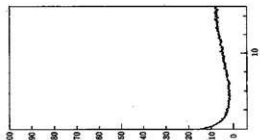


図2 試料番号PBC95051 (杯・口縁部) X線回折チャート (定方位法)

Mineral Name	
Specimen No.	PBC 95051 (杯・口縁部)
Locality	大塚山遺跡
Recording Method	
Target	Cu
Filter	Ni
Voltage	50 KVP
Current	50 mA
Counter Type	SC
Count Full Scale	5,000 c/s
Scale Factor	
Multiplexer	
Time Constant	1.0 sec
Scanning Speed	2°/min
Chart Speed	2 m/min
Divergency	1°
Resolving slit	0.3mm
解定方位法 (7要素標準試料)	
3θ = 41 ~ 2°	
Collector	陽極線文化センター
Operator	中 島
Date	



Mineral Name	
Specimen No.	PBC 95051 (杯・口縁部)
Locality	大塚山遺跡
Recording Method	
Target	Cu
Filter	Ni
Voltage	50 KVP
Current	50 mA
Counter Type	SC
Count Full Scale	5,000 c/s
Scale Factor	
Multiplexer	
Time Constant	1.0 sec
Scanning Speed	2°/min
Chart Speed	2 m/min
Divergency	1°
Resolving slit	0.3mm
定方位法 (標準水O-9ガラス標準管)	
3θ = 18 ~ 2°	
Collector	陽極線文化センター
Operator	中 島
Date	

図3 試料番号PBC95051 (杯・口縁部) X線回折チャート (定方位法-BC処理)

Mineral Name	
Specimen No.	FGC 95052 (鑛・体部)
Locality	大塚山遺跡
Recording Method	
Filter	Cu
Fluor.	Ni
Voltage	30 KVP
Current	30 mA
Counter Type	SC
Count full Scale	5,000 c/s
Scale Factor	
Multiplier	
Time Constant	1.0 sec
Rotating Speed	2°/min
Chart Speed	2 cm/min
Divergency	1°
Recording Sls	0.3mm
測定方法 (フイルム法)	
$2\theta = 01 - 2^\circ$	
Collector	藤田福成文化センター
Operator	中 野
Date	

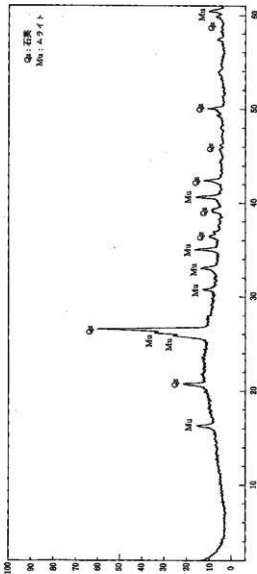


図4 試料番号FGC95052 (鑛・体部) X線回折チャート (無定方位法)

Mineral Name	
Specimen No.	FGC 95051 (鑛・体部)
Locality	大塚山遺跡
Recording Method	
Target	Cu
Filter	Ni
Voltage	30 KVP
Current	30 mA
Counter Type	SC
Count full Scale	5,000 c/s
Scale Factor	
Multiplier	
Time Constant	1.0 sec
Rotating Speed	2°/min
Chart Speed	2 cm/min
Divergency	1°
Recording Sls	0.3mm
測定方法 (無定方位法)	
$2\theta = 30 \sim 2^\circ$	
Collector	藤田福成文化センター
Operator	中 野
Date	

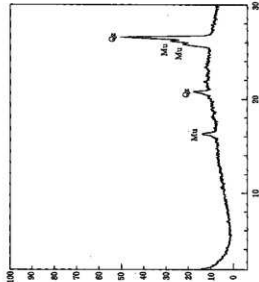


図5 試料番号FGC95052 (鑛・体部) X線回折チャート (定方位法)

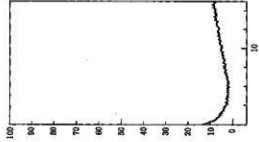


図6 試料番号FGC95052 (鑛・体部) X線回折チャート (定方位法-BG処理)

Mineral Name	
Specimen No.	FGC 95051 (鑛・体部)
Locality	大塚山遺跡
Recording Method	
Target	Cu
Filter	Ni
Voltage	30 KVP
Current	30 mA
Counter Type	SC
Count full Scale	5,000 c/s
Scale Factor	
Multiplier	
Time Constant	1.0 sec
Rotating Speed	2°/min
Chart Speed	2 cm/min
Divergency	1°
Recording Sls	0.3mm
測定方法 (BG処理)	
$2\theta = 15 \sim 2^\circ$	
Collector	藤田福成文化センター
Operator	中 野
Date	

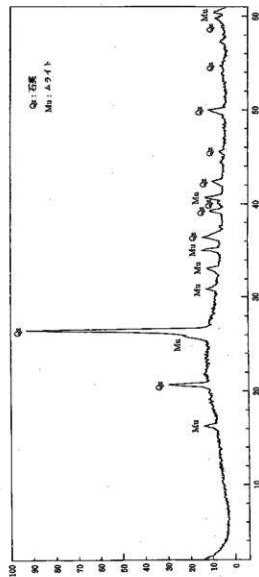


図7 試料番号FBC95053 (體・体部) X線回折チャート (無定方位法)

Mineral Name	
Spectrum No.	FBC 95053 (體・体部)
Locality	大畑山遺跡
Recording Method	
Target	Qs
Filter	Ni
Voltage	30 KVP
Current	30 mA
Counter Type	SC
Count Full Scale	5,000 c/s
Scale Factor	
Multiplex	
Time Constant	1.0 sec
Scanning Speed	2°/min
Chart Speed	2 cm/min
Divergency	1°
Resolving Slit	0.5mm
Recording Slit	
無定方位法 (7θ:1 級位法)	
θ 角 = θ ₁ ~ θ ₂	
Collector	藤原辰夫文化センター
Operator	中 野
Date	

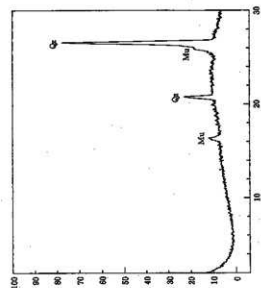


図8 試料番号FBC95053 (體・体部) X線回折チャート (定方位法)

Mineral Name	
Spectrum No.	FBC 95053 (體・体部)
Locality	大畑山遺跡
Recording Method	
Target	Qs
Filter	Ni
Voltage	30 KVP
Current	30 mA
Counter Type	SC
Count Full Scale	5,000 c/s
Scale Factor	
Multiplex	
Time Constant	1.0 sec
Scanning Speed	2°/min
Chart Speed	2 cm/min
Divergency	1°
Resolving Slit	0.5mm
Recording Slit	
定方位法 (無定水O-ガラス板使用材料)	
θ 角 = θ ₁ ~ θ ₂	
Collector	藤原辰夫文化センター
Operator	中 野
Date	

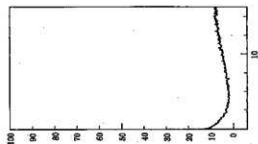
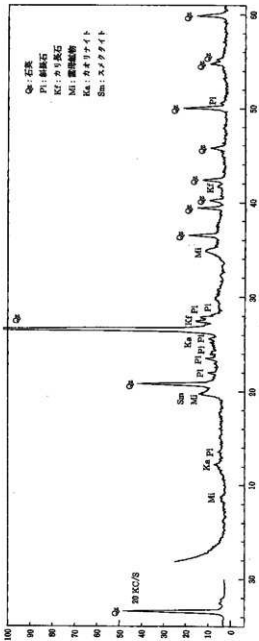


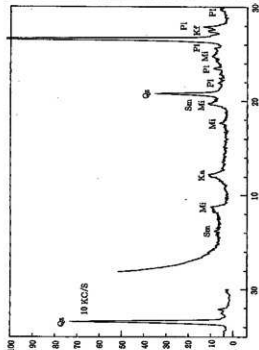
図9 試料番号FBC95053 (體・体部) X線回折チャート (定方位法-BC処理)

Mineral Name	
Spectrum No.	FBC 95053 (體・体部)
Locality	大畑山遺跡
Recording Method	
Target	Qs
Filter	Ni
Voltage	30 KVP
Current	30 mA
Counter Type	SC
Count Full Scale	5,000 c/s
Scale Factor	
Multiplex	
Time Constant	1.0 sec
Scanning Speed	2°/min
Chart Speed	2 cm/min
Divergency	1°
Resolving Slit	0.5mm
Recording Slit	
定方位法 - EG 処理 (無定水O-ガラス板使用)	
θ 角 = θ ₁ ~ θ ₂	
Collector	藤原辰夫文化センター
Operator	中 野
Date	



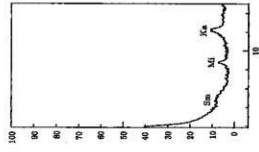
Mineral Name	試料番号 FBC 95054 (粘土)
Specimen No.	大塚山産物
Locality	大塚山産物
Recording Method	
Target	Cu
Filter	Ni
Voltage	35 KVP
Current	30 mA
Counter Type	SC
Count Full Scale	5,000 c/s
Scale Factor	
Time Constant	1.0 sec
Scanning Speed	2° / min
Chart Speed	1° / min
Divergency	1°
Revolving SH	
測定方法 (標準法)	
2θ = 5 ~ 35	
Collector	藤原通文文化センター
Operator	中 嶋
Date	

図10 試料番号FBC95054 (粘土) X線回折チャート (測定方法)



Mineral Name	試料番号 FBC 95054 (粘土)
Specimen No.	大塚山産物
Locality	大塚山産物
Recording Method	
Target	Cu
Filter	Ni
Voltage	35 KVP
Current	30 mA
Counter Type	SC
Count Full Scale	5,000 c/s
Scale Factor	
Time Constant	1.0 sec
Scanning Speed	2° / min
Chart Speed	1° / min
Divergency	1°
Revolving SH	
測定方法 (標準法)	
2θ = 5 ~ 35	
Collector	藤原通文文化センター
Operator	中 嶋
Date	

図11 試料番号FBC95054 (粘土) X線回折チャート (測定方法)



Mineral Name	試料番号 FBC 95054 (粘土)
Specimen No.	大塚山産物
Locality	大塚山産物
Recording Method	
Target	Cu
Filter	Ni
Voltage	35 KVP
Current	30 mA
Counter Type	SC
Count Full Scale	5,000 c/s
Scale Factor	
Time Constant	1.0 sec
Scanning Speed	2° / min
Chart Speed	1° / min
Divergency	1°
Revolving SH	
測定方法 (標準法)	
2θ = 5 ~ 35	
Collector	藤原通文文化センター
Operator	中 嶋
Date	

図12 試料番号FBC95054 (粘土) X線回折チャート (測定方法 - EG処理)

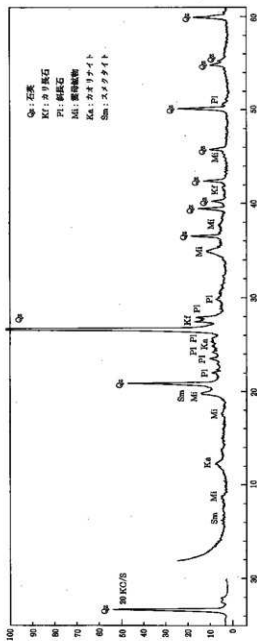


図13 試料番号FBC95055 (粘土) X線回折チャート (無定方位法)

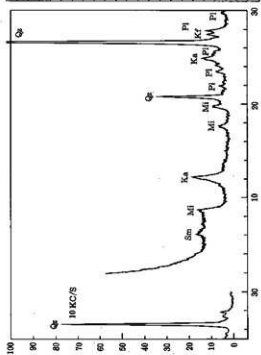


図14 試料番号FBC95055 (粘土) X線回折チャート (定方位法)

Mineral Name	
Specimen No.	FBC 95055 (粘土)
Locality	大瀬田産物
Recording Method	Cu
Target	Ni
Filter	NI
Voltage	30 KVP
Current	30 mA
Counter Type	SC
Count Full Scale	5,000 c/s
Scale Factor	
Multiplicator	
Time Constant	1.0 sec
Scanning Speed	2°/min
Chart Speed	2 cm/min
Divergency	1°
Recording slit	0.3mm
測定方位法 (7.6.1.1.1.1.1.1)	
$2\theta = 61 \sim 7^\circ$	
Collector	藤島電気化学センター
Operator	中 根
Date	

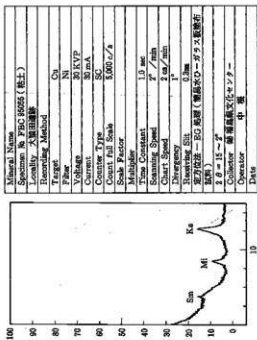
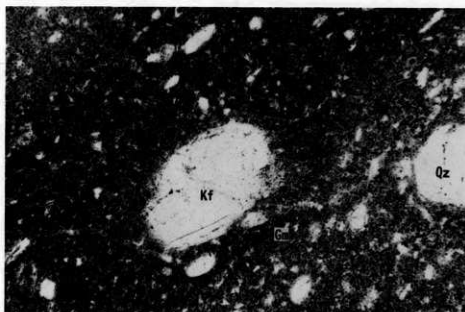


図15 試料番号FBC95055 (粘土)
X線回折チャート (定方位法 - EG処理)

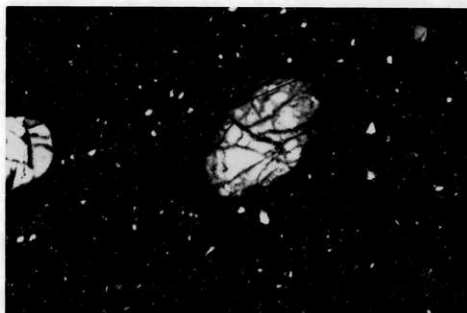
Mineral Name	
Specimen No.	FBC 95055 (粘土)
Locality	大瀬田産物
Recording Method	Cu
Target	Ni
Filter	NI
Voltage	30 KVP
Current	30 mA
Counter Type	SC
Count Full Scale	5,000 c/s
Scale Factor	
Multiplicator	
Time Constant	1.0 sec
Scanning Speed	2°/min
Chart Speed	2 cm/min
Divergency	1°
Recording slit	0.3mm
測定方位法 (7.6.1.1.1.1.1.1)	
$2\theta = 30 \sim 7^\circ$	
Collector	藤島電気化学センター
Operator	中 根
Date	



Kf: カリ長石, Gm: 基質, Qz: 石英

下方ポーラー

0.2mm

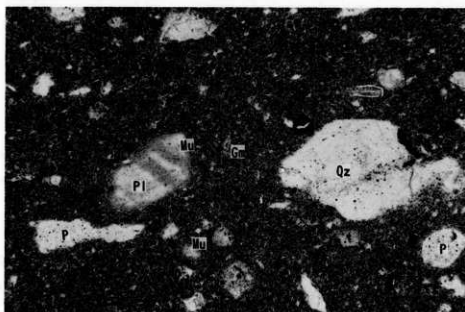


直交ポーラー

0.2mm



図版 1 FBC 95051 (杯) 試料 薄片顕微鏡写真



P: 孔隙, Pl: 斜長石, Mu: ムライト, Gm: 基質, Qz: 石英

下方ポーラー

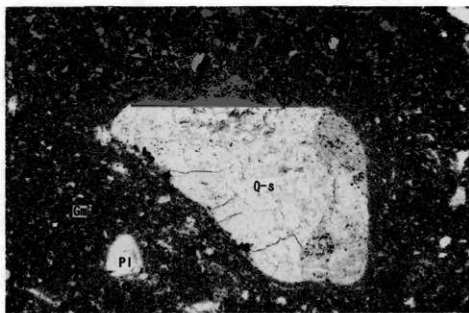
0.2mm



直交ポーラー

0.2mm

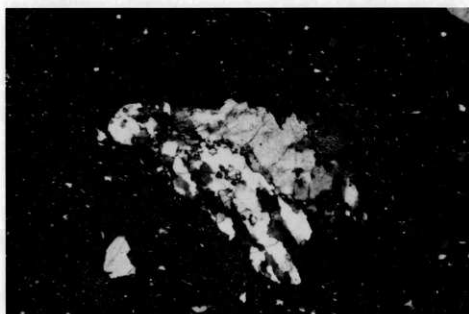
図版 2 FBC 95052 (雙) 試料 薄片顕微鏡写真



Gm: 基質, Pl: 斜長石, Q-s: 片状石英岩

下方ポーラー

0.2mm



直交ポーラー

0.2mm

図版 3 FBC 95053 (變) 試料 薄片顕微鏡写真

付章3 いわき市大猿田遺跡出土炭化材の樹種同定

パリノ・サーヴェイ 株式会社

1 はじめに

福島県における燃料材の用材選択は、相馬地域を中心に出土した製鉄燃料材などを中心に数多くの資料が得られている（嶋倉；1988・1990・1991・パリノ・サーヴェイ株式会社；1995a・1995bなど）。いわき市においても、タタラ山遺跡・駒込遺跡・馬場A遺跡で須恵器窯や炭窯から出土した炭化材の樹種が明らかにされている（パリノ・サーヴェイ株式会社；1995c）。これらの調査から、過去の用材選択の詳細が明らかになりつつある。しかし、地域差・時代差などについては、さらに資料の蓄積が必要である。

本報告では、本遺跡から出土した製炭材と考えられる炭化材の樹種を明らかにし、燃料材の用材選択に関する資料を得る。

2 試料

試料は、8世紀末～9世紀前葉の木炭焼成土坑の可能性のある10号土坑（SK10）から出土した、製炭材と考えられる炭化材20点（FBC950001～0020）である。

3 分析方法

木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接統断面）の3断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

4 結果および考察

炭化材は全てコナラ属コナラ亜属クヌギ節に同定された。解剖学的特徴などを以下に記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.)

ブナ科

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと同複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。

炭化材は全てクヌギ節であった。これらの炭化材は、燃料などを目的として製炭されたと考えられている。同様の炭化材については、いわき市タタラ山遺跡・駒込遺跡・馬場A遺跡でも樹種同定が行われている（パリノ・サーヴェイ株式会社；1995c）。その結果では、クヌギ節・コナラ節・クリを中心として合計11種類の木材が確認されている。しかし、土坑出土材では多くが1種

類または2種類で構成されている。本遺跡の結果もこれと同じである。

木炭が燃料とされた背景には、木炭のもつ高い還元効果があったと推定される。タカラ山遺跡で検出された須恵器窯や相馬地域に多数分布する製鉄炉では、焼成に還元炎を必要とする。実際に、製鉄炉などでは木炭を製炭するための炭窯を伴うことが多い(群馬県渋川市教育委員会; 1975・群馬県勢多郡大胡町教育委員会; 1994 など)。須恵器窯や製鉄炉で使用された燃料の樹種については、相馬地域の各遺跡で明らかにされているが、クヌギ節は比較的多く確認されている(嶋倉; 1988・1990・1992・バリノ・サーヴェイ株式会社; 1995 a・1995 b)。また、群馬県大胡町乙西尾引遺跡の調査例では、炭窯や製鉄炉から出土した炭化材3,540点中2,161点がクヌギ節であり、製鉄の燃料にクヌギ節を中心とした用材選択が指摘されている(高橋・鶴原; 1994)。これらの結果から、今回出土した製炭材についても、須恵器や製鉄等還元効果を必要とする際の燃料に利用されていたことが推定される。

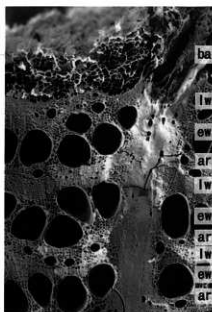
なお、今回出土した炭化材の中には樹皮が付いている試料(FBC950002)が確認された。この試料について、最終形成年輪の形成状況を観察した結果、早材部の形成は終了し、晩材部が形成中もしくは形成後であることが確認された(図版1)。このことから、晩夏~初春にかけて枯死または伐採された木材が燃料に使用されていることが指摘できる。民俗事例では、木炭の製炭は成長の止まる冬が最も良いとされていること(岸本; 1984)、冬が農閑期であることなどを考慮すれば、木炭は冬に製炭された可能性がある。木炭は吸着性が高く湿気に弱いことを考慮すれば、製炭してからそれほど時間が経過しないうちに目的の用途に利用したと推定される。したがって本報告の試料もおそらく程なく使われる予定であったものが、何らかの理由により土坑内に残ったのであろう。

〈引用文献〉

- 群馬県渋川市教育委員会(1975)『渋川市文化財発掘調査報告1 金井製鉄遺跡発掘調査報告書』p.34
- 嶋倉已三郎(1981)『武井地区製鉄遺跡群出土炭化木の樹種調査』『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅰ』p.299-356
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 岸本定吉(1984)『木炭の博物誌』p.260 総合科学出版
- 嶋倉已三郎(1990)『五台山B・鳥打沢A遺跡出土炭化木の樹種』『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅰ』
p.529-537 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 嶋倉已三郎(1992)『原町火力発電所関連遺跡出土炭化木の樹種』『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅲ』
p.753-762 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 群馬県勢多郡大胡町教育委員会(1994)『大胡西北部遺跡群』p.117
- 高橋 敦・鶴原 明(1994)『乙西尾引遺跡における製鉄燃料材について』『大胡西北部遺跡群』p.41-49
群馬県勢多郡大胡町教育委員会
- バリノ・サーヴェイ株式会社(1995a)『長瀬遺跡、大船廻A遺跡、前田C遺跡における炭化材同定』
『原町火力発電所関連遺跡調査報告V』p.1271-1304 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター

- パリオ・サーヴェイ株式会社 (1995b) 「原町市鳥打沢A遺跡・鳥井沢B遺跡・大船迫A遺跡から出土した炭化材・木材の同定」『原町火力発電所関連遺跡調査報告VI』p.621-632
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- パリオ・サーヴェイ株式会社 (1995c) 「いわき市タラ山遺跡・駒込遺跡・馬場A遺跡出土炭化材の樹種」『常磐自動車道遺跡調査報告4』p.196-206
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター

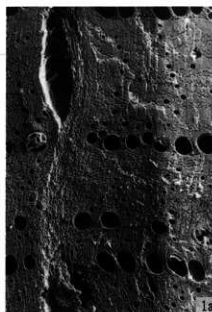
生長方向



クヌギ節における最終形成年輪の形成状況

ar: 年輪界, er: 早材部, lw: 晩材部, ba: 樹皮

100 μm



コナラ属コナラ亜属クヌギ節
(試料番号 FBC950011)

a: 木口



コナラ属コナラ亜属クヌギ節
(試料番号 FBC950011)

b: 柀目



コナラ属コナラ亜属クヌギ節
(試料番号 FBC950011)

c: 柀目

200 μm: a

200 μm: b, c

図版 1 炭化材樹種顕微鏡写真

付章4 いわき市大猿田遺跡における10号土坑のリン・カルシウム分析

バリノ・サーヴェイ 株式会社

1 はじめに

奈良・平安時代の集落跡からは、性格が不明とされる土坑が数基検出されている。それらのうち、平面形が円形を呈する円形土坑は、集落跡の調査状況などから墓塚である可能性がある。本報告では、これを検証することを目的として、円形土坑の覆土の化学分析を行う。

2 試料

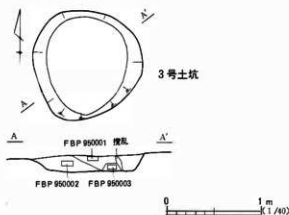
調査対照とした土坑は、3号土坑(SK03)である。

試料は、土坑の中央付近の覆土(遺構内堆積土 ℓ 1)の最上部より採取されたFBP950001、土坑南西部に覆土(遺構内堆積土 ℓ 2)より採取されたFBP950002、土坑の中央付近の下底部覆土(遺構内堆積土 ℓ 3)より採取されたFBP950003の3点と対照試料として土坑が掘り込まれている土層LIVから採取された1点(FBP950004)および調査区内の表土1点(FBP950005)の合計5点である。

3 分析方法

分析は、土壌標準分析・測定法委員会編(1986)、土壌養分測定法委員会編(1981)、京都大学農学部農芸化学教室編(1957)などを参考にした。なお、試料の土色は農林水産省技術会議事務局編(1967)に従い、土性はペドロジスト懇談会(1984)に従う。以下に、分析方法を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.0mmの篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105℃, 5時間)により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸(HNO_3) 5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸(HClO_4) 10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、100mlに定容して、ろ過する。今回は、リン酸含量をリン酸(P_2O_5)濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸濃度を測定する。別に、ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求



第1図 リン・カルシウム分析試料採取位置

めた水分量から乾土あたりのリン酸含量 (P_2O_5 mg/g) とカルシウム含量 (CaO mg/g) を求める。

4 結果および考察

分析結果を表2に示す。土坑覆土のリン酸含量は、いずれもほとんど差がなく、また対照試料とした土坑の掘り込まれている土層のFBP950004とも近い値を示す。表土の試料であるFBP950005は土坑覆土よりもリン酸含量がやや高い値を示す。土坑覆土のカルシウム含量は、FBP950001がやや高い値を示すが、それでも対照試料としたFBP950005よりは低い。他の2点はお互いに差が少なくまた対照試料のFBP950004とも近い値を示す。

表1 リン・カルシウム分析結果

遺 構 名	試料番号	出土層位	リン酸含量 P ₂ O ₅ mg/g	カルシウム含量 CaO mg/g	土 色	土性
3号土坑 (SK03)	FBP950001	遺構内堆積土ℓ1	0.29	0.64	10YR3/4 暗褐	L
3号土坑 (SK03)	FBP950002	遺構内堆積土ℓ2	0.33	0.42	10YR3/4 暗褐	L
3号土坑 (SK03)	FBP950003	遺構内堆積土ℓ3	0.31	0.33	10YR3/4 暗褐	L
遺構周辺の土	FBP950004	LIV	0.29	0.41	10YR3/4 暗褐	L
遺構周辺の土	FBP950005	表土	0.67	0.69	10YR3/3 暗褐	L

リン酸のいわゆる天然賦存量の報告例 (Bowen;1983・Bolt Bruggenwert;1980・川崎ほか;1991・天野ほか;1991)によれば、上限は約3.0 P₂O₅ mg/g程度と推定される。また、人為的な影響を受けた既耕地では5.5 P₂O₅ mg/g (黒ボク土の平均値) という報告例がある (川崎ほか;1991)。一方、カルシウム含量の天然賦存量は普通1~50 CaO mg/g (藤貫;1979)とされるが、その範囲はリン酸よりも大きい。したがって、これを著しく越える数値が得られた場合に、カルシウムの富化を指摘できる。

今回の分析結果では、いずれの土坑覆土も天然賦存量を越えることはなく、また対照試料と同様かあるいは低い値を示す。さらに土坑内でのリン酸含量の遍在も認められない。この状況は、カルシウム含量についても同様である。したがって、本分析結果からは、3号土坑が墓塚であるとすることはできない。ただし、土坑構築後から現在までに至る時間の中で、土坑を取り巻く環境によっては、土壤中のリン酸やカルシウム分も拡散し、流亡してしまう可能性があり、本結果だけにより、墓塚である可能性を否定してしまうこともできない。

今後の類例の発掘調査と分析例の蓄積により、本土坑のような遺構の再評価も可能となるであろう。

〈引用文献〉

- 京都大学農学部農芸化学教室編 (1957) 『農芸化学実験書 第1巻』 p.411 産業図書
 農林水産省技術会議事務局編 (1967) 『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』 p.28-36
 農林水産省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 『新版標準土色帖』
 藤貫 正 (1979) 「カルシウム」 『地質調査所化学分析法』 52:57-61 地質調査所
 Bolt, H.G.・Bruggenwert, M.G.M (1980) 『土壌の化学』 岩田進午・三輪孝太郎・井上隆弘・陽 捷行訳
 p.309 [H.G.Bolt and M.G.M.Bruggenwert (1976) *SOIL CHEMISTRY*] p.235-236

土壤養分測定法委員会編 (1981)『土壤養分分析法』p.440 養賢堂

Bowen, H.J.M. (1983)『環境無機化学—元素の循環と生化学—』浅見輝男・茅野充男訳 p.297博友社

[H.J.M.Bowen (1979) *Environmental Chemistry of Elements*]

ペドロジスト懇談会 (1984)『野外土性の判定』

ペドロジスト懇談会編 (1984)『土壤調査ハンドブック』p.39-40

土壤標準分析・測定法委員会編 (1986)『土壤標準分析・測定法』p.354 博友社

川崎 弘・吉田 澤・井上恒久 (1991)『九州地域の土壤型別畜積リンの形態別計量』

天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信 (1991)『中部日本以北の土壤型別畜積リンの形態別計量』

報告書抄録

ふりがな	じょうばんじどうしゃどういせきしょうさほうこく						
書名	常磐自動車道遺跡調査報告6						
シリーズ名	福島県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第329集						
編者名	佐久間芳雄・福島稔・佐藤祐雄・酒井俊・吉野滋夫・戸田伸夫						
編集機関	財団法人福島県文化センター 遺跡調査課						
所在地	〒960 福島県福島市春日町5-54 TEL 0245-34-2733 FAX 0245-36-3781						
発行年月日	西暦 1996年3月29日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おおきんだ 大猿田	ふくしま 福島県いわき市 よつゑまち 四倉町中島 あまのつら 字大猿田	07204 1024	37 07 29	140 56 57	19950412~ 19950929	9,000	道路(常磐自動車道)建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
大猿田	集落跡	古墳・古代	竪穴住居跡(11) 掘立柱建物跡(1) 須恵器窯跡(2) 木炭窯跡(3) 土坑(12) 粘土探掘坑(16)		縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石製品・土製品	古墳時代後期・平安時代の小規模な集落、奈良時代の鉄・須恵器の工人集落	

福島県文化財調査報告書第329集

常磐自動車道遺跡調査報告6

大猿田遺跡

(1次調査)

平成8年3月29日発行

編集 財団法人福島県文化センター(遺跡調査課)
 発行 福島県教育委員会(〒960)福島市杉妻町2-16
 御福島県文化センター(〒960)福島市春日町5-54
 日本道路公団仙台建設局いわき工事事務所
 (〒973)いわき市内郷高坂町八反田28-1
 印刷 御平電子印刷所(〒970)いわき市平北白土字西ノ内13

本報告書は中性紙を使用しています。

(本文 年史 80kg)
 (写真版 アート 110kg)